

東北きりたんが、結月
ゆかりを大好きな短編
小説集

甘味処

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

- ・ pixivとのマルチ投稿です。本人です。
- ・ 基本的に結月ゆかり視点です。
- ・ ゆかきり小説流行って欲しくてマルチ投稿してみました。

目次

① ゆかりさんによる、きりたんルート突入&突破RTA	1
② 家庭教師なゆかりさんと、優等生なきりたん	7
③ 笑顔なゆかりさんと笑顔なきりたん	14
④ ゆかりさんと、トリックでトリートなきりたん	28
⑤ ロリコン疑惑なゆかりさんと、ユカコンなきりたん	44
⑥ ゆかりさんと、魔法少女なきりたん	50
⑦ 白熱するゆかりさんと、白熱するきりたん（ポツキーの日）	63
⑧ ゆかりさんと、霊媒師（仮）のきりたん	70
⑨ 雪見だいふくを買ったゆかりさんと、きりたん（雪見だいふくの日）	77
⑩ きりたんと、熟睡中なゆかりさん	82
⑪ ゆかりさんと、懺悔するきりたん	102
⑫ 誕生日なゆかりさんを、攻略するきりたん（結月ゆかり誕生日）	111
⑬ 寒がつてるゆかりさんと、ホッカイロ	

なきりちゃん（大晦日）—— 127

⑭ こたつで蜜柑なゆかりさんと、甘酒な
きりたん（正月）—— 138

⑮ 求婚しちやつたゆかりさんと、受け
ちやつたきりたん —— 147

⑯ 初夢なゆかりさんと、東北地方の秘匿
事項を漏らしたきりたん —— 162

⑰ 飼い主なゆかりさんと、飼い主なきり
たん —— 177

⑱ デイフェンスなゆかりさんと、オフエ
ンスなきりたん —— 195

⑲ 告白し続けるゆかりさんと、告白し続
けるきりたん —— 202

⑳ 嫁になったゆかりさんと、夫になった
きりたん —— 213

☒ ヤンデレなゆかりさんと、デレデレな
きりたん。（きりたん誕生日）—— 222

☒ 初めてのゆかりさんを、優しくリード
する経験者なきりたん —— 232

☒ 穴を棒でゴリゴリするゆかりさんと、
脱力し気持ちよくなるきりたん —— 246

☒ 味わわれるゆかりさんと、味わうきり
たん。 —— 280

☒ ゆかりさんと、アップグレードしたき
りたん —— 304

☒ ゆかりさんと、お腹が大きくなったき

りちゃん

312

書くきりたん

377

☒結婚間近なゆかりさんと、お布団なき

☒平坦なゆかりさんと、悪夢を見たきり

りたん（エイプリルフール）

たん（プロポーズの日）

384

324

☒ハーレムなゆかりさんと、増えるきり

たん。

395

たん。

340

☒赤ちゃんなきりたん、お母さんなゆ

☒拘束されたゆかりさんと、暴発したき

かりさん。

401

りたん

351

☒プール日と水着で協力プレイな、ゆ

☒奪われたゆかりさんと、裏切りのきり

かりさんときりたん

415

たん

358

☒きりたん、IAさんと、ゆかりさんと

☒打ち返すゆかりさんと、嫉妬するきり

きりたん【番外編？】

427

たん

368

☒悪女なゆかりさんに、貢ぐきりたん

☒赤ペン先生なゆかりさんと、反省文を

439

- ☒三姉妹になりたい琴葉姉妹と、ゆかり
さんときりたんと、ちよつとだけずん子
さん【ずんぱ記念】 451
- ☒ベツトの上で汗だくになりながら互い
の体をいじり合うゆかりさんときりた
ん。 462
- ☒元旦なゆかりさんとずん子さんと、寝
正月へ突き進むきりたん 475
- ☒エッチな動きをするゆかりさんと、
しやつくりするきりたん 484
- ☒マキさんと、“かわいさ”が上昇中な
ゆかりさん 491
- ☒ポケット付きなゆかりさんを、日々調
りたん（ゴールデンウィーク初日、掲示板
教してるきりたん 500
- ☒選択するゆかりさんと、選択されたき
りたん。 508
- ☒前世を占ってもらう、ゆかりさんとき
りたん 517
- ☒村人なゆかりさんと、神獣なきりたん
ぬ 521
- ☒染まるゆかりさんと、潰れるきりたん
 535
- ☒お留守番予定なゆかりさんと、宇宙よ
り大切にされてるきりたん 542
- ☒1割結婚しちゃったゆかりさんと、き
りたん（ゴールデンウィーク初日、掲示板



① ゆかりさんによる、きりたんルート突入&突破RTA

私、結月ゆかりと東北きりたんとの出会いは、彼女の姉である東北ずん子さんの家（名家らしく、すごい豪邸だった）にいつものメンバーでお泊まりに来ていた時だった。

「はじめまして。ずん姉さまのお友達ですね。ゆっくりしてってください」

丁寧な言葉に、丁寧なお辞儀。

初対面における彼女の印象は、小学5年生とは思えないほどに、しつかりしていて好感を持った。

けれど、一線を引いたような…物静な彼女が他者に対して作っている壁、のような物を同時に感じた。

「結月…さん？も、このゲームやってるんですか？って、えっ、【Y u k a r i】って…」

神がかったいる料理スキルを持つマキさん主導で昼食を皆で作り、きりたんを昼食に呼びに行くと、ドア全開の部屋で私も最近嵌っている

FPSのゲームをやっていた。

話してみると良く協力プレイをしていたフレンドだったらしく、そのまま肩を並べてゲームをすることに。

「ゆかりさん。このルートの方が速く行けて、有利になりますよ?…あれ?そこ飛び越えられたんですか!?!ってことは…」

ふんふんと息をあらげて、密着して私が持つタブレットの画面を覗き込むころには、きりたんへの最初の静かなイメーজなど吹っ飛んでいた。

そして、心配して見に来たIAさんが現れ…。そこでようやく昼食のことを思い出した私は、きりたんセットで微笑ましいものを見る目で見られてしまった。不覚。

「この体勢、2つも画面が見れて、新・感・覚!ですわね!!さあ、ゆかりさん!!夜はまだま

だ長いし、がんばりましょう！」

朝食をすました後も、きりたんの部屋に誘われ、そのままゲームをすることになった。それは夕飯を食べ、一緒にお風呂に入った後も続いた。

昼に比べてさらに積極的に部屋に引つ張られた私は、きりたんぽやずんだ餅？型のクツシヨンを背に、ベットに座らせられた。

そして割と遠慮の無い動きで、きりたんが私の膝の上に乗る。

私はきりたんの膝の上に手を置いて、操作を始めた。

「くびー、くびー」

小学生らしく夜10時を超えたあたりで私の胸を枕に寝落ちした。私も、きりちゃんごと毛布をかぶって、すぐに寝てしまったらしい。

朝、幸せそうなきりちゃんの寝息の他に、鳴った電子音に目を覚ますと、

抱きつくように寝入った私ときりちゃんの様子を琴葉姉妹に写真を撮られていた。

画像はLINEグループに拡散済みだった。…不覚。

「やだ!!ゆか姉、帰っちゃダメ!!…そうだ!ここに住んで、私のお姉ちゃんになってください!!私の部屋を使つて良いですから!!」

ニヤニヤとした周りにからかわれつつも、朝食をいただき帰ろうとするとパジャマ姿で起きたきりちゃんが、

必死にしがみ付いて来て、泣いて無理を言い出した。残念ながら東北弁は話せないの
で《東北ゆかり》になるのは無理だと思う。

それよりも、いつも泰然として余裕が滲み出ているずん子さんの苦笑いは初めて見た
気がする。

妹を寝取ってしまった謎の罪悪感があるのだが、不可抗力だ。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

この子の懐きやすさと言うか、チヨロさ具合に将来を不安に思いつつ、何とか説得し
て私は帰ることができた。

ただ、帰路は私の部屋に一泊することが決定して鼻歌を口ずさむ、上機嫌な、きりちゃ
んの手を握りながら…だった。

…私、押しに弱いのだろうか。自身の将来にも一抹の不安を感じた。

「ゆか姉！今日こそは朝までゲームしますよ！寝たらたたき起こしちゃうからね！…あつ、もちろんゆか姉と一緒に別のゲームでもOKですよ！」

その日は敬語が崩れるほどに興奮しながらゲームをした、きりちゃんはその代償なのか夜9時前に寝入った。

…のは良いのだが、寝る寸前に寝ぼけながら体の向きを変え、しがみついていた。安心してしまった寝顔と、小学生だからか高い体温に、私も睡魔に襲われる。

Z 写真を撮られてからかわれた時に、同じ過ちはしないと誓ったの…に…:…: Z Z

「くび、くびー…」

次の朝、東北家のお迎えが来た。

運転手付きな黒塗りのリムジンに起きぬように

きりちゃんを載せて、一連の

お泊りイベントは終わりを迎えた。

迎えにはずん子さんのお姉さんにしか見えない絶世の和装美女なお母さんが、

『こんなに、この子が気を許すなんて…』

『結月さん、ぜひ許婚に…』

『代々東北家には、《生やす》薬があるから跡取りも問題無いから…』

とか言っていたが、そんなエロ同人誌的なブラックジョークを朝から切り返せるはずも無く、日本人特有のなあなあな会話で流しておいた。

と言うか、お宅の娘さん、多分一緒にゲームすれば誰にでも気を許す気が… ちよろすぎて不安になるレベルなんだけど。

「ゆ、ゆか姉… じゃなくて、ゆかり、さん。その、す、未永くよろしくお願いいたしま
すです… です。」

… あの時、なあなあで返すのでは無く、しつかり断っておけば良かったと後悔したのは、その日の夕方に、きりちゃんからLINE通話で、

めちやくちや意識した挨拶を聞かされた後だった。色々吹き込まれて、きりちゃん自身も覚悟を決めたらしい。どうしてこうなった。

… ふ、不覚。

②家庭教師なゆかりさんと、優等生なきりたん

東北きりたんとの出会いから一週間経った。物凄い勢いで慕われて、しがみつかれて、危うくゴールイン（婚約的な意味で）しそうになって必死に回避した。

涙目になって自分の事が嫌いなのかと、服の袖を引つ張るきりたん。今後の人生でも、恐らくこれ以上の困難は無いと悟った。

・・・
と言うかあつて欲しくない。

「ゆかりさん、私は思うんですよ。人は何故、分かり合えないのでしょうか。私はゆかり

さんを、こんなにも愛してるのに。らぶ&ぴーす。愛は世界を救いますよ。」

きりちゃんの部屋に着くなり奇妙な寸劇が始まっていた。

また何か変なネットの情報を聞きかじったのか、愛を囁きながら物憂げな表情に伏しがちの瞳で——傍から見れば誰しも惹きつけられてやまないのだろう。整った容貌と悲しげな表情を表せるのは。持って生まれた才能だと思う。…ほんとに小学生かこいつ。

私は隣で憂い気な表情を浮かべるきりちゃんを横目で見ながら、軽く無視して部屋の中央、小さな丸机の近くに腰をおろす。

「ゆかりさん、じと目も似合いますね…。えへへ、やっぱり美人さんですよ。ゆかりさん。」

先ほどまでの物憂げな雰囲気捨て、当たり前のようにきりちゃんはびたりと私にくつつくように座る。送った非難の視線は喜ばれる始末だ。

暖簾に腕押しなんて言葉があるが、効果が無い所か、最近の暖簾は絡みついてくるらしい。

邪気が無いからこそ、拒絶できないでいると、にこにこ顔を綻ばせて、下から私の

顔を覗き込んで来た。

「頬、赤くなってますね。美人って言われて嬉しかったですか？あつもちろん本心ですよ！安心してください!!」

「婚約は無くなったが、きりちゃんは相変わらず、私に分かりやすいほどの好意を向けてきている。」

「最近甘いだけ無く、からかうような言葉を投げてるようになったきりちゃんの手元に、持ってきた冊子を出す。」

「んう?… ああ、これがゆかりさんが使っていた教材なんです。つまりプレミア品ですね。言い値で買いますよ!… 冗談です。えっと、それじゃあ、お願いしますね。ゆかり先生?」

「いい加減垂れ流し続けている妄言を宥めようかと思つた矢先に話題を切り替えてくる。こちらの心情を察知したのだろう。まあ、良い。本題に入らなくては。」

「そう、私はきりちゃんの家庭教師、つまりは先生になっていた。」

の話は1週間ほど前に遡る。決まりかけていた婚約を白紙に戻そうとした私は、泣き顔のきりちゃんにしがみつかれて進退極まっていた。

そんな時に、ずん子さんから婚約を無かったことにする代わりにきりちゃんの家教師をして欲しい旨の提案を受ける。

そんな折衷案にもなっていない案だったが、私から見ても婚約も解消できて、きりちゃんもずん子さんに何やら囁かれた後しぶしぶ賛同し、無事可決された。

「ほうほう、このテキスト、かなり難しいですね。」

両親の出張が多く、半分一人暮らしをしているような私としても、たった30分の教師で、夕飯とお風呂にありつけて嬉しいのだが、

問題として別にきりちゃんに教える事など何も無いと言ったところだろう。大体きりちゃんは成績が学年トップクラス。はつきり言って別に教える事は一つなかった。今も、“かなり難しい”と言ったはずの《中学生向けの》テキストをスラスラと解いていた。

教師初日はきりちゃんの教科書等から問題を指定して解いてもらったが、ものの20分しない内に、教科書程度の内容には知識の穴が無いことが分かった。そして全問正解したご褒美として、少し早めに勉強を切り上げ、膝の上に乗ったきりちゃんとそのまま

ゲームをして：：相変わらず気づいたら寝てて、朝帰りすることになった。

「ゆかりさん、質問があります。」

それを踏まえて今回は私が中学生の時に通っていた塾のテキストを持ってきた。結構レベルが高く、しかも中学生を対象にしている塾のテキストだ。流石に小学生のきりちゃんには、分からない所があつたのだろう。先ほどまでスイスイ動いていたきりちゃんの手が止まっている。

ここに来てようやく教師らしい活躍ができる：：と、ほのかに緩めた頬は、

「ゆかりさんはデートに行くならどこに行きたいですか？」

完全に場違いな質問に凍ることとなる。

「気になって、勉強も手がつかないんです。それに、教えてくれたら勉強の意欲がぐぐぐっと上がります。」

何か断りづらい悪知恵をつけてきたが、まあ減るものでも無いしと某ネズミの楽園の

名称を告げた。

「それなら今週の土曜日か日曜日に行きましよう！あつ、テキスト終わりました。それじゃあ、ゲームの準備してきますね。」

いとも簡単に片付けられたテキストはもちろん満点で、私の今週末の予定が埋まることとなった。

……タチの悪いことに、きりちゃんとお出かけ自体には嫌な気はせず、むしろ私自身、楽しみに思えてしまっていた。

③ 笑顔なゆかりさんと笑顔なきりたん。

「ゆか姉?…その、どうでしたか?」

不安気に、そして気遣うように私に《結果》を聞く、きりちゃん。

就職活動を初めて半年になる。世間では景気もある程度上がってきていて、入っている大学も国内で上から数えて両手で足りるネームバリューを持っていた、だから、私は正直舐めていたのだろう。メールの内容はこれまでと同じ…

「また、不採用だった」

「…最近は、耳鳴りがずっとしている。」

「ゆ、ゆか姉を採用しないなんて、最低な会社ですね！そんなゴミ会社、こつちから願ひ下げですよ!!」

内定は一つも取れず、不採用は30社を超えている。今回面接は、これまで以上に手

応えもあつたはずだったのに…

最近は何親と顔が合わせずらく、家庭教師をしていたきりちゃんの家、東北家に居候している。

「そもそも、あの程度の会社如きが… ゆ、ゆか姉?!泣いちゃダメです!」

小学生に慰められている自分が情けなくて、涙が出そうなんて考えてたら、本当に出ていたらしい。

あわあわと焦り、昔私からしたように戸惑いながら頭を撫でてくれるきりちゃんに、人事のように笑いが出そうなる。

マキさんを初めとした友人達とは、最近疎遠になってしまっている。いや、そもそも彼女達も社会人になるために頑張ってるはず。みんな忙しくて当然だ。

結果として、きりちゃんだけが相変わらず隣にいてくれて、きりちゃんだけが私を支えようとしてくれていた…。きりちゃんだけが。

「… えっ、ゆか姉？」

気づいたら、きりちゃんをベットに押し倒していた。きりちゃんを、離したくなくて、離れたくなくて、私は、そのまま、困惑するきりちゃんを無理矢理…：

「ゆか姉、落ち着きました?」

事の後、あれだけ酷いことをした私に相変わらず、きりちゃんは優しく接してくれた。

「ふふ、ゆか姉のこと、前から好きだって言ってたじゃないですか。酷いこと、なんて私はされてませんよ?」

自己嫌悪で声も出せない私に、甘い言葉をかけてくれる。

「: : . ね、ゆか姉。家で働きませんか?家事とか、運転手とか、うちが傘下に収めてる会社でも良いです。ゆか姉なら、うちの家は誰も文句は: : . 明日にしましょうか。疲れていますよね?」

優しく髪を梳いてくれる小さな手に、睡魔が纏い、まぶたが重くなる。

「ふふふ…上手く行きました…ずうつと一緒ですよ？ゆか姉？」

眠る寸前に何かを呟くきりちゃんは、見たことも無いような、とても妖艶な笑顔で…

【ここまでの引用元】

↓きりたんの机に置いてあったノート

「ゆかりさん！ただいまです！！あなたの愛しのきりちゃんが帰って… あ」

今日も変わらず、東北家を訪れると、きりちゃんは学校の行事で遅くなっているらし

く、部屋に通された。

何気なく机の上に開いてあったノートを見ると、《きりちゃん》と《ゆか姉》の百合百合な、きりちゃん作の自作な官能小説が書いてあった。決して、現実の私が就活中なわけでも、小学生に手を出してゐるわけでもない。

しかもノートの内容が割とえぐい。登場人物の《ゆか姉》は同じく登場人物の《きりちゃん》に明らかに嵌められていた。

と言うのも、わざわざ赤ペンで《30社 不採用》の文章と《マキさん達と音信不通》の文章に、

《東北家の圧力》と書かれた文言から矢印が引つ張つてある。

ついでに、第2話は構想中らしく、まだ文にはなつてなかったが、次のページには「首輪」や「メイド服」等のキーワードが書かれている。ノートの中の《ゆか姉》の行く末は、寄り道なく進んで行くようだった。… 何処にとは言わないが。

「えっ…： 見ちゃいました？あれ？えっ…え？見ちゃったの？」

Spanienと勢い良く障子を開け放ち、恒例となった色惚けたセリフを言い終わら無いうちに、表情を凍らせるきりちゃん。

最近、調子に乗ったように、からかってくるが、それもナリを潜めている。

まあ、からかうと言つても私が不快に感じないよう細心の注意を払つてるのが節々に感じられ、微笑ましいのだが。

ふるふると震え、悪いことをした自覚がある、怒られる寸前の仔犬のようだった。

私は怒ってないことを伝えるため、笑顔で、いつも通り膝の上に座るように促す。

「ストロップ！待って！ゆかりさん待ってください！！声と笑顔が怖いです!」

失礼な。声は1オクターブ下がってしまったかもしれないが、表情は完璧なまでの笑顔だ。表情筋が微動だにしないレベルの。

「うう… お、お手柔らかにお願いします。」

私の平和的な意志が伝わったのだろう。ふらふらと私の膝に座るきりちゃん。

… 罪人見たいな様子で、それでもいつも通り私の膝上に収まるきりちゃんに、つい吹き出してしまった。

少し、脅し過ぎてしまったのかもしれない。

「ゆ、ゆかりさん？怒って… 無いん、ですね。」

おどおどとしながらも、察しが良いきりちゃんは、私のはほとんど気にしてないことに気付いたようだった。

内心で済ませてる分には自由だし、私だって人に言えない、いわゆる黒歴史的なものはある。

そしてきりちゃんの好意は十二分に伝わっていたので、想定範囲と言うか…

見てしまつて申し訳なさすら感じている。

とは言え、きりちゃんのためにも少しだけ注意をしなければならぬなと思いつつ、私は普段見せない、きりちゃんの力が抜けた笑顔を楽しむのであつた。

「良かった… あつ、でもネットに上げたら、凄い評判なんですよーあの小説！」

… この話は、めでたしめでたしで終わりかと思いきや、爆弾発言が出てきた。

えつ、あの小説をネットに？本名は無かったけど愛称がばっちり載ってて、知り合いが見たら誰のことだか分かるエロ小説を？流石に恥ずかしいのだけど…

「はい！さつき、私の小説が凄い評価されてるの、ずん姉様に自慢しちゃいました！ふふつ、大作家きりたんの誕生ですよ!!」

… さつきから、スマホが通知で唸ってる。見なくても分かる。LINEのグループ

通知だ。

明日友人達の前に顔を出すのがきつい。絶対からかわれる。

天然なIAちゃんあたりには、小学生に手をだしたら捕まってしまうと本気で心配されかねない。きつと、せめて卒業までは我慢できないかと、説得されるだろう。きつい。

「それで2話目はですね…。」

無邪気に今後の予定を話すきりちゃん。

… うん。残念ながら少しだけお仕置きをしなくてはならないようだ。

ふいに、きりちゃんに《くすぐったいと感じるのは、相手への信頼があるから》と言う話をする。

「へ？はあ、そうなんですか。」

唐突な話に、気の抜けた返事を返す、きりちゃん。

その無邪気な顔に少しだけ心が痛むが、

痛いことはしないし、悪かったことをしたと分からせてあげるのは姉のように慕ってくれる私の仕事だ。： 実の姉は、私をネタに盛り上がって手が離せないだろうし。

お仕置ききついでに、きりちゃんを私をどれだけ信賴してるか、確かめさせて貰おう。

「あれ？ゆかりさん。？何やら不穏な空気が。： うひゃ!?ぷっ、く、くすぐった、やめ。： あはっ、ひやはははは!!!」

後日きりちゃん曰く、その日は笑顔継続時間の過去最長記録を叩き出したらしい。

④ゆかりさんと、トリックでトリートなきりたん。

「ゆかりさん、いらっしやいませ。今日も勉強お願いしますね。」

部屋にお邪魔すると、慎ましげな微笑み、丁寧な挨拶、そして透き通る様な黒い瞳と髪……まさに和装の美少女な、きりちゃんがお出迎えしてくれた。

そしていつもと違い私にくつつかず、そのまま机に向かい合わせに座り、真剣な表情でもくもくと勉強をはじめめる。

そんなきりちゃんを見て私は……

絶対何か企んでる。もしくは偽者に違いない。本来のきりちゃんは、もっと残念なはずだ。

：．．．なんて感じた原因は、私の物の見方というより、きりちゃんの普段の行いに比重があると思う。

「んー… やっぱりゆかりさんにはバレちゃいますか。」

何をやらかすのかと、一挙手一投足を注意して見ながら勉強時間を終えると、騙されまいとしている私の態度に、困ったように苦笑し話し出すきりちゃん。

「実は今日。ハロウインのパーティをうちでやるんですよ。料理も装飾もすませています。それで、ゆかりさんを驚かしたくてギリギリまで内緒にしたかったんですが…。」

…なるほど。そういうことだったのか。何か不穏なものを私の勘が感じ取った気がしたが、ずいぶんとかわいい隠し事だったようだ。

だが今日のパーティ、実は私はずん子さん経由で既に知っていて、お呼ばれしてくれていたの、参加する気満々だったりする。

まあ、サプライズを考えてくれていたなら、わざわざ言うことでも無いし… 知っていたことは黙っていよう。

「ゆかりさん?…もしかして、今日は参加できなかったりします?」

考え事をしていたら、きりちゃんに服の裾を掴まれ、心配そうに顔を覗き込まれ思わずドキリとしてしまう。

記憶に新しい婚約破棄騒動の時もそうだったが、私はこの娘に見上げられるのが弱い。特に今見たいに心から不安がっているのが伝わると。

「そ、そうですか!それならさっそく着替えましょう!仮装ですよ仮装!!」

用事も無く、参加することを伝えると、喜んだきりちゃんに急かすように手を引つ張られて部屋を出ることに。

隠しごとと急な不安が無くなったからなのか、いつもの調子を見せるきりちゃんにほっとする私は、結構毒されてるのだなあと人事のように感じた。

「ほらほらゆかりさん!お揃いの衣装ですよ!!これはとある吸血鬼姉妹の衣装でして

ね… ってやっぱり元ネタ知っていますよね。さあ写真、写真撮りましょう!!」
着せ替え人形にされた… と言うには、きりちゃんの仮装がかわいく、私からも積極的に互いの衣装を着せあった。

そして衣装を決め、マキさん達が既に待ち、装飾が施されたパーティー会場に着き、料
理が並べられた机に近づくと、急にきりちゃんに腕をつかまれ…

「と言わけて、ゆかりさん《トリック オア トリート》、です」

先ほどまでの雰囲気を消し、きりちゃんはにやりと黒い笑みを浮かべて私に告げた。

…し、しまった!?! ハロウィンなんて参加するの初めてだし、お菓子の持ち合わせなんて用意してなかった!!

と言うより仮に偶然お菓子を持っていて、私の服装はさつき借りたもので、手荷物も全てきりちゃんの部屋に置いてきていて…はっ!

まさか、きりちゃんが企んでいたのって…!?

「どうしたんですか? ゆかりさん? もしかしてお菓子を持っていないのですか? それは残念ですねえ。私もお菓子を貰えないのはとても残念ですが、それなら体で払…ではなくて、イタズラをするしかありませんね。私としても、とっつても残念ですが。」

三度も繰り返したが、まったく残念さなど微塵も感じ得ない言葉。

そして芝居めいた悲しげな表情には不釣合いな、ゆるみがかった口元。

そして何より、わきわきと動くきりちゃんの両手。その様子は完全に変態だった…。割と前から知ってたけど。

「大丈夫。痛いことはしませんよ…。ところでゆかりさん。こんな話を知っていますか？くすぐったいって感覚は相手を信頼…。」

ついこの前、私がきりちゃんに話した事をそのまま返される。その後の顛末もすっかり記憶に残っている私は、この後きりちゃんに何をされるのか、しっかりと想像できてしまった。思っていた以上にきりちゃんは負けず嫌いだったらしい。

もちろん相手は無駄に高スペックとは言え、小学生だ。抵抗すればふりほどくことは簡単かも知れない。

けど、それは大人げ無いと言うか、フエアじやない気がする。私がお菓子を用意しなかったのは事実で、落ち度がある…。気がする。

それに、この前のくすぐり、やり過ぎてしまった罪悪感があり、抵抗しようとする意欲をガリガリ削っていった。

そして、とうとう怪しい笑みを抑えられなくなってきたきりちゃんの魔の手が近づき、私はしかたなく辱めを受け入れ…

ん？でも… そうだ!! お菓子ならある!! と気づき、

パーティー会場に用意された料理の内… カボチャプリンを取り、さつときりちゃんに
手渡す。

「あー。ダメですよ、ゆかりさん。そのプリンはうちで用意したものだからノーカン…」

えっ!? ゆかりさんの手作り!」

そう。ハロウィンパーティーを前から知っていた私は、参加させてもらう以上、多少は準備も手伝いたいと告げ、いくつか料理を持ち寄ったのだ。このカボチャプリンもその一つだったりする。

「そんな… ゆかりさんのあんなところやそんなところに手をつつこんで、合法的にもみもみ、さわさわ、触るチャンスが…」

いやそんな絶望しなくても… そして言い方が完全にエロ親父っぽい。

そしてハロウィンのイタズラは、別に法律で保障されてるわけではない。

「それはそうですが、ゆかりさんは変に真面目だから、落ち度が少しでもあれば受け入れてくれそーだなあと… えっ、もしかして食べさせてくれ… あっ、あっ、でも食べ

「ちやつたら…」

さつき私自身が考えていたことを的確に告げてくる、きりちゃんの口をふさぐために一口分に削ったプリンをスプーンに載せて近づけ、あーんと告げる。

困惑するきりちゃん。食べてしまえば、イタズラの権利は無くなるが、好意を抱いているらしい私の手で食べさせられる事にも魅かれて板ばさみにあっているようだった。ふらふらと視線をさ迷わせている。

そして迷うこと数秒後…

「あつ、あーん… んっ… おいひい、です… ゆかりさんの手作り… しかも食べさせて貰っちゃった… えへへ」

ついに屈して、開くきりちゃんのお口に、スプーンを差し入れる。

… 楽しい。なんだこれ凄い楽しい。

企みが上手く行かずくやしそうにするきりちゃん。けれども口元に近づけると律儀に口を開くきりちゃん。

美味しそうに、幸せそうに食べてくれるきりちゃん。
やばい。何か変な扉を開いたのかもしれない。

「来年こそは…もぐもぐ」

そんな呟きをカボチャプリンで押しつぶしつつ、1カップ分食べさせることに成功した私は、来年もきりちゃんに食べさせるために…では無く、来年もあるだろうきりちゃんの悪巧みを打ち破るために…

毎年カボチャプリンを作るのが私の恒例行事になることを悟ったのだった。

40 ④ゆかりさんと、トリックでトリートなきたん。

「…交代です。」

謎の達成感に満たされ、来年に思いを馳せていた私は、きりちゃんの一言で我に返った。

「ゆかりさんだけズルイです… 私もゆかりさんに食べさせたいです！」

食べ終わって、気を取り戻したきりちゃん。

この前から私にやられっぱなしで悔しいのだろう、涙目になりながらスプーンを差し出してきた。

ふと周りを見ると、全員バツと視線をそらす。ただし何人かは覆った両手の指の隙間からガン見していたり、スマホをこちらに向けている。

…あれ？私は衆人環視であんなバカップル染みたことを？

「ゆかりさん、お口開けてください…。お願いです。ほら、あーんですよ…。あつ！やった!! えへへ…。ゆかりさんはいい子ですわね。むふふ、頬が赤くなっていますよ。かわいいです。ほらほら、もつとあげますからね。」

自分の行為にびっくりしつつも困ったように上目遣いできりちゃんに見つめられ、つい口を開きスプーンを咥えてしまう。

その瞬間に、パーッと笑顔が輝くきりちゃん。さらには、きりちゃんの何かを刺激してしまったのか、まるで小さい子をあやす様な態度を取り出した。

調子に乗っているのを嗜めようと口を開いても間断なく差し出されるスプーンにふさがれる。そしてきりちゃんの持つプリンは溶けるように、私のおなかに消えていった。

⑤ロリコン疑惑なゆかりさんと、ユカコンなきりたん

「何言ってますか？ゆかりさんは、私にラブラブな時点でロリコン確定ですよ？」

こちらの正気を疑う様な、怪訝な顔を私に向けるのは東北きりたん…通称きりちゃんだ。

私が親友達にロリコン疑惑を向けられる元凶でもある。

今朝のことだがマキさん達と歩いていると、近くの保育園の幼児達が引率されて散歩

していた。

微笑ましい光景に思わず笑みをこぼしていると…

急に、IAさんとマキさんがそれぞれ私の両腕を掴み、さらに琴乃葉姉妹が目の前に移動し両手を広げデیفエンスの構えを見せた。

親友とも言えるほど親しい彼女達の急な行動に目を白黒させていると、後ろにいたずらん子さんが、「本当に捕まってしまうから、きりたんだけで我慢しておきなさい。」と私の肩に手を置き、割と切に迫った声で忠告をされた。

親友達曰く、それまでも怪しいとは薄々感じていたが、ハロウィンパーティーの一連流れを見た後、私の好みは《小学生以下の少女》という謎の共通認識ができたらしい。

… どうしてこうなった。絶対ずん子さんあたりが情報操作でもしてるに違いない。

そして、きりちゃんにその事を告げると文頭の言い草を受けたわけで。

思わず心が荒んでいると、きりちゃんがそつと私の手を握り、目線を合わせ、励ます様に声をかけてくれる。

「でも大丈夫です。ゆかりさんの照準は私に定まってるので、私の成長に合わせてストライクゾーンは低めから高めに自然に上がっていくはずです。時期にロリコンは卒業できますよ。だから、ね…？」

母性の輝きとも言える光を瞳に輝かせ、慈愛の微笑みを浮かべるきりちゃん。そのま
ま、きりちゃんは目蓋を閉じ、唇をそつと近づけてくる。そして短くなつていく私ときりちゃんの距離に、私は…

「ゆかふいさん。頬を引つ張つらなじえ下ふあい」

対処として調子に乗ったきりちゃんの頬をぐにぐにと捏ねてあげた。：：：思った以上に良く伸びて、さわり心地も良かった。

「むう、好感度がまだ足りませんでしたか。：。まあ、ロリコンは治ってもキリコンは不治の病なので時間の問題ですけどね！」

自分のセリフが会心の出来だったのだろう。引つ張られた両頬を擦りながらもドヤ

顔を見せるきりちゃん。

本来憎らしいハズのその表情も、ころころ表情が変わるきりちゃんはかわいく、愚痴をこぼす気持ちも萎んでしまう。ずるいなあとしみじみ思う。

「うっ、ゆかりさん、急にかわいいと言わないでください。重篤なユカコンな私には心臓に悪いです」

そしてこの恥じらいも危険だ。

いくら好意からの行動でも、押され続けたら逃げてしまいたくなるが、ふと見せる恥じらう仕草は、思わず撫でてあげたい気分させられ、気づけば互いに構い合ってしまった。分かっていても嵌ってしまう、最近の定番パターンだった。

「んー。ゆかりさん、撫で方が上手くなってますね?.. .ほんとに私以外の幼女に手をかけてたりしてませんよね?」

衝動のまま撫でてあげると、謎の容疑をかけられた。まるで浮気を疑うようなじと目だった。

反射的に出そうになった、きりちゃん以外にこんな事はしない…とaying言葉は喉元で止まった。口にしてしまえば「キリコン」とやらの証明に他ならないと気づいたからだ。でも…

「ふふっ…なら、いいんです。」

胸にしまって口にしなかったはずの言葉は、どういうことか、きりちゃんには届いてしまったらしい。ニヤリとした笑みで納得されてしまった。むう…

⑥ゆかりさんと、魔法少女なきりたん。

「ゆかりさん！実は私、魔法少女になったんです!!」

昨今のネット社会、そしてアニメやゲームは便利で楽しいものだが…その反面、弊害や悪影響はあるようだ。少なくとも目の前のきりちゃんが身をもって証明してくれている。

「…あの、本当の話なんです。だからその、『可哀想な子を見るような目』はやめてくれませんか？結構、心にきますので」

私のとても悲しい思いは、きりちゃんにも伝わってしまったようで、きりちゃんのに涙がうつすらと浮かぶ。

しかし泣きたいのはこっちなの…ん？あれ？きりちゃんの様子を観察していると、いつ

もの冗談でも、妄想に侵されてる訳でもなさそうな感じが伝わってきた。

「そつ、そうです！分かってくれましたか!!まさに以心伝心…流石は《私の》《未来のお嫁さん》のゆかりさん!!!」

泣き顔から一転、瞳が輝きガッツポーズをするきりちゃん。わざわざ強調してる部分は、まあ無視するとして、こぼれるような笑顔について頭を撫でてしまう。

さらさらの髪に、気持ちよさそうなきりちゃん。最近撫で癖がついてしまってるかも。

コロコロ変わる表情はきりちゃんの魅力の一つだけど、やっぱり笑顔が一番似合う。心から喜んでいることが伝わってこちらまで嬉しくなってしまう力があつた。

「えへへへ……はっ！いやいやスルーしないで下さいよ！……んう？えつよだれ、出ましたか？あ、ありがとうございます。……って、だから話題がそれちゃってますよ！」

撫で撫でに流されかけたきりちゃん意識は、ぎりぎり踏みとどまったようだった。

でも気持ちよかったのか、よだれがたれかけていたのでハンカチで拭ってあげる。

……話題？

ああ、そうだった。魔法少女？の話だったけ……

「とにかく、ゆかりさんが私のお嫁さんになることは、確定しているんですからね！」

…本題って、そっち？
魔法少女については？

この後、きりちゃんが今朝方に覚醒したらしい《魔法》を実践してくれたが、その描写は割愛する。

とりあえず魔法少女（妄想）では無く、魔法少女（現実）なのは分かった。

… まあ、だからと言って特にやることは変わらない。いつも通り勉強を済ませ2人でゲームを始めるのだった。

「そう言う訳で魔法少女の敵、つまりは悪の秘密組織は、先代魔法少女のずん姉様がそれ
はもう卑劣で容赦無い策略で根絶や…いえ、洗脳…でも無く、改心？そう、改心させて
今では東北家御用達のずんだ餅製造会社になったそうです。かなり繁盛してて直販店
は食ベログにも高評価で載ってますよ。つまりは平和になって万事解決。ハッピーエ
ンドってやつですね。」

…あつゆかりさん、また残機を減らしちゃいましたね。流石は私の作ったステージ。
ふふっ、自分の才能が怖い…」

悪の組織とやらについては、相手が悪かったとしか言いようがない。ご愁傷さまだ。

それより、やり始めたゲームの方が今は問題だ。

私が挑んでいるのは、きりちゃんの作ったステージ。だがこのステージ、Pスイッチの制限時間と途中途中で投げる甲羅のタイミングがかなりシビアで、もう何人ものマリオが私の操作で犠牲になっていた。

私の膝に乗ったきりちゃんの表情は見えないが、ドヤ顔していることがヒシヒシと伝わ

ちよつとイラつとしたので、ふさがっている両手の代わりに、肩に乗せていた私のアゴで、きりちゃんの肩をほぐしてあげる。

「くつ、くすぐりたいです…うひつぐう、ふふ！」

小学生なきりちゃんには、肩こりや肩もみは無縁だったのだろう。くすぐりたいように、奇声を上げながらピクピク悶えている。

せめてもう少し、女の子らしい声が出る箇所は無いかと探す。

力加減と場所を調整して、有るのか無いのか分からないコリをほぐしていると、画面の中でマリオがついにゴールした。

「んあえ?…え、クリアしてる!?作った私でさえ、3桁以上死んだのに…」

悶えてるきりちゃんの肩を解放すると、悔しそうに呻きだした。最近はきりちゃんに振り回されてばかりだから、正直気分が良い。

「…小学生にゲームで勝って得る優越感って、世間一般的にはグレーゾーンだろうが。」

…それで、きりちゃんはどうするのだろうか？

「どうって、次はゆかりさんが作ったステージを私がクリアする番… あっ、魔法少女の話でしたか。うーん…正直、持て余してるんですよね。戦う相手がいる訳でもないのに、こんな力貰って私、何をすれば良いんでしょうか？」

あまり重くとらえてないようにも見えるが、瞳が揺れているし、いつもより反応が鈍い。

割と、本気で悩んでいるらしい。

まあ確かに賢いとはいえ小学生のきりちゃんには過ぎた力だろう。

だけど私だって急に聞かれても困る。少なくとも魔法の有効利用を聞かれて即答できるほど、メルヘンには生きていないし、私に出来ることはいつも通りに接して、きりちゃんの漠然とした不安を紛らわせるくらいの気がする。

「あつそうだ。ゆかりさん、何か叶えたい願いとかがありますか？ だいたい万能な力なので大抵叶いますよ。」

何か叶えてくれるらしい。だが叶えたい事、と言つても特に思いつかない。強いて言えば、今も寄りかかっているクツションが欲しい……とか？

「へ？ そのクツション……いえ、《人類をダメにするために帰ってきたずんだ餅型クツション マークVI 限定版カラー》が欲しいんですか？ 別に魔法じゃなくても良いじゃないですか」

クツションの名前についてはツツコミはしないとして、確かに魔法じゃなくても良いかもしれない。

だが奇抜なデザインと名前とは裏腹にこのクッション、触り心地と良い感じの大きさが結構気に入っていて、この前近所のホームセンターによった時に、ついでに探したりしてしまっただけには欲しいと思っていた。

：：： もちろん、その時はずんだ餅型クッションなんて見つけられなかったが。

：：： まあ魔法にお願いせずとも、どこで売っているのか教えてもらって、普通に買うとしよう。

《きりちゃんの部屋に来なくても》私の部屋でも使えるように置いときたいんだよね。

「まあ教えるのは別に良いですけ… あ、だつダメです！ えっと、実はこのクッション、

その：：せ、生産中止！：：だからその、もう売ってなくて注文は無理なんですよ！」
何かに気づいたように焦り出したきりちゃんの言葉に、少し落胆する。もう売ってないのか。でもそれならと、やはり魔法とやらをお願いしよう。
すると何故か、きりちゃんの目は進退窮まったように泳ぎ始めた。

「うぐ：：それが、その、魔法でも、無理なんです。：：べ、別に良いじゃないですか！
私の部屋に来れば思う存分使えるんですし！」

だいたい万能とはいったい：：

とはいえ、ついには目にグルグルと渦巻が浮かぶほどに混乱するきりちゃんを見て：：
ああなるほど、と察した。

別に私は毎日クッションに会いに来てるわけではないのだけど、きりちゃんは不安になつてしまったのかも、しれない。

まあ、最近はきりちゃんの部屋に入り浸つてるし無理に手に入らなくても良いか。

「そつ、そうです。いいんです。」

じゃあ、特に欲しいものも無いかなと呟くと、きりちゃんはあからさまにほつとした様子を見せた。

話はそこで終わつたが、3日後、きりちゃんの部屋に件のクッションが2つほど増えていた。

「：： 最初から3つありましたよ？」

聞いてもないことを弁明するきりちゃんは目線を頑なに合わせようとしなかった。

特に問い詰める気もない私は、生返事とともに納得しつつ、3個のクッションに体を埋めてみた。：：これはなかなか良い感じかもしれない。

そしてそんな私を見て、きりちゃんは何だか満足気なご様子。

：： 何となく撒き餌ならぬ、《撒きクッション》と言う謎の単語が頭によぎつたが：：
気が紛れたのだろう、きりちゃんの不安げな様子が消えていてほっとした。

⑦ 白熱するゆかりさんと、白熱するきりたん（ポツキーの 日）

きりちゃんの部屋入ると、ポツキーの箱が積み重なってた。大人買いしたらしい。

「今日はポツキーの日……さあ、ゲームを始めましょう!!」

また何かアニメでも見たのだろう。ポーズを決めつつセリフを発するきりちゃん。いつも通りの光景だ。

要約するとポツキーゲームがしたいらしい。

ポツキーゲーム：「確か“ゲーム”とは名ばかりのイチヤイチャするための、恋人向けのイベントだったはずだ。」

「ゆかりさんとイチヤイチャしたいので、それであってます。むしろポツキーが無くて

も構いません。イチヤイチャしましょう。」

きりちゃんには私に対して欲望をオープンにし過ぎだと思う。真剣な顔で訴えかけてくるので、ぼーつとしてると流されて頷きそうで怖い。

と言うか、ポッキーゲームにポッキー使わないとか、それはただのキスだ。小学生と如何わしいことをするつもりは毛頭ないので断る。

「むう、好感度は足りてる気はするのですが、ゆかりさんの倫理観的なのが最大の敵のようですね。でもまあ、確かにルールとかしつかりしてないですよ。唇が触れ合ったらアウトでしたっけ？」

その場合、お互いに食べ進むから、両方失格になって勝敗が分からなくなってしまう。……いやまあ、勝敗なんてそもそも付けない、協力ゲーム的な感じなんだろうけど。

対戦ゲームつぼくするなら、ポッキー一本ずつ先攻と後攻を分けて、片方だけが食べ

進めるようにすれば、少なくともどっちが失格かはつきりしそうかな？

「ふむふむ、確かに。それなら勝敗は残ったそれぞれのポツキーの短さで決めればOK
ですかね。」

それと、攻める側じゃ無い時も、啜える長さを決めないとそこも不公平に…

「後は時間制限なんかもキッチンと決めないと…」

その後、夕食中まで続いたポツキーゲームのルール検討は、A4一枚に箇条書きでまとまり、夕食後に無事ゲームは開催されることとなった。

「さあ、勝負ですよ、ゆかりさん!!」
互いにチキンレースを行う単純なゲームだが：： お互いの性分なのか、きりちゃんとのゲームは白熱することがほとんどで、このゲームも例に漏れることは無かった。

「ふふつ、流石はゆかりさんです。」
ゲームは進み、きりちゃんの不敵な笑いに私もニンマリ笑みを返す。デユース制《※注1》を採用したために続きに続いた延長戦に、私達はしのぎを削りあい：：

きりちゃんの要請で、唇が接触したかビデオ判定用のカメラ映像《※注2》を2人で見始めた時に、そろって正気を取り戻して赤面した。

… おかしい。最初はルールの話しをしていただだけで実際にやるつもりは一切無かったのに、どうしてこうなった。《※注3》

「えっ… と、あの、ビデオ判定の要請、取り消せますか？」

例のごとく膝に乗っているきりちゃんも良く分からないノリに乗って、良く分からないことになっていた事に気づいたらしい。私も真剣な顔でアホなことをやってる自分の姿はこれ以上目に入れたく無いのでゲームはそこで終わった。

「何か、疲れましたね。おやすみなさい。」

きちんと黒歴史：：ビデオカメラの映像を消し、歯ブラシをして、2人で布団に入る。確かに疲れていたらしく、意識はすぐに薄れていった。

⑧ゆかりさんと、霊媒師（仮）のきりたん。

※あいも変わらず、ゆかりさん視点です。

「ゆかりさん、手相を見たいので手のひらを見せてくれませんか？」

今日も軽く勉強を片付けられ、家庭教師な私の存在意義が問われてる気がする…。そんな1日。きりちゃんという言葉は相変わらず唐突だった。

手相。きりちゃんにそんな特技があつたとは初耳だった。

「いえ、そんな特技は持ってません。：えつとイタコ姉さま、うちの長女なんです、霊媒師なんです。あつ、もちろん本物の。世界中を旅して活動して、旅先で出会った人達と飲んだくれてるらしく、ほとんど帰ってきませんが。」

無いのか。

そして霊媒師。何か胡散臭さが凄い。：あつたことも無いけどイタコさんすいません。聞く限りの人物像では、気にしなさそうな人だけど。

「まあそれで、魔法の才能に開花したのなら霊能力にも目覚めてないかなと。イタコ姉さまは占いとかもしてたので、手始めに危険も無くて初心者でもできそうな手相をやってみるつもりなんです。」

なるほど。

こつくりさんとかやったら、変なのに取り憑かれちゃうかもしれないし無難な判断なのだろう。…きりちゃんが取り憑かれて正気を失ったら、何故か私が被害を受けそうだし。

でもまあ正直魔法少女の魔法よりも何だか現実味がある。それに占いなどしてもらったことは無いので、割と興味を引かれつつ片手を差し出した。

「ふむふむ…」

きりちゃんの両手の指が私の手のひらをつたう。

小学生の手だからか、小さく、やわらかく、暖かいその手は、私の手のしわをゆつくりと沿って動く。

「……………」

今はかわいいと称されるきりちゃんだが、将来はイケメン方向に成長すると思う。真剣な表情にそんな感慨にふける。

……もしかして何か嫌な手相でもあったのだろうか。変わらない真剣さに、一抹の不安を感じる。

「……………」

いや、ちよつと長すぎる。

と言うか、最初の繊細な指使いは消え、

今はもう、手を揉みこむ様に私の手を圧迫していた。周りの声が聞こえないほどに集

中していたらしく、何度目かの呼びかけでやっと我を取り戻してくれた。

「…はっ！つい、ゆかりさんの手が冷たかったので…えっと、つい。」
手相に手の温度は関係ないと思う。ついとはいいたい。

「いえその、冷たくて何だか心配になってしまつて。気付いたら暖めようと夢中になってました。で、でも今はぼかぼかになって安心ですよ！ほら、次は反対の手を出してください。」

言われるがままに、つい反対の手も出してしまふ。

いやまあ、確かに手は冷たい方で、もまれたおかげでだいぶ暖かくなった。でも手相の話はどこいった。

「えっ手相?……ああ、そうでしたね。えーつと手相の結果は、少し前に才気煥発しかも超絶かわいくて、ゆかりさんラブな上に趣味も合う運命の少女と出会いましたね……いえ確実に出会ってます!」

首を傾げると、必死に人差し指で自分を指差すきりちゃん。

分かったから、出合った出合った。だからあんまり興奮しないで。

「むう……まあ、その少女がゆかりさんの将来結婚する人で《確定》してます。なので恋愛・結婚・趣味、全てが上手いききパラメータ的に言うると振り切れてる感じですよ。し・かも!玉の輿にも乗れるようなので、金運までもが完璧!これらは落ちることは永劫無

く、末永く幸せになります！」

立板に水を流すように、淀みなく話すきりちゃんに、つい笑いがこぼれてしまう。

… うん。まあ、確かに趣味が合うし、一緒にいて楽しい。

これからも幸せにはなりそうかな。… 運命うんぬんは別として。

だから、これからもよろしくね。と言うと

「は、はい！… 末永くお願いします!!」

私の言葉に歓喜し、赤みがかかった頬を押し付けるように抱きつくきりちゃん。

何か、違う受け止め方をされたような気がするけど… まあ、いつか。

⑨雪見だいふくを買ったゆかりさんと、きりたん（雪見だ いふくの日）

「どうぞ！いらつしやいです、ゆかりさん。…あれ？何か買って来たんですか？」

今日も家庭教師と言う名目できりちゃんの家に来てきた私。…名目になっちゃったのは、もうしょうがないと諦めている。

きりちゃんに指摘されたのは、私が持っているコンビニ二袋。

今日は「雪見大福の日」らしく近くのコンビニの販促広告に乗っかって、いつもお世話になっている東北家全員分買ってきたのだった。

「それなら食後に食べましょう。冷凍庫入れてきま… ゆかりさん、手がめちやくちや冷たいじゃないですか。」

きりちゃんに手渡しした所で手の温度が伝わったのだろう。きりちゃんの表情が心配そうに、そして少しだけ咎めるように変わる。

そのまま、きりちゃんのほっぺたに私の両手は押し付けられた。

「緊急処置です。ほら、このまま座ってください。患者さんは先生の言うこと聞かなくてダメです。」

誘導されるままベットに腰かけると、膝の上に乗ったきりちゃんに抱きしめられた。

抑えが無くなったが、そのままと言われているので私の両手はきりちゃんのほっぺたにくっついたままだ。

以前、手相を見てもらった時から、私の体温に敏感になったきりちゃん。

表情豊かなきりちゃんから心配していることがひしひしと伝わるので、似たようなことがあっても抵抗できずに言われるがままになってしまっていた。

困ったことに、あまり困ってなかつたりする…。自分でもややこしい心境だが。

「ふっふっふっ…。ひやつこくて気持ちいいです。ゆかりさんも気持ちいいですか？」
ずっと暖房が効いた部屋にいたからか、きりちゃんの体温は高く、こわばっていた指の感覚も治ってきた。猫のように目を細めるきりちゃんのリクエストに答えて額に手を当てる。

体温の交換はお互いに気持ちいいし、健全だし、問題は無い気がしてきた。

「お望みなら服の中に手をズボつとしても… ゆかりさんならOKですよ？」

私の思考とは裏腹に早速不健全な事を囁いてくるきりちゃん。

ここまで流されるままだったが、きちんと断るとこは断らないと。

「ダメですか。暖かいのは保障するのですが… もちろん、ゆかりさんなら入れた後、色々まざぐつてもOKなんですけど」

もちろんと言う言葉の使い方がおかしい気がする。

そして、くすくす笑うきりちゃん。こうなったら目を合わせてはいけない。

冗談目化した口調とは裏腹に、本気の色が滲んでいるだろう目は、年齢に合わずイロっぽくドキリとしてしまいかねない。

いくら身長差があっても今は膝に乗られている。目線があつてしまわぬように注意が必要だ。

その後、きりちゃんが満足するまで手が温まった後に雪見大福は冷凍庫に入れられ、いつも通り勉強からのゲームの流れとなった。

夕食後に食べた雪見大福は美味しかったが、一本だけの串をきりちゃんに渡した結果、手で食べた私は冷えてしまった手をまた捕獲されてしまうのだった。

⑩きりたんと、熟睡中なゆかりさん

私、東北きりたんが今より更に幼い頃、
両足で歩き初めたばかりだった私にとつて、
世界は広く、毎日新しい発見があつた。

小さな私の目が届く小さな世界ですら、

目が回る程の広さなのだから。

私の手が届かない外にある世界の広さなんて、
限界等無いのだと勝手に信仰していた。

一般人との違いなんて把握していなかったが
当時無意識に魔法を使っていた私は、
どこまでも《視野》を広げてしまった

毎日が、ドキドキの連続で

未知を探し続ける日々

いつからだろう。新しい何かは無くなり、

この世界は思ったより小さく、

単調な繰り返しで成り立つ、

存外つまらないものだと感じてしまったのは。

少なくとも私の視界から色が消え魔法が使えなくなつた境界の日は確実にあつたはずなのに。

高次元な視点は価値観を変え、

私はハリボテな世界を嫌悪した。

今では未知を捜し求めたころの、
幼い記憶すら消えた。

世界は、
私は、
なんてつまらない

我が家ながら、東北家の住人は皆変人、下手をすれば狂人の集まりだ。

2人の姉はそれぞれ、魔法と霊能力と言う異能の力を持ち、それ故かどうか知れない

が頭のネジが2、3本飛んだ性格だった。

そして私もまた、一般的とは言えない存在だった。異能の力こそ持たないものの、現実を物語のようにしか認識できない後天的な精神疾患を患っていたのだ。

心的要因により自己の発露が不十分になり、一時的にしろ一生にしろ、異能の力が使えなくなる。

過去を紐解くとうちの家系では、私の現状といくつか似た事象が存在した。

近しいだけだが亡くなったり、S A N値が削れるようなものを見たり、人の身に合わない力を行使したりと、諸々の理由で精神に傷を負ってしまい、今の私と同じ素質はあれど力が使えない状態に陥っていた。

：：物心着く前から魔法が使えない私には、そもそも精神に負った記憶すら、まったく身に覚えが無いのだけだ。

特殊な力も生きている実感も希薄な私。ただ人生に悲観はしたことなどなかった。

家族が、私が、創作物の登場人物のようにしか思えなかつたけれど、物語の中の彼女達を私は確かに気に入っていたからだ。

破天荒な所はあれど、持って生まれた力を善行に使い、家族を愛し、人を救い、毎日の生活を楽しんでいる。これでどうやって嫌いになれるのだろうか。

多少ピントがズレているのだろうか私は不安も不満も抱かず、このまま生き続けるのだと何となく信じていた。そんな日々の途中、

結月ゆかりさんと出会った。

うちに遊びに来たずん姉様の友人。とても楽しそうにゲームをする人だった。ゲームをしていると、瞳の奥がキラキラと輝くのだ。

最初はただ一緒に遊びたいと感じ、楽しくて楽しくて没頭していると、独りで世界を傍観していた《私》の隣に、いつのまにかゆかりさんはいた。

恋をすると世界が変わると良く言うが、

それから、ゆかりさんと触れ合う内に世界は色づき焦点が合い、いとも簡単に私は

現実を現実として認識できてしまった。魔法の発露もそれが原因だったのだろう。どうやら特殊な事情を解決するために、必ずしも特殊な何かは必要無いらしい。

私は私を過大評価して、同時に過小評価していたのかも知れない。

…さて、そんな経緯を通して私が、ゆかりさんに感謝とか親愛とか執着とか恋心だかを持っていると言う《前置き》が長くなってしまったが、

今の状況を説明しよう。

ゆかりさんが私の部屋でベットに横になっている。今日は疲労が溜まっていたらしく、勉強と食事とお風呂を終えたら、私に一言断ってお気に入りらしいクツションを頭にあてがい呼吸も穏やかに眠ってしまったのだ。

そしてこの部屋は他に人はいない。

そう、チャンスタイムの襲来なのである。

「： ゆかりさん。そんな無防備に寝てると、私にエロい事されちゃいますよ？ むしろエロい事されたいんですね。分かりました。まかせてください!!」

いくら恋心に急かされても、私は花も恥らう女子小学生だ。これから行われるエロ：いや、《にやんにやんな行為》への合意の確認は忘れない。

とは言え、耳に届きつつも疲れているだろうゆかりさんの眠りを妨げ無い音量で話しかけたため、まるで呪いのような眩きになってしまったが：：： 不可抗力だ。問題ない。

横たわってすやすやと眠るゆかりさん眺める。口元が微かに開き、静かに寝息を立てる様子はどこまでも無垢だった。

そしてその隣に立つ、少し息を荒らげ、わきわきと手を動かす私。

きつと客観的に見たら静と動、対極な感じでまるで一枚の絵画のような風景に違いない。私もゆかりさんも美少女の範疇に入るだろうし。

「：：：いや、正気に戻れ私。」

幸か不幸か、客観的に想像したおかげでルパンダイブしそうな私を止めることができた。

私の中の良心代表、天使（仮）な私が言う。

にやんにやんは、あくまでゆかりさんの意思でもってにやんにやんすべきであつて、それが無いにやんにやんなど、真のにやんにやんでないはずだ。

と言うか、後でバレて怒られるのはまだしも、嫌われるのは絶対にいやだ。

…だから、怒られない範囲で楽しもう。

脳会議、全会一致。

天使（仮）と悪魔（仮）の硬い握手が交わされる。

「えーっと、いつも抱きしめてくれるし、手とか腕とかなら触っても大丈夫。…大丈夫なはず。」

怒られずにこの状況を楽しむため、過去の事例を元に完璧な理論を展開。いつもと違いやり過ぎると止めてくれるゆかりさんが眠っているため、手探り感はないが、少しかだけ欲張って、ただ触れるだけでなく手と手で、そつと恋人繋ぎをする。

「…」

私の頬が、ピクピクと動く。声にならないとはこのことか。

ゆかりさんの手の冷たさ、指の間が締め付けられる感じ、安心しきった寝顔、全部が嬉しくて、楽しくて、たまらない。

さらには独占欲やら、この状況にいない全世界中の人たちに対する優越感やらが、私の頬をにんまりとさせる。

言葉にしづらい様々な感情と感覚に頭が処理しきれずフリーズしかかっていると、ゆ

かりさんの口が小さく開き…

《きりちゃん》と私の名前を呼んだ。

「!？」

急に呼ばれて背筋が瞬間的に伸びる。瞬間脳裏に流れたのはゆかりさんへの言い訳。絡み合った手は我関せずと、反射すらしないでくつついたままだったが。

しかし、ゆかりさんの目は閉じたままだった。寝言で偶然私を呼んだ…いや。無

意識に今、触れ合っているのが私だと気づいてくれたんだ。

「…私の感触と体温を、覚えてくれるんですか？」

自分のセリフにぞくぞくと産毛がたつような喜びが体中をぐるぐると回る。そんな自身の反応で、私は本当にゆかりさんのことが大好きなのだ実感し、再認識してしまう。

…同時にゆかりさんからの私への気持ちは、姉妹愛の域を出ていないだろう、ということに気持ち少し落ち込む。

いつかは私からの大好きな気持ちと同じくらいに、私を想ってくれるのだろうか。

「…もしかして、寒いんですか？」

ゆかりさんの手とにぎにぎすること数分、いや10分は経っていた。今ではゆかりさんからも握る力を感じる手に、そんなことを考える。

体温が低めのゆかりさん、もちろん暖房もつけ毛布もかぶっているが最近は特に寒く、心配してしまう。

無論、普段から暖房の温度をもっと上げれば良いのだろうか…

「ゆかりさんにくつついて、暑苦しくなんて感じて欲しくありませんし…」

毎日、ゆかりさんが来るまでの暖房の調節は私を悩ませる。私が抱きついた上で快適に感じる程度に抑えなければならぬからだ。

できることなら冷房をガンガンにかけてふるふると震えるゆかりさんを、布団に引っぱり込みギュウギュウ抱きしめて暖め合いたいんだけど……それは何とか自重している。

まあそんな訳で、私が隣にいない今のゆかりさんは、もしかしたら寒さを感じているのかもしれない。

その責任は、取らねばならないわけで。

「お、お邪魔します」

ゆかりさんを暖めるために、電気を消し布団にもぐりこみ、片手でゆかりさんに抱きつく。恋人つなぎをしているほうの手はくつついて離れなかったし離せなかったし離したくなかった。

「あっ…」

普段は眠る寸前に朦朧としながら抱きついているので、しっかりと意識で正面から

抱きつくのは初めてだったことに気付く。

肌に触れる服は色違いのお揃いな寝巻きで、

ほのかに感じる香りは同じ石鹸で、

トクトクと鼓動する心音さえお揃いだった。

もつとも、ゆかりさんの心音は私と違ってゆつくりと控えめな音だったが。

視界が、触感が、嗅覚が、そして鼓膜さえも、ゆかりさんがいっぱい、ゆかりさんに支配されて、たまらない充足感を感じる。

いつもと違って既に眠っているゆかりさんは仰向けのまま、こちらを向いて抱きしめてくれなかったが、意識が無くとも明日の朝までには抱きしめてくれるという妙な確信があった。

「おやすみなさい…。ゆかりさん。」

心臓が早い鼓動を打つても、人は安心できるものらしい。そんな新しい発見をしつ

つ、私の意識は、ゆっくりと沈んでいった。

⑪ゆかりさんと、懺悔するきりたん

「ゆかりさん。ちよつとお話しが…いえ、懺悔したいことがあります。」

前座と成り果てた勉強を終え、メインイベントのゲームをしようとベッドに腰掛ける
と、きりちゃんはいつもと違い、横に座つて私の袖を引っ張りながら神妙な面持ちで話
しかけてきた。

懺悔?… と言うか真剣な所悪いんだけど、きりちゃんに真剣な表情は割と似合わない。
い… 空気を読んで口には出さないが。

「その、昨日ゆかりさん、すぐに眠つてしまったじゃないですか。」

昨日… 確かに疲れていて、夕食後はゲームをしないで眠つてしまった。

そう言えば、久しぶりにきりちゃんに抱き付かれずに寝た気がする。

まあ、朝起きると結局くっついていたが。しかも互いに抱き合つて… 最近寒いから、きつとしかたがないはずだ。うん、しょうがない。

「その時にですね。あの、眠って意識が無いゆかりさんの……て、手を、使って……えっと、その、」

顔を真っ赤にしてそわそわとし出す、きりちゃん。

話しの内容が何だか不穏になってきた。きりちゃんがこれまで要求してきた様々な卑猥なことが思い出される。ネットで仕入れた情報らしく小学生とは思えないマニアックなものが多々あった。

……やばい、寝てる間に私何されたし。この場合でも私は小学生に手を出したロリコン判定されるのだろうか。

でも私の……手？何だろう。想像できないけど、何かマニアックなことをされたのだろうか？

「ゆかりさんの手と…こ、恋人つなぎをして、あげくぎゅーつと抱きしめて眠っちゃいました!!」

思わず漫画、もしくは芸人のような、ズッコけるリアクションを取る所だった。

…小学生か。いや小学生だったけ。いやまあ、それぐらいなら普段と変わらないし別に構わない。と言うか、珍しく反省してるみたいだったから、いつものノリでもつとヤバイことしたのかと思った。

「いつもは、ダメだったら止めてくれるじゃないですか。でも意識が無いゆかりさんに対してだとフェアじゃないと言うか、何だか信頼を裏切ってしまったような、罪悪感が時間が経つたびに強くなってきて…。」

しゅんとする、きりちゃん。

…うん、この子、とっても良い子だね。いつもの言動を見ると不安になるけど。まあ普段欲望をぶつけてくるってことは、ある意味この娘なりの信頼の形なのかもしれない。

頭を撫でつつ、とりあえず抱きつくのも手を握るのも問題ないと伝えてあげる。

「ただ握っただけじゃなくて恋人繋ぎ何ですけど。：。あれ？つまり、恋人としても受け入れてくれたってことですか？」

違う。そうじゃない。

「む、むう。気持ちは落ち着きましたが、何だか不満です。：。それなら、今すぐ手を握っても良いですか？」

別にいいよと、隣にいるきりちゃんの手と繋ぐ。もちろん、きりちゃん御要望の繋ぎ方だ。

☆10分経過☆

「ふへへ…ずうつとこうしてたいです。」

手を繋いだ最初は、目を丸くして口をへの字にして借りてきた猫のように黙っていたきりちゃんだが、しばらくすると余裕が出てきたらしく、指に力入れたり、ちらちらこちらを覗きこんできたり、話しかけてきたりしてきた。

何だか凄く楽しそうな様子に、釣られて楽しくなってきた。

とは言え、手を繋いだままだとゲームができないし、ずっとは嫌かも。

「むっ！私とゲーム… どっちを取るんですか！

！」

頬を膨らませ、口を尖らせるきりちゃん。

いやどっちって、きりちゃんと一緒にゲームするの楽しいから両方を取りたいんだけど… と自分でもデリカシーの欠片も無いなど思う発言をする。

「えっ、うえ…？」

そんな言葉を聞いたきりちゃんは、瞳を大きく開き、顔が真っ赤に染まった。効果音があるならボンツツって感じに。

… 私に好意をもってくれてるのは知ってたけど、今のセリフに真っ赤になって、喜ぶような所があったのだろうか？

ゲームと自分を選べないって言われたら、むしろ怒る場面じゃ？と疑問に思っている
と、

「同じです。私も、ゆかりさんと一緒に遊んで、とつても、楽しい、です。」
繋がった手にキュツつと力を入れ、じつと視線を合わせたきりちゃんが告げる言葉に
ドキリとする。

数瞬前に感じた疑問が解けた。

楽しい事に共感してくれる事って、こんなに嬉しいことだったらしい…。やばい、嬉
しくて顔がにやけて、何だか照れてしまい頬が熱くなる。

「…照れてる。ゆかりさん、やっぱかわいいです」

さらにじつと覗き込むように見つめてくるきりちゃん。口元には私をからかうときに見せる不敵な笑みをしているが、いつもと違い、きりちゃんの頬も真っ赤だ。

何故だか、繋がった手を離したくない。いや、理由は何となく分かる。手を離すと繋がった気持ちが離れてしまうような、そんな予感のせいだ。

そんな気持ちもあいまってか、いつもよりきりちゃんがかわいく見える。

…いやいや、落ち着け。きりちゃんは小学生。ロリコンじみた考えは捨てるべきで…いやでも手を握ってるだけで別に変なことはしていないし、姉妹的な好意だと考えれば問題無いのだろうか。

その後、終わらない自問自答によく分からなくなった私は、同じく嬉し過ぎてよく分からなくなつてそうなきりちゃんの提案をのみ、

お互いに片手づつ出し合つて一つのコントローラを操作するよく分からない協力プ

レイをした。

握った片手の離れ難さは、次の日の朝に起きると互いに両手で抱きしめ合うために自然に離れていたらしく、無事解決した。

⑫誕生日なゆかりさんを、攻略するきりたん（結月ゆかり誕生日）

「ゆかりさん。実はまだ誕生日のサプライズがあるんです。ちょっと来てください。」

今日は私の誕生日……だったらしい。夕飯の後にケーキを出して貰って気づいた。

そしてきりちゃんからのプレゼントは手袋で、あまり身につけるものに無頓着な私だが、もこもこな素材が気持ち良くて暖かくて、今日以降使い続けることを確信するほど気に入ってしまった。

きりちゃんに感謝の言葉を伝えると、とても嬉しそうに微笑んでくれた。

ついでに、きりちゃん自身も色違いの手袋を買っているらしく、ずん子さんの提案でお揃いの手袋をしたきりちゃんとの写真を撮ってもらうことに……少々恥ずかしいポーズも要望されたが、せっかくの誕生日だからと言われ受け入れてしまったりした。

そんな感じでお祝いしてくれた後の、きりちゃんの発言。

了承したら手を引かれ、何故か何時ものように部屋に連れられ、膝に座られ、ゲーム

をする体勢になった。：：何だろう？

「ふっふっふ。：：いくら勘が鋭いゆかりさんでも、どういふことか分からないようですね。」

ふふんつとドヤ顔するきりちゃん。膝にのって背中をあずけてくる関係で、斜め後ろに見上げる形で覗き込んでくるが。：：首は痛くないのだろうか？両手で頭を持って優しく前を向かせる。

「ん。：：実はこのゲーム、私が初めて創造魔法で作りましたものなんです!!ゆかりさんへの誕生日プレゼントパート2です!さあ、一緒にやりましょう!!」

私に頭を操作されても特に気にせず説明するきりちゃん。

魔法でゲームを作成。確かにそれはすごい。：：けど、何か魔法少女の魔法っぽくない上に、初めて作成するには難易度が高いような。

「うちの魔法は、理論とか術式とか一応ありますけど基本的には《想いを具現化》する系の魔法なので、いつもやってるゲームは具現化しやすい？らしいです。」
なるほど。

それでどんなゲームなのか聞こうと口を開いたが……画面を見て口が閉じる。

「ふっふっふ……ゲーム内容は私、東北きりたんが主人公の恋愛シミュレーションゲーム!!むろん、ゆかりさんルートのみ攻略可能です!!!」

画面にオープニングが流れる。軽快な音楽と共に、二次元にデフォルメされた私様が様々なシーン集で紹介されていた。

「あー！何で電源切っちゃうんですか!?!」

無言で電源を切ったら不満気に怒られた。解せぬ。

「むふふ、さあ改めてやりましょう！」

きりちゃんの説得を受けた私。いまいち納得仕切れていないが、押し切られて結果的にゲームをすることになった。甘いのかも知れないが…私の誕生日にと、用意してくれたこの娘の気持ちを考えると断われなかった。

「ゆかりさんへの溢れる想いを元にしたゲームなのですが、ゲームの詳細は作った私も不明です。・とりあえず、ゆかりさんに会って好感度を上げましょう。ゆかりさんならゲーム屋さんとか、ゲームセンターとかに。・ほらいた！」

M A P 上の選択肢、的確に私の居場所を捕捉するきりちゃん。・私はきりちゃんに
どういう目で見られているのだろうか。気持ち不安になった。

「あれ？今度はゆかりさんがいませんね。

ん？”残り一個の新作ゲーム”？この選択肢は。・買つときましよう。そしてゆかりさんに見せれば。・よしっ!!」

小学五年生に新作ゲームをチラつかされ、家までお持ち帰りされる私。私はきりちゃんに
んにどういいう目で（ry

「ふふっ私達、ゲームの中でも一緒にゲームしてますよ。」

目にキラキラとしたエフェクトをつけてコントローラを持つゲーム内の私は、

お菓子を近くに配置して、現実でも背中をあずけているクツションを使つて凄いらックスしていた。

ああ、こんなに簡単に誘い込まれちゃつて…。何だか、かわいそうな人を見ているようにホロリとしてしまう。

「ふむふむ。どうやらミニゲームで勝てば好感度がアップするみたいですね…。それなら容赦しませんよ！」

ゲームの中でゲームをするのはなかなかシユールかと思つていたが、ミニゲームとしてプレイヤー自身が操作できるようだった。

そして、きりちゃんの言う通り、その後のゲーム内容は容赦が無かった。

……
敵。つまりはゲームの中の私が。

「そ、そんな25連射!？」

ばよえーんな某落ち物ゲームでは、ジャブのような3〜5連射をされ、対処しているうちにいつの間にか恐ろしい連射を積み重ねられ、

「問題文一文字で分かる訳ないじゃないですか!!..:。もしかして、クイズの問題と解答、全部覚えてるんですか!？」

クイズゲームでは問題文が一文字出た時点で即答され、

「ちよつと待つて!?!それテニスじゃなくてテニヌの技じゃないですか!?!」

テニスゲームでは、裏コマンドでもあるのか、某王子様風の必殺技にぼこぼこにされ、最後は吹っ飛ばされてKO負け。

「ゆかりさん：： 助けてください：：：：：」

格闘ゲームでは、ブロッキングと予知めいた立ち回り、さらにはバグを利用したコンボにボコボコにやられ：： 流石にきりちゃん心が折れてしまったようだった。

私は無言でコントローラーを受け取る。

私を攻略するために私が操作すると言う意味不明なことになるが、そんなことは気にならないほど：：

私は、静かに怒っていた。

：
自分でもCPUへの理不尽な怒りとは思っているのだが。

負ける度にデフォルメされたきりちゃんや涙目になり、同じくデフォルメされた私は無邪気に喜んでいるモーションが流れる。

ゲームは確かに勝敗を競うものだが、隣で一緒に楽しんでいる友人を一方的にぼこぼこにし続けて屈託無く喜ぶほど私は腐っていない。

こちらは通常プレイなのに反則すれすれの裏技を一方的に連発していることも気に障る。

そして何よりも最近改めて感じた、きりちゃんと遊ぶ時間の大切さと、腕の中で泣いているきりちゃんちゃんの存在。

ゲーム中の私を騙るこいつは… 敵だ。

「ク、クイズですか？いくらなんでも勝て…え!?!」

このミニゲーム。他もそうだが、全て元となるゲームが存在する。恐らくきりちゃんのご都合主義な魔法の補間をするためだが。

そしてクイズの元となるゲームも私はやりこんだものだった。問題文なら全て暗記している。そしてこのゲームは…

「問題文一文字で解答し合ってる…これなら半分の確率で勝て…あれ!?!ゆかりさん、問題文どころか解答の選択肢すら出てないのに何で答え分かるんですか!?!」

某漫画で仕入れた知識だが、このゲームの出題の順番、ランダムに見えて実はパターンがある。最初の5問を見ることで、以降の問題と解答の場所は固定されるのだ。だから問題文どこか解答すら1文字も見ずに解答することが可能……!!そして、

Y
o
u

W
i
n
!

「ほわああああ… ゆかりさん、かつこいい」

きらきらした目で私を見つめるきりちゃん。やめて、漫画で知った知識を本気で勉強した黒歴史の産物だから。

そんなことよりも、攻略可能になったゲームをきりちゃんにやってもらうために、コントローラーを渡す。

「え？… ああ、… … えつと勝って頂いたゆかりさんに申し訳ないのですが… もういいです。」

と言いつつ、ゲームを消すきりちゃん。私が疑問符を浮かべていると、

「いえ、ゲームだから仕方が無いんですが、やっぱり現実のゆかりさんとズレがあるみたいですし、何より……今、惚れ直す前に作った物では、全然ゆかりさんの魅力を引き出せてないと分かったの。」

……ぐぬぬ、この娘は相変わらず恥ずかしいことを真っ直ぐに伝えてくる。

「そうですね。勝ってゆかりさんの好感度を上げるのはまたの機会にしましょう。せっかくのゆかりさんの誕生日ですから、争わずに協力プレイとかしたいです。」

その日は別のゲームで協力プレイをすることに。

敗北はしなかったが、私の中で何か、パラメータが上がった音がしてしまった……よ

うな気がした。

⑬寒がつてるゆかりさんと、ホツカイ口なきりちゃん（大晦日）

「私はですね。今年こそは、ゆかりさんが小学生に手を出すという…壁、そう壁を乗り越えてくれますようにしてお祈りするつもりです。」

儂げな表情で切々と話すきりちゃん。その様子とはうらはらに話の内容はかなりヤバイ感じだった。

その壁とやらの先は牢屋だと思う。捕まりたくなんてない私には越えられないシロモノだ。

12月31日大晦日、23時半。今年も後30分で終わりの深夜。私達は年越しのために近くの神社参拝の列に並び、新年最初に何を祈るのか雑談していた。

年が変わった時からお参りは始まるのだが、既にかなりの人数がいて列になっている。

そして、深夜というのもあって結構寒かった。

「なら壁は私が越えますので、その先でゆかりさんが抵抗しませんようにってお祈りします。」

恋する少女のような照れた表情を見せるきりちゃん。けれども発言は相変わらずな感じで、年が変わってもこの娘の変わらない安定性を予感できてしまった。

：． まあ、口先やちよつかいは出しつつも、基本ビビりなきりちゃんなら本気で襲っては来ないだろうし、スルーしとけばいいか。

なんて妙な信頼関係に思いを馳せつつ、私は今年ものんびりと遊びながらすごせます様に祈ろうと思っていることを告げる。

風が吹いてる。本気で寒い。

「ふむふむ、のんびりですか。例えば？」

「のんびりはのんびりなんだけど……例えばゲームしたり、美味しいご飯食べたり、布団の上でゴロゴロしたり。」

「……それ、全部隣に私がいますよね。あれですか。新手的プロポーズですか？プロ

ポーズならもう少し段取りとか雰囲気重視してください。でも、しょうがないから及第点を上げます。なので：：そのプロポーズ、受けてあげましょう。」

じと目からの、につこりな笑顔。だから私も、につこり笑って：：もちろん否定する。

でも確かに日常な風景を想像すると、きりちゃん当たり前のように隣にいるほどには馴染んでしまった感がある。

と言うか、寒さがやばい。

「：： ゆかりさん。もしかして寒いんですか？」

先ほどまでの軽口を叩いていた表情からいっぺんして、真剣な、そして心配そうな表情をしてジツと私を見つめるきりちゃん。質問の形を取っているが、本人の中で確信を持って話しかけているようなので、正直に白状する。夕方くらいなら、貰った手袋もあつて耐えることができるが、深夜となると寒さは格段と違つた。

そんな答えを聞いたきりちゃんは、私の腕の中に入り、背中を押し当てようにくつついてきた。ちょうど二人羽織みたいな感じだ。そしてそのまま両手を捕獲され、きりちゃんのお腹に手を押し当てられてしまう。

：： 一瞬以前きりちゃんの妄言にあつた「服の中にズボつ」とやらをやられるのかと身構えたが、服の外側で健全な感じだった。暖めてくれようとしているのだろうか？

「ふっふっふ。貼るホッカイロを服の内側に付けてきました。ずん姉さまに、ぽんぽんお腹を痛めたらまずいからとアドバイスを貰ったので貼ってきたんです。暖かいの、おすそ分けです。」

なるほど手袋をつけているので分かりにくいですが、お腹に押し当てられている両手がだんだん暖かくなってきた・・・気がする。

言いかけたお腹の別称にはつつこまないでおこう。遠まわしに子供っぽいと言われたきりちゃん嫌がるのは目に見えてるし。

でもこの状況、結果的にきりちゃんを後ろから抱きしめているような体勢になってるだけだ。

「今更じゃないですか。それに向かい合わせで、密着してお腹に手を当てたら、それこそいかがわしいことをやってるように見えちゃいますよ。」

：　むう、確かに。ゲームする時いつもこんなだし、実際にホツカイロに手を当ててるだけだし、まあいいか。

ホツカイロだけじゃなくて、きりちゃんとくつついているおかげもあって、だんだん暖かくなってきたし。きりちゃんの体温、ほんとあったかいなあ。離れなくなっちゃい

そう。

そうこうしている内に、年が変わる時報が鳴る。近くの人がテレビをスマホでつけていたらしく、鳴り響いてきたのだ。

体勢はそのまま、きりちゃんに新年の挨拶をする。

「はい。ゆかりさん、新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いしますね。」

お互い、にっこり笑って挨拶をした後……一緒に並んでいたマキさん達がおずおずと挨拶をしてくれたので、その態度を不思議に思いつつも返事を返した。

曰く、二人の世界を作っていたので話しかけづらかったらしい。いやいや心外な。そんなものは作ってはいない……。作ってないよね？

親友たちに投げかけた私の言葉に返されたのは肯定では無く、愛想笑いだった。

⑭こたつで蜜柑なゆかりさんと、甘酒なきりたん（正月）

「ゆ、ゆかりさん… 酔っているんですか？」

大好きなゆかりさんに押し倒された私は混乱しつつも状況を聞こうと声を振り絞る。

いや、答えなんて聞かなくても分かっている。赤らんで焦点がずれたような瞳は、明らかに酔っていた。

まさか甘酒で酔うほど、ゆかりさんがアルコールに弱いとは…

ゆかりさんを止めるタイミングはいくらでもあった。

例えば、ずん姉様が急に窓の外を指差しながら（何故か懐から新しく出した）お酒を用意した時。

きよとんとして窓の外を見るゆかりさんが可愛いなあ…。なんて感慨に浸ってる場合じゃなかったんだ。

例えば、ずん姉様に行事物だから一杯だけでも、と言われてゆかりさんが甘酒を注がれちゃった時。

少し困ったゆかりさんの表情も素敵だなあ…。なんてハアハアしてる場合じゃなかったんだ。

例えば、ずん姉様がやけにゲスい笑みを浮かべている横で、ゆかりさんが甘酒を口に運ぶ時。

おちよこを口に近づける仕草が何だかエロくてドキドキ…。なんてしてる場合じゃなかったんだ。

「あつ待って！… ゆかりさん!!」

私が後悔に襲われてスキを見せているうちに、艶やかに微笑んだゆかりさんは私の服の間に手を差し込み……

「…的な展開を予想したのに！何で酔わないんですか!!」

「新年から色ぼけた妄想を垂れ流すきりちゃん。やけに甘酒を勧めると思ったらそういうことか。」

「だけど甘酒程度で酔う人なんて、いないとは言わないけど相当希少だろうに…」と言
う言葉は出なかった。私の目の前、当のきりちゃんが実際に酔っ払っているからだ。

「ずん子さんの見解では、自然に私に飲ませるために、きりちゃん自身も多く飲んだ上
に、信頼できる人が近くにいることで酔ってしまったらしい。」

「実際は前後不覚になるほどではないはずだが、多少ふわふわした思考に緩んだ気持ち
が、無自覚にこの状況に甘えてしまおうとしているらしいことも一因だと、そつと教え

てくれた。

ずん子さん、そこまで分かっているなら妹を止めてあげて。いやまあ、ぐりぐり頭をこすり付けてきたり服を鷲掴みされたりと、多少ボディタッチが増えた程度で私に実害は無いのだけど。

「酔っ払ってなんていません!..: むう、朝から体を念入りに洗ってきたのに無駄でしたか。」

酔っ払いの常套句を叫ぶきりちゃん。そして怪しげな発言の後に、自分の腕を顔に近づけて匂いをくんくん確認するのはやめて。生々しくて怖い。

と言うか、やけに石鹸の良い香りがすると思ったらそういうことだったのか。一緒にコタツ入って、距離が近いから何となく分かってしまっていた。石鹸の香りって鼻につかない良い香りだね。特に東北家御用達のはいい感じだ。

私の家では石鹸ではなくボディーソープを使用しているから分からないが、やはり東北家で使われる石鹸と言うと海外製とかで、しかも高級品とか…なのだろうか。

「あー：：うちで使ってるのは国産のですね。何か自然由来の、えつと草？だけで作ってるのか。：：んぐ。」

なるほど。石鹼の方が面倒くさいけど、これだけ良い香りがするなら今度我が家でも試してみても良いかも知れない。

なんて考えつつ、むき終って食べたみかんが甘い：：いわゆる当たりだったのできりちゃんの口に入れてあげて、おすそ分けした。酔い覚まし兼、甘酒を取り上げるための目くらましとも言おう。

「んっ！おお、他よりも明らかに甘いですね!!：：：：ゆかりさんに良い香りって言ってもらえたし、シャワーも無駄じゃなかったみたいですね。んぐんぐ。」

ミカンの感想の後の、きりちゃんの言葉は小さい上にミカンをもぐもぐして聞いて聞き取れなかったが：・照れながらも満足げな表情を見て、何となく内容を察してしまつた。

相変わらず純粹な好意を向けられることに、相変わらず慣れない。

私まで少しだけ顔を赤くしつつも、きりちゃんと2人で大量のミカンの中から最甘固体値を厳選する作業は、のんびりと続いた。

⑮求婚しちやつたゆかりさんと、受けちやつたきりたん

《きりちゃん、それなら私と結婚する?》

そんな私の提案に、

「はっはい!お願い、します……」

きりちゃんは頬を赤く染めながら肯定を返してくれた。そして私はきりちゃんの手を取り……

きりちゃんが持っていたゲーム用な駒のピンを預かり、私の駒にさした。

人数そろってるし、正月だし、何かボードゲームでも……とずん子さんの発案により始まった人生ゲーム。

ボードゲーム、特に人生ゲームなんかは運の要素がほとんどを占めていて、必勝法やコツなどは無い。

……無い………はずなのだが、黒い笑みなずん子さんと、ポヤーっとしているが豪運だったらしいIAさんの、2人による遙か上空での一騎打ち（比喻）を見ると何か攻略法があるのかと勘ぐってしまう。

そんな鷲巢と宮永咲……じゃなくて、ずん子さんとIAさんの2人以外は、地面をゆつくり歩むように資金を増やしゲームを進めていく……茜さんだけ何故か借金まみ

れになって地中を突き進んでいたが。

涙目な茜さんの姿が、きりちゃんと重なってつい茜さんの頭を撫でてしまった。クセつて怖い。

猫のように目を細める茜さん。嫌がられなくて良かったのだが、反対側から感じるきりちゃんのジト目に負けて、もう片方の手はきりちゃんの頭に置かれることになったり。

撫でてると、私は魔性の手を持つと2人は共感していた。何だそれ。

私の撫で方はきりちゃんが育てたとか、今だけ茜さんに貸すだけで所有権はきりちゃんにあるとか、普段撫でる事に慣れていない左手のぎこちなさも逆に点数高いとか、きりちゃんによる相変わらぬ妄言が飛び出していた。

…妄言、だから、茜さんとIAちゃん、頼むから興味津々な感じで頷いて納得しないで欲しい。

まあそんな風に和気あいあいと人生ゲームは進み、3番目に中間地点に到達した私は

【結婚マス】に止まり、車を模した自分の駒に青色のピン：：つまりは夫のピンを追加しようとしたのだが、

「っ!?!ゆかりさん、危ない!?!」

(そういえば)リアル魔法少女な、きりちゃんから発せられた波動弾?のようなものが私の手元をかすって通りすぎ、窓を抜け、雲ひとつ無い青空に吸い込まれていった。

通過地点にいた青いピンは、その体の7割ほどが消滅し、秒単位で私は未亡人になってしまったようだ。

「ふー：：危ない危ない。つて何を言っているんですか。未亡人じゃないです。まだピンは差してなかったから結婚は不成立です。ノーカウント!ノーカウントなんです!!」
ひと仕事終えたように額を拭い、どこぞの班長風に何かアピールするきりちゃん：：

何かパロディネタが私に伝わったことに嬉しそうにしてる。かわいい。

とりあえずきりちゃん、人に向けて魔法打つのはやめようね。危ないから。

「魔法は非殺傷指定だからゆかりさんには傷ひとつ付きません!…そんなことより、どこの馬の骨とも分らない男にゆかりさんを奪われてたまりますか!」

まあ、そういうゲームだからね。…と宥めすかそうとしたが、

「む…。いえ、ゲームとは言え納得いきません。ゆかりさんと結婚するのは私です。それは絶対に、譲れません」

無駄にキリツツとして言うきりちゃん。小学生と思えないかっこいい表情なんだろうけど、状況がそうは思えない。

いや、そういうゲームなんだからしょうがないでしょうに。ふむ……

じゃあ、それならと提案した【冒頭の結婚発言】は、そんな状況を打破するために発したものだっただ。

きりちゃんから受け取ったピンを私の駒に刺して、交互に操作すれば良いよね…と
言う考えだったが、やけに嬉しそうなきりちゃんを見るに、正解だったら嬉しい。

しかしここで、ずん子さんからの待ったが入る。

「す、筋を通す…。ですか？」

曰く、2人でやるならこれまで得た資金を0にすべきらしい。確かに2人分のお金を足したらトップになってしまいが、2人とも資金0はひどい。ビリになってしま…。いや、借金まみれの茜さんがいたっけ。

言いかけた言葉に、着実に借金を増やして瞳に光を無くした茜さんが反応し、その焦点が合っていない瞳を向けてきた…。分かってるから。忘れてないから。応援してるから。

「せめて半分の資金だけ残すとか…。」

きりちゃんが何とか説得を試みているが、無理くさい。ずん子さんの見立てでは、到達2人が組むことはアバンの弟子にアバン復活並みの強化フラグらしい。例えば懐かしい。

しかもそれを言ったのが、どこぞの大魔王的な覇気を持つずん子さんだった。いやまあ、大魔王に実際会ったわけではないので、そんな感じがするっただけだが。

「ど、どうでしょう…。 ゆかりさん。」

助けを求めるように涙目のきりちゃん。ゲーム中盤に入つての無一文は流石に巻き返せないが…。とてもじゃないが、なら個別にやろうとは言えない雰囲気。

…。いやまあ、そんな雰囲気が無くとも、この娘を突き放す選択肢が頭に入らない程度には、ほだかされているのだが。

まあそういう訳で選択肢が一つしか無い以上、迷う必要も無いとお金を全て銀行側に渡し、無一文になった。

「ゆ、ゆかりさんっ！ありがとうございます！！私、ゆかりさんのために尽くしますから！！
一生かけて！！！」

何故か親友達から上がる歓声と拍手。

そして、きりちゃんの頭の中では何か感動的な場面だったのだろう。

目を潤ませて抱きつかれた上に勢いあまって押し倒される。一生って、人生ゲームの中の話だよな?…いや違うんだろうな。

「くつくつく、いくらずん姉さまでもゆかりさんと一緒に私には敵いませんよ!資金0程度のハンデで安心しないことですね!!」

きりちゃんを宥め、何とか体勢を立て直すと、当たり前のように膝に乗ったきりちゃんが、実の姉に啖呵をきっていた。割と興奮してるらしく体を大きく動かしているのでバランスを取って倒れないように体を支えてあげる。返答するずん子さんもノリノリで返している。

そろって高笑いする2人を見て、この姉妹仲良いよねと、きりちゃんの元隣にいて現在私のお隣さんになったマキさんに言う。

何故か、お前が言うな的なことをにっこり笑顔で返された。…解せぬ。

「…… ゆかりさん。敵は強大ですね……。でも問題ないはずですよ。なぜなら今日は、2人でダブルライダーなのだから!!」

きりちゃんの台詞につい乗せられてポーズをとってしまった。クセつて怖い。いつもと違って親友達に見られている事に気づいて頬が少し赤くなる。

…… まあ、いいや。

続いていた寸劇も一区切りついたらしくゲームを再開する……。でもきりちゃんってネタの守備範囲広すぎない？ほんとに小学生？

〜ゲーム進行中〜

「ゆかりさん、お願いします。」

きりちゃんも順番にスロットを回しながらゲームを進め、ついに終盤。私達は驚異的に追いつけてずん子さんとの資金差を縮め、駒の進み具合はトップになっていた。

途中、何か東北姉妹の間でゾーンのなせめぎ合いを幻視したり、さらなる借金で苦しむ茜さんを見かねた葵さんが借金を肩代わりしたりした。

茜さんは感動しながら「億万長者になったら、稼いだお金は必ず葵さんと山分けするから…」的なことを言っていた。…誰も口にしませんが、そんな未来は無いと確信していた。

そして順番は私。資金ではまだ負けているが、ここでぴったりの5の数字を出せばゴールし、一番手到着の報酬でずん子さんを抜くことができる。

さて唐突だが私はこれまで、スロットを回す指の力を「一定」にするように注意していた。

乱数なんて使われていない現実の、そしてそこまで洗練されて作られていないゲーム用のルーレット：：だからこそ、

同じ力で回した場合、最初の数字の位置からルーレットが「どの程度ずれるのか」は、把握することができていた。

だから、後は回す前のスロットの位置を調整して同じように回せば：：：

「5！流石ゆかりさん！！ぴったりゴールです！！」

いわゆる目押しに近いことをしてしまっただが、最後の最後まで見逃して欲しい。私に東北姉妹のような超常的な力なんて無いのだ。

そして2人で勝ち取った勝利に思わずきりちゃんを抱き合う。

… うん。なんだかんだで無一文になってからの、ゲーム後半の方が楽しかった。やっぱりきりちゃんとするゲームは楽しくて、相性？的なものが良いのだろうと再認識してしまう。

なお、一番手ゴールの報奨金を受け取り、ずん子さんはぎりぎり差せたのだが、1位と2位には届かず結果的には3位だった。

2位はIAさん。ずん子さんが私達と争っている間に着々と資金を貯めていった。

そして1位は… 何と葵さんだった。

原因は茜さんだ。

と言うのも、借金まみれでどん底だった茜さんはアイドルに転職しまさかの大ヒット、毎ターン「億」クラスのお金を稼ぎ、まさかの宣言どおりな億万長者に。

はしゃいだ茜さんだが、宣言通りに稼いだ分を葵さんと山分け。茜さん自身の資産は借金と相殺になってしまったが、半分まるまる貰った葵さんが結局1位となったのだ。た。

山分け発言を全員聞いていた以上、誰も文句は出なかった。

葵さん曰く、勝った気がしないとのことだが、元は姉を助けようとした事がきっかけなので、良い意味で因果応報的なやつなのだろうから受け入れるべきだろう。

そんなこんなでゲームは終わった。

市販の一般的な人生ゲームだったはずなのだが、何でこんなに波乱万丈なゲーム結果だったのだろう……と、どきどきに紛れて唇を突き出して迫ってくるきりちゃんの頭を抑えつつ思考にふけた。

⑯初夢なゆかりさんと、東北地方の秘匿事項を漏らしたきりたん

唐突だが、今私は現在進行形で眠っているらしい。

つまりは《夢の中にいる》と言う状況だ。自覚したのだから明晰夢、もしくは今年初だから初夢と言い換えて良いかもしれない。

「やっぱり、餅と言ったらずんだ餅ですよね」

夢の舞台上で私の体はちやぶ台なコタツに収まっていて、残りの3席には東北家3姉妹が座っていた。

そのうち2人はずんだ餅を食べ、会ったことが無いイタコさんは私の想像力不足故か、正面に座っているが酒瓶に囲まれ突つ伏し、顔が見えないまま寝ている。

「ゆかりさん、おねむですか？一緒に布団行きますか？」

なんとなく察していたが夢の中でも、きりちゃんは近くに来てくれるらしい。現状整理にぼーっとしていた私を心配してくれていたようで、大丈夫と告げるとほっとした様子だった。

∴ 一部年下に使うべき言葉や、一緒に眠ることが当たり前になっていることについては、スルーした。こうして折り合いをつけて、人は大人になっていくのだろう。

「そうですか。それなら、ずんだ餅食べませんか？とれたて天然の、美味しいやつですよ？」

きりちゃんが差し出してきたずんだ餅を受け取りかじりつく。夢の中でも味覚は認

識できるようで、その味は東北家で一度食べさせてもらった味そのものだった。もしかしたらその時の味を脳が再現しているのかもしれない。うん、美味しい：：けど、ずんだ餅に《とれたて天然》なんて装飾は初めて聞いたので、笑ってしまおう。

「ふふつ、確かに最近はずんだ餅も《養殖》に押されて、なかなか《天然物》も店先に現れなくなりましたね」

：：うん。確かに、和スイーツなんて言葉があるものの、なんだかんだ言ってケーキなどの《洋食》、つまりは洋菓子の人気には押されているようだ。

ただ、自然に発せられる《天然物》と言う言葉に何だかだんだん違和感を感じてくる。冗談な訳ではなく、合成着色料とか使われてない：：的な意味だろうか。

「いえ、魚なんかと同じですよ。自然に生きているずんだ餅を捕獲したのが天然物。家畜みたいに人工的に育てられたずんだ餅が養殖物です。」

…なるほど、洋食じゃなくて養殖…。まあ、夢の世界だからね。ずんだ餅が生きていてもおかしくは、無い？のだろう。

…うーん。

まあでも、手のひらサイズのずんだ餅がびよんびよん跳ねてじゃれているのはなんか和む…。かもしれない。そんなペットがいたら飼ってみたいかも。夢ならではの光景っぽいし。

「いえ、大きい個体だと体長10mほどのずんだ餅もいて、特に天然物はかなりの凶暴性を持ちます。もちろん市場に出る際はたぐさんの小さな形に加工されますが…。ゆかりさん、割と一般常識（※注 東北限定）だと思っただけですが、本当に知らないんですか

「？」

「例えば、同じように魚も市場に出る前に食べやすいように加工されていますよね…。まさか魚は切り身の状態で海を泳いでるとか思ってませんか？」

何故私は、小学五年生に常識が疑われるような表情で心配されているのだろうか。

だが、残念ながら巨大ずんだ餅が闊歩する世界の常識に沿った弁明は難易度が高く、思わず言葉に詰まっていると、追加のずんだ餅を取りに席を外していたずん子さんがあわてて戻ってきた。

「ええっ！10mオーバーのずんだ餅が攻めてきている!? ゆかりさん!! 迎撃しないと進行方向の我が家ごと潰されてしまいます!!」

話は何故か東北家を守るために巨大ずんだ餅を迎撃&捕獲する方向に。体長10mだとリアルモンハンか。夢だからリアルはおかしいのかも知れないが。

「そういえば今日は1月11日。鏡開きの日ですね。ゆかりさん。ずんだ餅をしとめて、鏡開きならぬ《ずんだ開き》といきましょうか。」

きりちゃんが戦鬪前の決め台詞っぽいことをドヤ顔で発しているのだが、正直微妙だったのでスルーした。



戦闘ステージ
Now loading.....

文字には形容しがたい、衝撃波が体を突き抜けていった。そんな威嚇、いや叫び声を上げたのはマリモ状の体長100mを越える黄緑色の巨体、ずんだ餅だ。未だ1kmは離れているのにここまで覇気が伝わってくる。

夢とは言え、どうしてこうなった。こんな夢を見せる自分の内面に不安を感じ……いや、今は目の前に集中しよう。

私たちを視認しただずんだ餅はこちらに向かい跳躍。50mは跳びはね、着地の勢いを消さずに転がってくる。その巨体を活かしてこちらを押し潰そうとしているのだろう。

転がり続け距離は縮み、私達と目測で数100mほどになった時、きりちやんとずん子さんの声が高らかに響く。

『今です!!』

きりちやんが作り出した障壁、ずん子さんが発動した罠の大きな落とし穴に、ずんだ餅は大きな地響きと共に勢いを失い、埋まってしまう。

さらに上空で待機していたずん子さんは間髪入れずサイヤ人の王子的なグミ打ちを上空から放つ。枝豆が焼けた香ばしい、そして甘い香りがあたりを包んだ。

ずん子さん……普段語っている、ずんだ餅への愛情とやらはどこいった。いやまあ、私の勝手な夢なんだけど。

「ずんねえ様の散弾でもコアを捕らえ切れませんか：。でもゆかりさん！ずんだ餅がダメージの自己修復で動きが鈍っています!!今のうちにコアを打ち抜きましょう!!」

自己修復：。コア：。ずんだ餅とは一体。

色々ツツコミ所に事欠かないが、重ねて言うが夢だ。私のスルー力が試される。

きりちゃんが目の前に作り出した半透明のウインドウに、コアの位置を示す赤色の点
が映る。ずんだ餅の内部を不規則に、しかも高速で動き回っていることが分かった。

私はきりちゃんが横で手を添え、魔法的な力を注入してくれているらしいショットガ
ンを構え、狙いを定める。

ずん子さん曰く、他に足止めの策はいくつもあるらしい：。が、一発で決めるつもり
だ。

コアは確かに高速で不規則に動いている。：
だが私が外すには、速さもランダム性も
全く足りていないっ……。！！

私は、息を止め、静かに引き金を引いた

……
所で目が覚めた。
せめて当たったのか結果が知りたかったのだが。

「それは何と言うか、まさに夢って感じの体験でしたね」

後日、私は夢の内容をきりちゃんに話してみた。反応は案の定と言うか何と言うか。：。まあ、《そんなの、東北地方では日常ちゃはんじですね》とか言われたら、どうしようかと思つてたけど。

「いえいえ、東北地方は10m越えのずんだ餅がそこらへんを闊歩して、民家を襲うような魔境ではありません：。流石に。どこのファンタジーな世界ですか。」

苦笑するきりちゃんに、ほつとするが、ファンタジーの塊のような魔法少女に言われると少し釈然としない。

「今は7〜8m級のずんだ餅さえ、山奥の秘境でもなかなかいません。そもそも乱獲や、外来種の洋菓子、特に雑食のケーキに餌や住処を奪われて人の目が付くような場所にずんだ餅達は生息していませんよ。」

それに彼らは、よほどの事がなければ人を襲わない、草食で日向ぼっこが好きなのやさしい生き物なんです」

…
ん？

「まあ、東北地方全体でカバーストーリー《ずんだ餅は100%工場生産》説を流してるから今時の子供は生きてることさえ、知らないかもしれないかもしれませんが…でもそのカバーストーリーのおかげで、人が立ち入らないずんだ餅が生きていける生態系と環境が最近山奥とはいえ確保できているみたいですね。」

…
うん。えっ？

「ただ、まだまだ数も大きさも一昔前の水準には戻っていません。養殖や、餌となる枝豆の植林についてはうちの家も出資していますが、ずんだ餅の生育には現代科学でも謎が多くて……」

………あれ？えっと、つまり？

「いまいち情報を噛み砕けない私と、立て板に水を流すように情報を追加し続けるきりちゃん。」

そんな私達の耳に、東北地方の山奥に隠れ潜んでいた20m越えのずんだ餅が配下を引き連れ《打倒洋菓子》をプラカードに掲げ、南下を始めた……と言う知らせをずん子さんが伝えてくるのは、今から数分後のお話である。

⑰ 飼い主なゆかりさんと、飼い主なきりたん

「ゆかりさん、実はこの部屋でペットを飼おうかと思ってるんですよ」

ペット。もふもふだったりさらさらだったりして飼い主を癒してくれる動物達。

私自身、ペットショップなので彼らを見かけると、ふらふらと引き寄せられ、ついつい時間が経つのも忘れて見入ってしまう時がある。

きりちゃんも年頃の少女だし、かわいい動物達に触れ合いたいと思ってもなんら不思議でもないことだろう。うん、とつても良い案だと思う。この部屋なら私も一緒に遊べるだろうし。

それで、何の動物を飼うつもりなのだろうか。

「凄い目がキラキラしてますね…。えっと、それで迷っているので参考に聞きたいんですが、ゆかりさんは猫派ですか？犬派ですか？」

なるほど。割とスタンダードな2つの選択肢までは絞っているらしい。他の人なら悩む判断だろうが……。一緒に散歩したり、家で戯れたり様々な妄想…。じゃなくて、シミュレーションをしている私ならば即答できる。犬だ。

様々な要因を考慮する必要があるが、一番は構っても邪険にされなさそうと言う点が大きい。

Webで見かけた猫の漫画で、飼い猫に冷たくされた飼い主さんに自分を重ねた時は涙目になりそうだった。

いや、もちろん猫には猫のかわいさが……。でも犬のモフモフとか、健気さはそれに匹敵、あるいは凌駕……。それに芸を教えるのもロマンがあつて……。あと、犬種は柴犬が超おすすめです……。

「あつ、はい……。まあ、それなら犬にしましょうか。」

話しの途中だったが、速攻で私の案を採用してくれるきりちゃんに嬉しさよりも不安

を感じる。

：． 私 의견で判断してしまつて良いのだろうか？それにきちんと家族に了承を得ているのだろうか？私だつてペットを飼いたいと思つても、家に人があまりいない我が家では諦めざるを得なかつた経緯がある。きりちゃんも小学生だ。家族の了承は必須だろう。

「そこは大丈夫です。そもそもずん姉さま発案ですから。それに、ゆかりさんはこの部屋の主も同然じゃないですか。私は幼いですし、つまりはペットの筆頭飼い主でもあるわけで、意見を尊重するのは当たり前です。」

その理屈はおかしい。前提の段階から。

：． まあいいや。ずん子さんなら家族に根回しはすんでいるのだろう。何かそういうの得意そうだし。それに、きりちゃんも初めてのペットで色々不安だろうし、私が多少の責任を持つ程度ならやぶさかではない。

：． それに飼い主ともなれば、公然とモフモフできるだろうし。

「それじゃあ、これに名前を書いて下さい。」

きりちゃんが取り出したのはドックタグ。飼い主とペットの名前、それと住所と電話番号の欄があるプレートで、ペットが迷子になった時でも見つけてくれた人から連絡が来るかもしれない、そんなペット用品だ。

気が早すぎないだろうか。まだ肝心のペットもいないのに……とと言う言葉は、《既に飼い主欄に私の名前が鉛筆で下書きされたドックタグ》と《きりちゃんのきらきらした瞳》を見たら口から出なかつた。ペットを楽しみにする気持ちは分かる。すごい分かる。うん。

まあ、わざわざこの表情を曇らせることも無いかと、渡された油性ペンで飼い主欄に名前を書き、ドックタグを手渡す。ペットの首輪に生涯つけるものだ。かなり丁寧に、心をこめて名前を書いた。

この次は《飼い主欄》にきりちゃんの名前も書いてもらって、やってくる犬の名前の話題で盛り上がるのもいいかもしれない。

あれ?・・・と渡した後に気づく。

下書き通りに名前を書いたけど、きりちゃんの名前を書くスペースが《飼い主欄》にほとんど無いと言うことに。いくら筆頭飼い主?とやらでも私だけ名前を書くのは悪い気が……………何て考えていると、

「はい、それじゃ…」

きりちゃんは受け取ったドックタグの《ペットの名前欄》に《東北きりたん》と書き、下書きを消し、そのままポケットから出した首輪にドックタグを繋げ、何故か自分の首につけた。

さらに頭に犬耳付きなカチューシャをつけ、私の瞳をまっすぐ見て告げる。

「これからよろしくお願いしますね。ゆかりさ…ご主人様?」

犬耳と首輪をつけてかわいく変身し、ポーズを決めるきりちゃん。

…なるほど。私はペットへの欲求に目がくらみ、罨にかかったらしい。

私はにつこり笑い、首輪に手を伸ばす。そのまま外してしまおうとしたが、

「わー。早速構ってくれるんですね。ご主人さまー。ちよー嬉しいですう。」

同じくにつこり笑顔なきりちゃんの両手に阻まれ、レスリングのように手を組み合う形に。

何その棒読みっぽい話し方は…それにペットのつもりなら、飼い主の言うことを聞くべきじゃないかな？

だからきりちゃん、私を社会的に抹殺しようとするのはやめようね。

「残念ながらペットになつたばかりで躰不足です。きちんと調教すれば、盲目的に言うことを聞くお利口さんになりますよ？それに安心してください。社会的に死んでも東

北家で受け入れますので。」

目を伏せ残念そうな表情の後、不敵に笑い出すきりちゃん。

やめて、今のやばい格好で調教とか、やばいセリフを口にしないで。それとそのセー
フティネットは使ったら最期、絡め取られて一生抜け出せないやつだ。

と言うか、魔法でブーストでもしてるのか、きりちゃんの、力が………かなり強い。

くっ……このっ………

数分に及ぶ格闘と説得のすえ、何とか私の直筆サインが入った犯罪の決定的な証拠……ドックタグは渡してもらったことができた。冤罪なのに、決定的な証拠とは如何に。

でも引き換えに今日この後は、きりちゃんのワンワンプレ……ごっこ遊びに付き合うことに。

どうしてこうなった……と言う最近良く思う疑問は、《きりちゃんと仲良くしてるから》と言う大元の原因にたどり着いてはいる。

でも今更きりちゃんとの関係を切ることなんて考えられない私には、原因が分かって

もどうしようもないのだが。

……まあ、いいや。見方を変えれば、《小学生のおままごことに付き合っただけの優しい年上のお姉さん》的な構図になるし。健全健全。

「ゆかりさん、そんな胡乱げな目で見て、どうかしました？あつもしかして、ゆかりさんはペットに服を着せないタイプですか？それなら……」

……健全とはいっただい。

イソイソと躊躇なく服を脱ごうとするきりちゃんを止めるべく、とりあえずいつものように頭をなでて、《私はペットに服を着せるタイプ》と私自身、初耳な情報が私の口から発せられた。

……でも相変わらず、さらさらな髪に加え、いつもはない犬耳（ずん子さん作。実際に感覚があるらしく、ぴよこぴよこ動いている）は最高にさわり心地が良く、もっと強

く撫で回したい欲求が生まれる。

「んっ…： そうですか。 んう…：…： ご主人様。 今私は犬なんですから、撫でる力はもう少し強めにお願いします。」

考えを見透かされたような言葉に一瞬手が止まるが、要望どおりに強めに撫でてあげる。整った髪が少しだけ乱れてしまうが、気持ちよさげなきりちゃん。

何だろう、綺麗に積もった雪面に足跡をつけているような充足感が…：…： これ以上考えるのはダメだ。何か戻れなくなりそう。

「わんっ!!」

無心で撫でていること数分。 今度はお手をしたいと要望を受けたので命令してみると、きらきらとした瞳で私の手の上に手を重ねられた。 その輝いている瞳には《褒美》

と書いてあった。即物的な所が正直でかわいい。

そのまま、右手にほつぺたを押し付けるようにじやれついて来る。

何を要求されているのか伝わったので、手を動かしてあげると気持ちよさそうに声を漏らすきりちゃん。

何このかわいい生物。凄いかわいいんだけ……無心。そう、無心にならなくては。

「んっんぐ……えへへ美味しかったです。」

私の手のひらに載せたお菓子を食べるきりちゃん。やばいかわいい……えっと、さつきまで何を必死に考えてたんだっけ？

……ああ、そうだ。きちんと待てができて、とっても良い子な飼い犬には、きちんと

ご褒美をあげなくちや。飼い主として当然の義務だ。

普段触らない首の後ろや、人獣両方の耳など、触つてあげると体の力が抜け、リラックスしてくれることが分かった。

ただ、敏感な部分みたいなので、やさしく触つてあげる。健気に命令を聞いてくれる飼い犬の気持ちに答えたくて、撫で方を工夫し、撫でる範囲を広げ、撫でる動作にも気持ち持ちがこもる。

「マーキング：：です。はぐつ：：次は、左手ですからね。待つててください。」

私の右手は、きりちゃんに両手で押さえ込まれ、はぐはぐと甘噛みされていた。痛み

は無く、跡も残らなさそうだが指一本づつの丁寧さと、そして必死にマーキングをする姿は堪らない愛おしさを感じてしまう。こんなに慕ってくれるなんて…なんて理想的なペットなのだろう。

「ご、主人…様。」

犬は急所でもあるお腹を見せることで、服従の意思を伝えるらしい。だからそんな時は、きちんとお腹に触れて、上下関係を教えてあげなくてはいけない。

ベツトに仰向けになり、瞳を揺らしながら見上げるきりちゃんを見下ろし、私は…

あ………こんなペットなら、ずっと飼っても、いい、かも……しれな、い………

「むふふ、堪能しました。満足です!!」

むふふと鼻息荒く告げるきりちゃん、犬耳と首輪をようやくと外してくれた。

従順なきりちゃんは、すっごいかわいかったし、めでののも楽しくて、さわり心地もよかった。自分が何やってるのかよく分からなくなるまで、私も堪能してしまった。何だか意識がまだぼーっとしてる。

…まあ、色々危なかったが、自制すべき所はきちんと自制したし、乗り切った後では楽しい思い出の一部と言えなくもない。特に最期なんて危なく思わずお腹に足を…いや、これ以上考えるのはやめよう。

思いとどまって手でお腹を撫でるだけにしたし…うん。きちんと自制できてるか

ら問題ないはずだ。

そんな風に自己暗示をしていたら、いつのまにか犬耳カチューシャと首輪を、私は付
けられていた。

…あれ？きりちゃん？

「ゆかりさん。昔の偉い人は言いました。相手の立場になつて物事を見ると、視野が広がると……」

その偉い人とやらも、ペットと飼い主の立場は考慮にいれてなかつたと思う。

「ゆかりさん。今夜は、付き合つてくれるつて言いましたよね？特にどっちがペット役なんて決めてなかつたし……交代です。」

それにゆかりさん、何だかんだで結構楽しんでいましたし、自分だけ飼い主をして終わるなんて……フェアじゃないと思いませんか？」

口元は笑っているが、ジツと見つめる瞳は笑っていない。そんな瞳に覗き込まれる…… あっこれ、抵抗できないやつだ。

察してしまった私に、ゆつくりと《ご主人様》の手が近づいて……

この日以降、私ときりちゃんは《お手》と互いに言い会うと、反射的に相手に手を出してしまう：謎の後遺症にさらされることとなる。

⑱ デイフエンスなゆかりさんと、オフエンスなきりたん

「ゆかりさん、ゆかりお姉ちゃん、ゆか姉… うーむ」

一緒にゲームをしながら私の膝の上で、私の名前を色々連呼しているのは東北きりたん、きりちゃんだ。

親友の妹さんで、気の合うゲーム仲間で、慕ってくれる元婚約者で、お泊まりさせてくれる家庭教師の生徒で、最近は大抵一緒にいる妹分だ。

…
改めて考えると、きりちゃん属性多くない？

「ゆかくん、ゆかちゃん、ゆかりん…」

思考にふけってる間にも何だかヤバイ方向に進んでいた。

止めるべきだろうか…。うん、止めるべきだな。とりあえず声をかけてみよう。

「んう？何ですか、ゆーちゃん？」

それは私が聞きたいです。きーちゃん。

「： あつ、えつとですね。呼び方を変えれば、もつとゆかりさんと親しくなれるんじゃないかなーと試行錯誤してたんです。」

振り返り、混じり気のない真剣な瞳を向けられ、つい視線をそらす。

： 相変わらず好意がまっすぐ過ぎてくすぐったい。

そんな風に赤くなっているだろう頬を、いつの間にか体ごと向かい合わせになつてるきりちゃんが両手で挟み込み、無理やり視線を合わせられた。

「照れてますよね？やっぱり可愛いですね。… ゆかりさん。チューしていいですか？」
ダメです。と言うか、顔近い。

この前のペットのてんやわんやの後、ボディタッチが多くなったと言うか、さらに距離が近くなった気がする。

「そこを何とか」

何ともなりません。

「舌は入れないので。」

むしろ入れる予定あったの？最近の小学生こわい。

「うーん確かに：：初キスはディープなのより、ライトな感じで、夜景もしくは夕暮れが綺麗な所で2人つきりが良いです。」

そっか。ならそれは、将来のお嬢さんにとっておいてください。

「でも据え膳は頂きたいと言うか：：後、お嬢さんって言うより、ゆかりさんはお嫁さんの方がしつくり来ますよ?」

：：：：手強い。狙いをそらしてくれない。

「んー、あつ、なるほど：：ゆか姉、キスしましょう」
だからしません。

「それなら…… ゆかちゃん、ちゅっちゅっしよっか？」

…… 呼び方と誘い方変えても無駄だよ？

別に呼び方変えると好感度が上がる的な裏設定は私には無い。好きに呼んでほしい。でもキスはダメです。

「むー。」

きりちゃんのほっぺたがふくれて、遺憾の意的な感情を伝えてくるが、きちんと断つたので分かってくれたはず……。なんて考えていると、服を掴まれ引っ張られる。

「…… その、私とキスするの、嫌なんですか？…… やっぱり」

そのまま悲しげな表情で見上げられ、心が揺さぶられる。

…… 唇はダメとしても、頬にキスくらいなら良いかもしれない、なんて少しだけ思ってしまったが、やっぱりダメだ。

「む、頭を撫でて誤魔化そうとしますね。… まったくもう。」

一度受け入れてしまうと、きりちゃんは遠慮とか自重とかかなぐり捨てて飛びかかってくる。

例えば… 膝に乗ることだって、当初は背筋を伸ばし気味で体重をかけまいと気にしていた。

そんな様子に遠慮しなくて良いと告げたのだが… 結果的に今では当たり前のようにくったり寄りかかり、むしろぐいぐい体重をかけることを楽しんでいるようで、遠慮のカケラも残ってない。

いやまあ、暖かいし懐いてくれるのは嬉しいのでそれは自体はまあ良いのだが… 問題はきりちゃんのブレーキが0か1しかない所だ。

今回も、もし頬だけでも許してしまうと、許された範囲で全力でキスをしてくるに違いない。… 絶対ヤバいことになる。

幸い、きりちゃんはダメと伝えれば、きちんと我慢できる良い子だ。

だから、これからもダメなことは年上の私がきちんと断って、ブレーキ役にならないと。

「… あつ、でも呼び方の方は何でも良いんですよね？じゃあ旦那様とか、あなたとかでも…」

… あつ、やべ。

そこもブレーキかけとくべきだった。

⑩告白し続けるゆかりさんと、告白し続けるきりたん

「ゆかりさん。ゆかりさん。」

いつも通り勉強を終え、きりちゃんを抱き枕にしてゲームな今日この頃。

今日はストリートなファイター達を操作する格闘ゲームで対戦中だ。

相変わらず小学生とは思えないほど巧みに操作するきりちゃんだが…流石に年齢差分で私が勝ち越している。

多分そろそろ、きりちゃんからハンデを付けて欲しいと言う頃だろうと思つたので、

呼びかけてくる声に少しだけ感じてしまう優越感にひたりつつ、気の無い感じな返事で先を促す。

「∴好きです」

左耳と右耳に同時に入ってきた告白の言葉。遅れて意味を理解して、思考が数瞬膠着する。

∴脈絡が無さすぎる。

何故このタイミングで私は急に告白されたのだろう、と言う疑問は

「今ですーもらいましたっ!!」

きりちゃんが操作する世紀末ヘッドなキャラが繰り出す小キツクからのコンボ、そしてカットイン入りの強烈なムーンサルトに、私の操作キャラが断末魔をあげる。：一連の流れを見て答えにたどり着いた。

なるほど。さっきの発言は私の隙を生み出すための言葉だったのか。

：
卑怯な。

「あつすいません。噛みました。《好きです》じゃなくて《隙あります》の言い間違いでした。嘘じゃないです。噛みまみたので…。ほらほら、次のキヤラを選択してくださいよ」

違う、わざとだ。私はどこぞのロリコン半吸血鬼とは違うので騙されない。証拠にきりちゃん頬が赤くなっている。照れるくらいなら言わなければ良いのに。

「ゆかりさん。良く言うじゃないですか。《精神攻撃は基本》だって…。それに私は非力な小学生ですよ？年齢差的にも、このくらいの場外攻撃は許してくださいよ」

つまりわざとじゃん。と言う言葉は、年齢差の話題を出されると止まってしまう。普段小学生とは思えない言動を乱発している癖にこういう時だけ縮むのはずい、と思い

つつキャラ選択を終える。

「それじゃあ、続けましょうか…」

まあいいや。同じ手は通用しない。私の心を弄んだお仕置きに…次はコテンパンにしてやろう。

「ふっふっふ… また勝っちゃいました！ ゆかりさんにここまで連勝したの、初めてかもしれませんか」

同じ手が通用しまくってる件。

また、きりちゃん心理攻撃（告白）によつて負けてしまった。

初見、いや初耳？… で無ければ動揺しないと高をくくっていたのだが、何とか初撃の言葉に耐えても、きりちゃんの（無駄に）心がこもっている甘つたるい言葉はその後も続き、翻弄されてしまう。

… どうしよう、凄く悔しい。

小学生相手に大人気ないのかもしれないが、年齢差で勝敗を割り切れるような相手なら、そもそもここまで入り浸っていない。きりちゃんは私にとって、強敵と書くライバ

ルでもあるのだ。だから誰よりも勝ちたい…。のだけど、

「(前略)： ゆかりさんがぎゅーつと抱きしめてくれるとですね、大切にしてくれらんだなあって実感するんです。もちろん、恋愛的な要素はそこに無いのかもしれませんが、その度に惚れ直してしまうと言うか…。(中略)： それで照れているゆかりさんの表情はとつっても綺麗で、それでも今もこうしてきちんと私の言葉を無視せずに聞いてくれるじゃないですか、そこに…。(中略)： ゆかりさんは分類するとすればスレンダーエロって感じですよ。確かにポリュームの意味ではずん姉さまの体系が理想なのかもしれませんが、むしろその抱きしめると壊れちゃいそうな線の細さと、チラチラ見えちゃううなじとか発禁ものですよ？私の性癖ゆがんだらちゃんと責任とつてくださいね？と言うか…。(後略)」

きりちゃんも熱に浮かされたように目をトロンとさせながら私への好意？を話し続ける。小学生がしちやいけな表情をしてる。

と言うか、それだけしゃべって何故嘯まない。何故普通にゲームができる。

私の方は、きりちゃんからの心理攻撃が来るとわかっていても、予測可能回避不可能でやられてしまうと言うのに。

格闘ゲーム全般に言えるが、ある程度コンボが繋がるようになると、後はプレイヤー同士の読み合いが勝負を決める。

だからプレイの腕に大きな差が無い私ときりちゃんとの対戦は、普段年齢的にも私が有利なのだが……心理的にガタガタになってしまいう今の状況だと、勝てるすが無い訳で。

… いや、勝つ方法ならある。

私もきりちゃんへ心理攻撃、つまりは好意を伝えてスキを作れば良いんだ。

気の利いた言葉は考え付かないので、とりあえずストレートに《好きだよ》と伝えてみる。

… ちょっと遅れて《友人として》とつけ加えるのも忘れない。これなら嘘じゃない。

「さらにゆかりさんの魅力はですね… ん、何ですか、ゆかりさ… え？ えっ？ …… ああ。なるほ… ええっ!？」

混乱するきりちゃんを尻目に、高速で私の指がコンボからの必殺を打ち込む。今度は逆に、きりちゃんの操作キャラが吹っ飛んでいった。

「あーっ！ずっ、ずるい！！大人気ない！！！」

ずるくない。大人気なくない。

対戦中に手を止める方が悪いし、精神攻撃は基本なんですよ？と告げる。

やばい、久しぶりの勝利にニヤニヤが止まらない。悔しそうなきりちゃんの表情もあ
いまって、なんてカタルシス。

「くっ……いいでしょう。ですが初恋真つ最中の私に心理戦（告白合戦）で勝てると思わないことですなね！乙女心をもてあそんだ報いは受けてもらいますよ!!」

それはこっちのセリフだ。

察しが良いきりちゃんには心のこもっていない形だけの言葉では鼻で笑われてしまうだろうが、問題ない。

きりちゃんのこととは慕ってくれる妹として好きだし、優秀な教え子として好きだし、競い合うライバルとして好きだし、安眠できる抱き枕として好きだし、自発的に暖めてくれる湯たんぽとして好きだし、健気なペットとして……何か後半は人に向ける好意じゃない気もするけど……ともかく、本音で言える告白はいっぱいあるのだから。

その後も精神攻撃込みのゲーム対戦にのめりこみ、いつも以上に疲れてしまった私達はぐっすり寝入って、翌朝寝坊しかけ、ずん子さんに揃って叩き起こされることとなるのだった。

②0 嫁になつたゆかりさんと、夫になつたきりたん

「ゆかりさん、この動画は… いったい、どういうこと、なんですか？」

きりちゃんのスマホを見せられる。… 見られなくなかった、私の恥ずかしい動画が再生されていた。

バレて、しまった。

ネットに流れているので誰でも簡単に見えるが、顔は写ってなかったので大丈夫だと思っていたのに……

「私がゆかりさんの声を聞き間違えるはずが無いじゃないですか。どうして相談してくれなかつたんですか？ こんな、こんな……」

こんなこと、言えるわけがない。だって私にとって、きりちゃんは……

「実況プレイ動画をニコニコ動画に投稿してたなんて！」
家族同然な訳で、ネット活動を妹分にバレたとか黒歴史ものなんだけど。勘弁して。

「あのゲームの実況動画にしては、珍しく総合ランキングにのつたので再生してみたんですよ。」

きりちゃんもやってるゲーム、ジャンルはFPSで、つい魔が差して実況動画を撮ってアップロードしてみたと思ったら評判が良く、調子にのつて続けて投稿していたら4話目で初のランキング入りして密かに喜んでいたところだった。

「そしたら、見慣れた半分人間やめた神プレイが目に入って、しかも聞き慣れた半分女神な美声が実況で、とどめにそのまんまなユーザー名だったんで悩む暇もなく、ゆかりさんだと確信しました。」

それだと私10割人間やめてることなっちゃうよ？

… えっと、きりちゃん。できれば他の人にはこの事は内緒にして欲しいんだけど

「ゆかりさんと私だけの秘密ってことですね。正直その言葉の響きだけでOKしちゃいますけど… 一つ条件を付けさせてください」

条件。

変なことじゃなければ受け入れるから、内緒にして欲しいけど、なんだろう。

「そこはネタ的に《何でもしますから》って言って欲しかったのですが。あつ、変なことじゃ無いですよ。ただ次の動画から、言うなれば… 共犯にして欲しいんです」

何でもはしません。…共犯？

くニコニコ大百科「ユカキリコンビ」とはく

ユカリとキリの女性2人の実況プレイヤーのこと。卓越したプレイや、仲が良い2人のかけ合いが魅力。

※以下、動画のネタバレを含みます。

〈第1話目〜第4話目〉

ユカリ単独の実況動画。落ち着いた声とはうらはらに、たんたんときルスコアを積み上げていく凄腕プレイに徐々に人気が上がって4話目で初の総合ランキング入り。

〈第5話目〉

キリが初登場。偶然ユカリの動画に気づき一緒に実況プレイがしたいとネダつたらしい。

キリは小学生とのことだが、ユカリと遜色無いプレイの実力に、《お前のような小学生が…》的なコメントが溢れる。また今までより明らかに楽しそうなユカリに、ロリコンを疑うコメントが流れる。

〈第6話目〉

動画冒頭に前回コメントにあったロリコン疑惑をユカリが否定。

だが弁明中に、普段も仲が良いことから周りにもロリコンと疑われていると口を滑らせ、さらにキリが《ユカリはロリコン》と認めたことで、

めでたく? 《ロリコン（ロリ公認）》タグが以降の動画に付けられる。

〈第7話〜第10話目〉

会話のやりとりからこれまでの動画及び日常で大抵ユカリはキリを膝の上に乗せていることが判明。このころには訓練された視聴者達は、《流石ユカリ俺たちにできないことを…》《ロリコンとして弟子入りしたい…》などのコメントが溢れる。

またユカリの事が大好きらしいキリの《義理の姉妹みたいなもんだから結婚できる》

などの、あれな発言が相当数になる。

(ページ下部 キリ発言集まとめ 参照)

〈第10・5話目〉生放送回

動画中盤キリから提案された罰ゲームをかけた勝負が開始。

生放送と言う状況を巧みに利用した小学生と、そしてまんまと乗せられているユカリに視聴者達の間で戦慄が走る。

罰ゲームをかけたゲーム開始直後、ユカリコンビを除く8人のプレイヤーはランダム選出にも関わらず、《8人全員が生放送視聴者》と言う神がかった状況が判明。

さらにユカリに罰ゲームを受けて欲しいコメントやプレイヤー達の流れに乗って、《キリチーム》が結成。実質1対9の状況になり別ゲー化。

ユカリがキレがかかるが、キリの挑発に乗ってそのままゲーム続行。この状況からキリ以外の8人を始末したユカリは相変わらず凄まじい腕だったが、キリと一騎打ちになった時にはユカリは体力も装備もボロボロで健闘するもキリに敗北。罰ゲーム確定。

実況者と視聴者の垣根を超え、勝ち取った勝利に全員(ただしユカリを除く)で喜んだ。

〈第1話目〉

前回の罰ゲームとして動画冒頭に、《ユカキリコンビの夫の方、キリです！》《ユカキリコンビの：：よ、嫁の方：：ユカリです》という以降恒例となる挨拶が初披露され：：

☒ヤンデレなゆかりさんと、デレデレなきりたん。(きりたん誕生日)

「ゆかりさん的には何デレが好きですか？」

きりちゃんと予約していた新作のモンハンを受け取りに外出していた時、握った左手……と言うより捕獲された左腕の先から謎な質問をされた。

天気の話程度の気軽さ、けれど何デレと言う日常ではまず使わない言葉に一瞬思考がフリーズする。

「ついでに今の私はデレデレなきりたんです。お好みならツンデレとかクーデレとかも対応してます。あつ、でもヤンデレは周りに迷惑がかかりそうで、罪悪感とかがパないので私には無理かもですが……それでも求めてくれるのなら、全力で頑張ります！」

∴ とりあえず、変に頑張らずにそのままできて欲しい。頑張って監禁とかされても困る。

まあ、部屋に入り浸ってる今の状況と大して変わらないかもだけど。

「ほほう。それはつまり、ありのまま、プレーンなきりたんをお求めという訳ですね。∴今の言葉、きりたんにポイント高いです。流石ゆかりさん！」

褒められて? しまった。

∴ でもまあ、嬉しそうなのが伝わるニコニコな表情につられ、つい笑みが溢れてしまった。

そんな話があつた数日後、きりちゃんが誕生日を迎え、東北家に混ざつて一緒に祝つた。きりちゃん曰く私とのゴールインがまた一つ近くなつたらしい。脳のセーフティが働いて私には理解できなかつたことにしとく。

私からのプレゼントは一緒に予約して、一緒に受け取つたモンハンの最新作で、発売日の関係で既に渡してある所か、既に結構一緒にプレイしてたりする。

誕生日前に渡す事や、予約が重複しないように本人と予約しにいったことは、イベント的に微妙と言われてしまひそうだが、きりちゃん本人が一緒に買い物を楽しんでくれたから良しとする。

夕飯のお祝い後きりちゃんの部屋に入り、進めているモンハンをやりつつ話しをしていると、数日前の《デレ》な話題が再燃した。

「ゆかりさんは微ツツンデレ&微クーデレですよね。」

・・・ そうなの？

自分のことなんて考えたことないが、近くにいるきりちゃんやんが言うならそうなのかも知れない。ゲーム内で転がりながら大剣を振り回して、そんな風に考える。

一昔前と比べてお助け猫がちゃんとお助けしてくれてる。逆に救援にならない救援プレイヤーがたまにいるけど。

「そうなんです。ゆかりさんに関しては達人級の私が言うからには間違いありません。・・・ズンダアロー！」

そうなんだ。自分の事だし覚えておこう。

きりちゃんがゲーム内で使ってる弓、使ったことないけど楽しそう。要所要所で《ズンダアロー》なる技名を言いながら打ち続けている。

聞くと実在するはずん子さんの必殺技らしい。

本物は射程が13kmだったり、舞い散る無数の桜吹雪のように矢が増殖したり、高すぎる魔力によりフィニックスな形になったり、面の当たり判定で迫ってくる絶望感溢れる壁のようなオーラを放つたりとバリエーション豊からしい。

…… 本人もいないし、ツッコむつもりは無い。

あつ、倒せた。

「よしっ! …… もちろん私も、今のままなゆかりさんが大好きですが、ヤンデレなゆかり

さんとかも見て見たいです。監禁しちゃうほど私にドロドロした愛情を向けるゆかりさん……実は隠し持っていたりしませんか?……あつ、レア素材ドロップしました!」

そんなスーパリーの在庫品みたいに私のヤンデレ?の有無を聞かれても……ふむ。せっかくの誕生日だしリクエストに答えてみても良いかもしれない。ちようどクエストも終わったタイミングだし。

「ん?……ゆかりさん?」

後ろから左手できりちゃんの両目をふさぎ、右手でいつもより強めにお腹を抱きしめる。

不思議そうに声を上げるきりちゃんに答えず、普段に比べ低くゆつくりとした声で、感情をたっぷりこめながら目の前の小さな耳に囁く。

捕まえた……もう逃さない。
ずうつと一緒だよ？きりちゃん……

「……」

自分でもそれっぽい声を出せたと自画自賛しつつ、余韻を残して両手を離す。

… あれ？きりちゃんの反応が無い。

どうしたんだろ？

そんな風に反応をしばらく待っていると、きりちゃんは囁いた耳に手を当て、振り向かずに言葉を発した。

「… ゆかりさんのエッチ」

えっ。

いや、お求めのヤンデレなんだけど…

「わかってます。リクエストに答えてくれたんですよね。ありがとうございます、凄く良かったです…。でも、ゆかりさんはエッチです」

う、うん…。えっ、な、何故!?

そんな私の疑問に答えてくれぬまま、私達は次のクエストに向かった。

「… エッチ過ぎです。色々、小学生なのに目覚めちゃいそうでした。ゆかりさんは本

当に：・もう。」

ため息をこぼすような小さ過ぎて聞こえない眩きに、表情を伺おうとしても何故か絶妙にそらして顔を合わせてくれない。

何だろう。

きりちゃんの初めて見せる態度に、怒らせるような事をしてしまったのかとオロオロしていたが、クエスト後は普段通りなきりちゃんで一安心……そんな、きりちゃんの誕生日な1日だった。

☒初めてのゆかりさんを、優しくリードする経験者なきりたん

「ゆかりさん、来月の中旬この日から一泊で一緒にスキーに行きませんか？」

きりちゃんを抱えるようにコタツに座りまったりしていると、きりちゃんは私が渡した予定帳を指差してスキーの話題を切り出してきた。

スキーか、誘ってくれるのはありがたいけど機会が無く滑った経験が無かったりする。

「えっ、ゆかりさんスキー初めてなんですか？…いえ、なんだか大抵のことをソツ無くこなしそうなんで意外と言うかなんというか」

何だかきりちゃんの中で、私に対するハードルが変に高いような気がする。

期待してくれるのはありがたいけど、ふとした拍子に現実とのギャップにガツカリとかされたら嫌だなあ。

「あつダメダメなゆかりさんも、それはそれでかわいいと思うので大丈夫です。」
それはそれで微妙なんだけど。

「それにしてもスキー初めてですか。…初めて。ゆかりさんの初めて。…私を手取り足取り。…密着して。…くんずほぐれず。…ぐふふ。」
それなら

小学生と言う現実設定に疑問が生じるレベルの下卑た笑い。これはひどい。

「…こほん、ゆかりさん。私が！このきりたんが!!教えてさしあげましょう!!!」

私のジト目に気づき、咳払いで仕切り直したつもりのきりちゃん。

教えてくれるのはスキーだけだよな？

キラキラと透き通った瞳になクセに、欲望丸出しな様子に不安しか感じ無いんだけど… まあ教えてもらうのはとても助かるし、多少は目をつぶるべきなのかも知れない。

でも、きりちゃんは滑れるんだ。やっぱり東北地方出身だとスキーをする機会が多いのかな？

「はい。東北地方の冬は降雪量が多く、場合によってはスキーの移動でしか身動きがでない状況もあるので、生きていくために必要で…。」

小学五年生が話すには割とシビアな世界が垣間見えた。続きが気になる所なのだが、このまま話し続けるとまた東北の知られざる一面（※ずんだ餅な話参照）を知ってSA

N値チェックするはめになりそうだったので話しを切り上げ、別の話題をふる。探索者には必須のコミュニケーションスキルだ。

テレビとかで見たことあるけど、リフトとかも転ばずに乗れるかちよつと不安なんだよね。

「ああ、確かに初心者は経験者に肩とか貸して貰うほうが安心かもですね。それでも不安でしたら…魔法でパワーアップした私が、ゆかりさんをお姫様抱っこして滑りましようか?」

小学生に担がれてのスキー、シユールすぎる。それ何が楽しいの…

「ゆかりさんに頼られて、ゆかりさんと一緒に景色を見て、ゆかりさんときゅーつとす

る…全部楽しくて、幸せになっちゃいます！」

…うん。

今が向かい合わせじゃなくて良かった。まったく、きりちゃんは本当に…もう。

それなら別に、スキーに行かなくても幸せなんじゃないかな？と照れ隠し半分で、きりちゃんを後ろから抱きしめている腕に力をこめ、ほっぺたをくつつけてみる。

「はい！なので今も幸せの真っ最中です!!」

まわした腕を捕獲され、ほっぺもぎゅうぎゅう押し返された。……まあ私も幸せだ

から良いか。

「くふふ… ところでゆかりさん。ちよつとお顔を拝見してもよろしいですか？ 私のユカリンアンテナがピンピンに反応してるんです。絶対今、超絶かわいいお顔ですよね。」
何その意味不明なアンテナ。

きりちゃんが体を離してこちらを向こうとするのを、そうはさせじときゅーぎゅーくつつく私。そんな風に不毛な争いを続けながら、ぬくぬくしていたのが先月のお話な訳で…

話しはスキー当日に続く。

↓↓スキー当日まで時間経過中↓↓

「それじゃあ、レッスンを始めましょう。ゆかりさん。」

見渡す限りの雪面に晴れ渡る空。きりちゃん曰くスキー日和らしい。勝手にかなり寒いのだろうと固定概念を持っていたが、そこまでも無いらしい。

きりちゃん：「いや今日は教えを請うので、きりたん先生、が選んでくれた（お揃いの）スキーウェアのおかげだろう。」

「先生：えへへ。」

：：： かわいいなあ。

無意識に撫でていた右手は、手袋と帽子に阻まれ、サラサラな髪に届いていない。

いつもと違う感触に物足りなさを感じ、手袋を外そうか悩んでいると葛藤を悟られてしまったらしく、きりちゃんに寒いから外しちゃダメですよと注意を受けた。

凶星を突かれて少しびびくりしたが素直に頷いておく。今日はきりたんが先生だし、従わないと。

なんてやりとりをしてると、気づいたら一緒に来ていたずん子さん達はさっさとリフトに乗って滑りに行ってしまっていた。

元々別行動の予定とは言え何も言わずに行ってしまうなんて薄情な。

(※注 結界発動中は周りの声が聞こえにくくなります)

「それでは、まずはスキー板の装着からですね。スキー板を担いで歩く時や、転んだ時とか割と簡単に外れるので、また装着する時は靴側の雪を取り除いて踵から勢いをつけて

金具を踏めば再度つけることができます」

講義が始まった。

何だろう。普段とのギャップでかつこよく見える。…知らない間に娘が成長していたことに気づく親の気持ちってこんななんだろうか。

…うん。

何だかんだ言ってきりちゃんは真面目で、とつても良い子だ。信頼だつてしてるし、今日はきちんと教わろう。

「次にストックを使って平面を進む方法ですね。リフトを乗る時も使います。慣れると使わないでも進めますが、最初は使えるものは使った方が安定します。」

ステイックを雪面に差して体を押し出すように力を入れると前に滑って進んだ。平面だからすぐに止まってしまいが。

「最後にブレーキの方法ですね。スキー板を八の字にすれば止まります。そのまま体を傾ければカーブします。では実際に、そのかなだらかな斜面を蟹歩きで上って、何度か試して見ましょう。」

なるほど。

… あれ、最後ってことはこれで講義終了？

「はい。後は滑ってなれたほうが早いです。そのために初心者コースがあつたりしますからね。て言うか、ゆかりさんの運動センスはずば抜けてるので超級者コースにいきなり送り出しても臨機応変に何とかすると思つてます。」

なるほど。

… いや、だからハードル高いって。

「後は人同士の接触に気をつけて下さい。どっちかって言うとなスノボーですが、上級者でも人同士の接触で危なくなる前に自分で倒れて回避する場面は多々ありますから。．．． たまに周りを見ずに突っ込んでくるDQNがスノボ・スキー問わずいますが、そういう奴は近づく前に私が吹っ飛ばしちゃうので安心してくださいね。」

話を聞きながら、きりちゃんの冗談に笑いが漏れてしまう。

「このために新魔法《詠唱破棄きりたん砲》をマスターしてきたので。」

きりちゃんのにっこり笑って細められた瞳は、本気の色が滲んでいた。私に向けられた目でないとしても、私の笑顔は引きつってしまった。

「大丈夫です。非殺傷ですから、ちよつとお空に吹っ飛んでもらうだけですよ。．．． 県を

またいで」

きりちゃん目、養豚場のブタでも見るかのように冷たい目だ。残酷な目だ……
かわいそうだけど、明日の朝にはお肉屋さんの店先にならぶ運命なのねって、かんじ
の……

「ゆかりさん？ちゃんと言話を聞いてください。教える身として困ります。」
あつ、はい。

その後、基本を終えた私は、午前中に一度だけ初心者コースに進むことができた。

「こつちですー……ここまで同じように滑って下さいー！」

その小さな体で精一杯手を挙げ主張するきりちゃんまで、同じように蛇行して滑る。

風を切る音。

視界を流れる風景。

火照った体に冷たい空気。

きらきらと輝く真つ白な雪面。

私の大切な親友兼、妹兼、コーチのおかげで、初めてのスキーはとても楽しい思い出となった。

「むっ、敵影接近！きりたん砲一斉掃し… むぐむぐ」

そんな大切な家族は、少々過保護な所がたまにキズなのだが。きりたんの口を抑えながらそんな事を思った。

☒穴を棒でゴリゴリするゆかりさんと、脱力し気持ちよくなるきりたん

「月一の耳かきで膝枕をしてくれる時の、ずん姉さまのムチムチな太ももの感触、それがもう最高で……えへへ」

実の姉に対する劣情を開けすけに話すきりちゃん。どこ向いているのか分からない瞳で口を半開きにして……色々残念だった。

この娘は私がきちんと支えてあげないとダメな気がする。色々コースアウトしそうだ。

……何か、ドラマで出てくるダメな夫をほうっておけない妻みたいな思考だなと自分で思ってしまった。

「おっと、屋外で口半開きはまずいですね。私は女子小学生：：私は女子小学生：：」

何やら自己暗示をして表面上は無垢な少女の表情になっていく。その様子はまさに劇的ビフォーアフター：：中身は残念なおっさんのままだろうが。

「それですね。その耳かきが壊れる……所まではいってないんですが、木製で古くなってきたので、ずん姉様から新しいのを買って欲しいと頼まれました」

そんなLINEのやり取りが表示されているスマホの画面を見せられる。

なるほど。

それで私は手を引つ張られて近所の薬局にいるわけか。夕方とは言え、きりちゃんは小学生だ。一人で出歩くのも危ないし、引率するのは問題無いが、先にそれを説明して欲しかった気もする。

まあ、外出するので一緒に来て欲しいと手を引かれて、何も考えずに頷いて来た私も私だけ。最近、小学生のきりちゃんに先導されても不安に感じる事が少なくなってる。

「ゆかりさんと私の、深あああい仲なら言わなくても伝わるかなって思っちゃいました。」

無駄に心のこもってる、深あああい仲とやらは置いとくとして、流石によそ様の家にある耳かき事情まで察してたら、それはそれで怖いと思う。

「ゆかりさんにとつても、そろそろ実家にな…あれ？でも出かけるって言っただけで、場所伝えて無いですよ？何で薬局って分かったんですか？」

ん?… えっと、あれ?確かに。何買うのか聞いてないはずなのに、他のスーパーとかは無意識に除外して薬局に行く気になってた。… 何でだろ。

「んー?… まあいつか。パツと買つて、帰ってくるはずんねえ様にサツと渡して、至福の時間を過しましょう。」

まあそうだね。理由なんて、無意識にスマホ画面が目に入ったとかだろうし。

… 至福。まあ確かに、母性溢れるずん子さんには耳かきしてもらったら、気持ちよさそう。

「むふふ、他の人だったら絶対ダメですが… ゆかりさんなら、ずん姉さまの膝枕&耳かきのコンボを分けてもあげても良いですよ。特別ですからね！」

ふふんつと無い胸を張るきりちゃん。いや胸はある。けど無い。失礼だから言葉にしないが、何かそんな哲学的な言葉を思い浮かべていると…

「いや、大してゆかりさんも変わらないじゃないですか」

「… えっ、ずんねえ様、急用で今日帰ってこれないみたいです。」

ずん子さんの急用… 地球のどこかに更地が増えることになりそうだ。

それはさておき、無事耳かきを購入して薬局から東北家の自室… ではなく、きりちゃんの部屋に帰った後、スマホを見ながらきりちゃんがショックを受けていた。

私も、ずん子さんによる耳かきのご合判に預かろうと考えていたので少しでも気落ちする。

… まあ、しょうがない。耳かき自体は買ったし、今日は自分で済ませよう。

「だ、ダメです。危ないから耳かきは自分じゃやっちゃいけない決まりに… うちは

なってるんです。」

確かに小学生が一人で耳かきって危ない。それにしても、親の目が届かない時でも儀に守っている所を見ると、東北家の教育は成功しているようだ。なんだかほっこりした。

「なっ何をほんわかしてるんですか！ゆかりさんは自分で処理できるかもしれないですが、私にとっては死活問題ですよ!?!」

耳を塞ぐように両手を当てながら騒ぐきりちゃん。耳に指をいれるのもアウトらしい。うん。よく躰けられてる…

しかし、耳かき出来ないってなると、さらにかゆく感じるよね。うーん、何とかしてあげたいけど…

： きりちゃん。
今、家に他の人は、いないんだよね？

「えっ!... えっと、はい。お手伝いさんも定時で帰つてると思いますし...」

ふむ、つまり私ときりちゃん、家の中にふたりつきりなわけだ。

「は... はい。ふたりつきり... です。」

ソワソワとするきりちゃん。瞳は何かを欲しているようで、揺れて、潤んでいた。

まあ何を欲してるかなんて話の流れで一目瞭然…耳かきだ。

きりちゃんが自分で耳かき出来ないなら、年長者の私がしてあげるしかない。ずん子さんのナイ斯巴ディでは無いが、膝枕のオプションもつけてあげよう。

ベット端に座り、ぽんぽんと膝を叩き、おいで…と、きりちゃんを呼び寄せる。

「は、はい…。ずん姉様、きりたんは今日、大人の階段を登るようです…。…」

ぼんやりした様子で何やら呟き、ふらふらと近づくきりちゃん。顔も少し赤くなっている。：：。そんなに耳が痒いのか。早く何とかしてあげないと。

「よ、よろしくお願いします。」

そしてきりちゃんは：。何故か私の膝の上に座り、向かい合わせの至近距離で見つめて来た。

：：：：。
きりちゃん？

「：：。ゆかりさん？もしかして私、手順か何か間違えちゃいましたか？」

もしかして東北だとこの体勢が耳かきのスタンダードなのだろうか… 何て考えていると不安げにこちらを見て聞いてくるきりちゃん。

いや間違いも何も、体勢が。これだと耳かきできな…

「た、体勢!?!… えっと、すいません。ゆかりさん。私初めてだし、小学生だから、よく分かってない所もあつて… できれば教えて欲しいんですけど」

初めてって、ずん子さんにしてもらってるんじゃないの? 耳か…

「ず、ずんねえ様とは姉妹な清い関係です！…だからその、そういう経験は私ありません!!」

私の声を遮るように声を張るきりちゃん。薬局での姉に欲情した様子を考えると、清いとやらの疑問を感じずにはいられないが、つつこんでもめんどくさそうだ。スルーしよう。

んっ？じゃあ薬局で話していたずん子さんの膝枕の話して、全部妄想だったの？…まあ確かに日頃妄想垂れ流してるから不思議じゃないけど。

「.: えっと、ゆかりさんは、その、こういう事.: するの、初めてですよ?」

一人納得していると、きりちゃんがおずおずと聞いてきた。不安げな様子を見るに私
が耳かき初心者だと思われているのだろう。

確かに初めて耳かきをする人に耳を任せるのは怖い。でも機会があつてIAさんと
マキさん、それと きりちゃんが合った事ない後輩にもして、凄い好評だったから大丈
夫だよ。と伝え、安心させるためにニッコリ笑いかける。

「ふえっ!? 3人も!!?、しかも.: こ、好評?」

何故だか目を回すきりちゃん。

うん。後、話を聞かれた琴乃葉姉妹にも、今度一緒にして欲しいって言われてるし.:

慣れてるから安心して身を任せてね。

とりあえず向かい合わせな東北式？は私やったことないから、やり慣れてる感じで普通にやろうか……と言い、私の膝に頭を乗せる形で横になってもらう。

「あの姉妹まで毒牙に……と言うか一緒ってことは姉妹并ってやつじゃ……それに、慣れて……でもそんなゆかりさんも……はっ、はい。最初はスターダードでお願いします。膝に頭を……こ、こうですか？」

何だかブツブツ言っていたが、返事をして言われた通りに私の膝を枕にするきりちゃん……耳ではなく、熱い視線がこちらに向いているが。

きりちゃん、そんなに見つめられると恥ずかしいし、首を横にしようか。

「そ、そうですね。あんまりじろじろ見ちゃダメですよ。あ、あの…電気はこのままなんですか？その、明るさとか…」

明るさ？ああ、このくらいの明るさなら大丈夫だよ。きりちゃんの穴の中もしつかり見えるだろうし。

「あ、穴!?!…そ、そうですね。いえ、私はゆかりさんになら見られても本望です！」

何か覚悟を決めている様子のきりちゃん。

よく分からないけど、棒が刺さったら危ないから、あんまり興奮しちゃダメだよ。きりちゃん。

「えっいきなり道具を使うんですか!?!それに、興奮しちゃダメなんて…無茶ぶりです！」

…
流石に、何か行き違いがあるような気がしてきた。

きりちゃん、これから《耳かき》をするんだよ？何か勘違いしてない？

「……え？耳かき？エッチじゃなくて？」

目を丸くするきりちゃんの発した言葉に、目を丸くしてしまう私。互いにそんな目を合わせ固まる。

えっと、いつのまにそんな話しに？薬局からずっと耳かきの話だったよね？

「：：あつ。：：：えっと、そうですね、確かに。：：：でも好きな人に、家にふたりつきりか確認されて、ベットのうえで《おいでっ》てお膝に誘われたら普通勘違いするでしょうが!!」

膝枕で横になったまままきれだすきりちゃん。涙目の感じだと思ったより傷ついてしまってるのかもしれない。

なるほど、それで勘違いさせてしまったのか。普段は以心伝心な関係になってきたうだけど、偶にきりちゃんの恋心的な視点が入ると今までも行き違いが発生したりしていた。

初恋すらしたことが無い私が恋愛感情というものが理解できないのが原因なのかも知れない。：：小学生のきりちゃんより初心というのも我ながらどうかと思うが。

言葉にして無いが見た感じ、勘違いしてしまった罪悪感も感じてしまっているよう
だ。そんな様子を見て、私も罪悪感が湧いてくる。

… きちんとフォローしてあげないと。

とりあえず頭を撫でて、宥めながらきりちゃんを落ち着かせる。心をこめて耳掃除す
るから、今日の所は機嫌を治して欲しい。

「そ、そう言われても…ん。」

これからする耳かきのためと、ごちやごちやになつてるだろう気持ちを静めるため
に、頭を撫で続ける。

毎回思うがこの指にとけるようなサラサラ感に対して、同じシャンプーを使ってるのにくせつ毛な私の髪……どうなってるんだろう。

「んう。ん、ん……」

撫でながら安心させる言葉をかけていると、膝に乗るきりちゃんの頭が少しだけ重くなったように感じる。どうやら緊張と興奮からか、無意識に首に力を入れて少し重力に逆らっていたらしい。

そんな強張りを溶かしていくのに、妙な達成感を感じ始め、顔、首、肩、腕、はては

調子にのって耳かきに関係なさそうなお腹まで撫でながら、もつと楽になるように囁く。

「はい… リラックス… します…」

なんだかんだ言って良い子なきりちゃんは、律儀に言う事を聞き、撫でられた箇所から強張りが抜けていく。

その度に、よく出来たね… 良い子だね… とたつぷり親愛をこめて褒めてあげるとさらに抜けていく力。表情も緩んでリラックスしてきている。

… フォローは上手く行っているようだ。よかった。

そんな事をし続けていると、10分しないうちに、くったりと脱力しきつたきりちやんが出来上がった。

「良い子：：力抜くと良い子：：：：」

指一本動かすのも億劫らしく、きりちゃんの指を動かしてもされるがままで反応がない。

瞳には光がなく、口の端にはよだれの後が光る。そして自己暗示じみた言葉を呟き続ける様子。

：：うん。

心のケアと、耳かきのためのリラックスはできたようだけど、少しだけやり過ぎてしまったのかも知れない。

とは言え、耳かきはこれからが本番だ。私の数少ない長所：：ゲームでも発揮し鍛えている指使いで、きりちゃんの耳垢を駆逐してあげよう。それが私にできる贖罪だ。

これから耳かきするから動いちゃダメだよと告げると、

「…はい。カラダ、動きま、せん。」

律儀に返事をするきりちゃん。何かカタコトだけど。

耳の穴を覗き込む。まずは入り口近くの耳垢を狙い、目標の少し奥まで返しの付いた先端を送る、そして敏感な内部を傷つけないように、ゆっくりと持ち上げる。

「あつ…」

すくい上げた耳垢は広げたティッシュに乗せ、次の獲物を探す。張り付いている紙状の獲物を見つけたのでピンセットで端をつかみ、ゆっくりペリペリと剥がしていく。

月一で綺麗にしているからか、穴の手前はそこまで汚れていないが、奥深くに大物を見つけた。

買ってきた耳かきは先端自身が光るタイプのものだ。今まで木製の耳かきでは見えなかっただろう奥深くの耳垢も白日の下に晒してくれる。

「あつ、あつ、奥まで届いて……」

普段ここまで深くはやらないが、どうせなら思いっきりキレイになってもらおう。

優しく、しかし確実に耳垢を削りとっていく。奥深くに硬くなっている大物は、辛抱強くこりこりと削り、剥がれ落ちた欠片を掬い上げ続ける。

粘膜に直接触らないように角度を変え、攻め続けると、ついに奥深くの耳垢が肌から少しだけ浮いた。

「おあつあ、頭の中抜けちゃ……」

そこを見逃さずにピンセットを差し込み、掴み、剥し、ズルズルと抜き取っていく。

大物を取り除く感覚に聞いたことがない声できりちゃんが反応する。
無事除去できた。

そして拾いきれない耳垢は、綿棒でからめ取り掃除をする。

「あつ、あー…… あつ」

きりちゃんの横顔はヘラヘラと笑みがこぼれている。綿棒って気持ちいいんだよね。
分かる。

最後の仕上げで見えないほどのカスを飛ばすためにフツと息を吹きかける。

「ひうつ?!…… きゆう。」

耳垢は影も形もない…… 完璧だ。感じる達成感に浸りつつ、きりちゃんを見ると眠っていた。直前まで気持ち良さそうな声をあげてた気もしたのだけど……

まあ、いいや。それより反対側が済んでいないがどうしよう。：：眠ってる間にやっ
てあげるか。コロンと顔の向きを変え、逆の耳に狙いを定める。

「：：：：んあ：：ん、ん、んう」

意識が無いからか、さつきより鼻声になってるきりちゃん
の気持ちよさそうな声をGMに、私は掘削作業をこなした。

後日ずん子さんに、きりちゃんに耳かきをすると力が抜けて、骨が無い猫みたいになるようになったんだけど、何か知らないかと聞かれた。

あの耳かきは自分でも、色々やり過ぎたと思ってたので思わずサツと目をそらした。

しかし、いつの間にか避けた視線の方向に先回りしていたずん子さんは質問を続ける。

光が無い瞳でうわごとのように私の名前、力を抜く、良い子、気持ち良い、もつと奥まで……と言ったフレーズを繰り返すらしい。

…… どうやら既に犯人の特定は済んでいるようだ。

笑顔が怖かったので、ちよつとだけやり過ぎた私の所業を白状した。

それを聞いたずん子さんに、《耳垢を完璧に取り尽くすと、逆に耳に良くない》との注意を受けた。正直初耳だった。

反省する私を見て《見た感じ耳の中に傷はついてなかったし、互いに同意の上だろうし……そういうプレイを楽しむのは構わない。でも楽しんだ後は、きちんとアフターケアをしない。魔法なら大抵カバーできるから》と怒られた。

……プレイとかじゃなくて、ただ耳かきしただけです。と言う私の反論は黙殺されてしまった。

☒ 味わわれるゆかりさんと、味わうきりたん。

「そういえば、いつも私のほうが先に寝落ちしてますよね。… あっアイテム取ったら、短剣装備が消えちゃいましたね。このゲーム、拾ったら強制装備なんですか。」

まあ早く寝ちやうのは、きりちゃんの年齢的に仕方が無いんじゃない？

そんな返答をしつつ、何度目かのリメイク版な魔界村を、交代しながら一緒にやっている。

今は私が操作の順番で、誤ってアイテムに触れてしまい、使いにくい装備に強制的に変えられてしまった所だ。

このゲーム、きりちゃんは初見だが私は結構やりなれていたので、片手操作のハンデを受けている。

絶妙な難しさになったのでハンドデ自体はむしろ望む所なのだけど、使つてない片手は今もきりちゃんの捕虜になって、もみもみされている…。まあ実害無いし、それも別にいいか。

暖たかいし、とつても丁寧でマッサージみたいで気持ち良いし、きりちゃんも楽しそうだし。

「なるほど。つてことは、私が成長する度にゆかりさんとイチヤイチャする時間が長くなって、なおかつゆかりさんの無防備な寝顔が見れる特典がつくんですね…。もみもみしてるのは、とつさに両手を使わせないための事前の対策兼、マッサージです。だからそろそろ反対側の手を差し出してください。」

無防備：・ 割ときりちゃんのことは信頼してるので、無防備になるのは寝てる時だけじゃなくて起きている時もな気がするんだけど。そんなことを考えつつ、一旦ゲームを停止して左右の手で捕虜交換を行う。やっぱりマツサージだったんだ。ありがとう。

それと、きりちゃんより起きてるって言っても最近気持ちはよさそうに眠るきりちゃんに釣られて、私も早寝早起きの健康的な生活リズムになってるから割と大差ないと思う。

「いえいえ役得ですから。：・： ぶむ、つまり私といることでゆかりさんは健康的になっちゃうってことですね。：・： どうです？もう私を手放せなくなってきたんじゃないんで

すか？」

ぐりぐりと頭を擦りつけながら話すきりちゃん。香るシャンプーは同じ東北家のやつだ。

うーん、何か認めるのはちよつと悔しいけど、確かにこの感触と暖かさ、それに隣のライバルがないゲームは物足りなく感じてしまいそうだ。

まあ人間慣れるものだし、数週間離れたら一人で遊ぶのも、また慣れそうだけど……
って、あ!? 畏に引っかかって鶏にされた!!

「むっ… それならもーつとくつついてゆかりさんにはもーつと私に依存… きりたん中毒になってもらわなくてはなりませんね。あー、やられちゃいましたか。それじゃあ、次は私の番です。」

罨で攻撃不能になった状態でタコ殴りにされ白骨になってしまった。死んだら交代なのできりちゃんにコントローラーを渡す…。ぐぬぬ。

そんな風にいつもどおり、ぼけぼけな会話をしつつ、そういえば最近はコーヒー飲んでないなあ、なんてぼんやり思った。

寝落ち、中毒、なんてワードを聞いて私の頭がカフェインを経由して勝手にコーヒーを連想しようだ。

「コーヒーですか。飲んだことありますが苦くて苦手です。おつ、攻撃がパワーアップしました！」

ああ、そのパワーアップ、ダメージ受けると剥がれちゃうやつだから気をつけてね。

苦い……確かにジュース的な甘い味を堪能する類の飲み物ではないよね。

でも豆から挽くと結構香りが良くて、いい感じなんだよ。よく飲んで夜遅くまでゲムしてたなあ。

「ほうほう。インスタントと、缶のなら飲んだことありますが……豆から挽くなんて本格的ですね」

電動で豆から粉にしてお湯を通す……ドリップまでしてくれる機械があるから、大して手間もかからないんだよ？

気になるなら、今度その電動のやつ持ってくるから、飲んでみる？

「おお、飲んでみたいです！… って何かボスっぽいのが出てきました!!」

ボスの攻撃パターンを助言しつつ、明日のコーヒーマスターの準備の算段を脳内でする。

…
小学生にコーヒーマスターって飲ませて大丈夫かな？一応ずん子さんに確認しておこう。

次の日。ずん子さんに聞いてみると、

《コーヒー飲んで夜遅くまでイチイチやるのは良いですが、次の日に支障がない範囲で楽しんでください》的な忠告をまず受けた。

やっぱり姉妹だから発想が似ているようだ。

そして、2人とも一杯づつ飲むと次の日起きられなくなりそうだから、一杯を2人で分けて飲んでみてはどうかと提案された。なるほど、そうしてみよう。

「豆と水とフィルターをセットして、ボタンを押すだけですか。… わっ、結構大きな音出ますね。それに、この時点でもういい香りがします！」

夕食とお風呂を済ませ、きりちゃんの部屋でコーヒーを作り出したのが夜7時半ほど。確かに豆を砕くのにそれなりに音が出ている。

近所に響くほどではないので、私の家で作るときは気にならなかつたのだが、同じ屋根の下に人がいる状態だと迷惑になってしまうかも知れない。

「あつ大丈夫ですよ。元々は無かつたんですが、ゆかりさんがゲーム…じゃなくて家庭教師に来てくれる初日までに、ずん姉さまがこの部屋を防音対策してくれましたので。多分一緒に遊んで騒いじやうことを見越したんですね。さすがずんねえ様です。」

… 多分防音の理由はそれだけじゃない気がするけど、藪蛇だから黙ってよう。でもまあ、確かにそれなら安心だね。

なんて話していたら、一杯分だから既にドリップし終えていた。ミルクと砂糖をいつも通りの分量入れて、きりちゃんに手渡す。

「それじゃあ頂きます…。ん…。ゆかりさんも一口どうぞ。」

一口飲んだきりちゃんにコーヒーカップを渡される。何かきりちゃんが表情を緩めてニヨニヨ？してる。美味しかったのかな？良く分からないがとりあえず一口飲む。

うん。いつも通りの…。あれ？少しだけ甘い？

同じ分量のはずなんだけど。

「えへへ、間接キスですね…。どうしました、ゆかりさん？何か気になるんですか？」

あつ、間接キス…。そういえばそういう事になるのか。全然意識してなかったけど。それとは別に、甘く感じるのは何でだろう。

同じ豆と砂糖とミルクで、同じ分量で、同じドリップする機械を使ってるから昔飲んでたコーヒーと違いなんてあるはずが無い。

…。はずなんだけど、何だか記憶のものより甘く感じる。ハテナマークを出している、私の言葉を聴きつけたきりちゃんがすすと近づいて耳元で話しかけてきた。

「いつもより甘いんですか… もしかして、私が口をつけたから… とかだったりします?」

耳元で響くきりちゃんの声が妙に艶っぽくて今更ながらドキドキしてしまう。いや唾液がこんなに甘くなるはずが… いやでも確かに甘く感じたわけで。

他に味が変わる要素はないってことは、この差分の甘味がきりちゃんの味ってことに… いやいやそんな馬鹿な。

「そりゃまあ、普通口つけたからって甘くはなりません。でも恋愛初心者のゆかりさん

には分からないかも知れませんが……好きな人の口付けって、甘く感じるものらしいですよ？さつき、ずん姉様も言っていました。」

好きな人とのキスが甘い。た、確かに聞いたことがある。あれって漫画の世界のことだけじゃ……ってそれだと私がきりちゃんのこと好きって事になっちゃうんだけど。

なんて色々考えていると、机に置いていたコーヒーカーップを手に取るきりちゃん。

「そのとおりじゃないですか。えへへ……ゆかりさんに私の味、甘いつて言われちゃいました。んっ。本当だ。私も一口目より何だか甘く感じちゃいます。この甘さがゆかりさんの味なんですネ」

味わうように飲むきりちゃん。それを見るしかない、味わわれている私……何だこれ。

「はい。ゆかりさんの番です。」

再度渡されるコーヒークップ。でも間接キスとか色々意識してしまった今となっては、なかなか手を出しづらい。

そんな風にきりちゃんのジツと見つめる視線にたじろいでいると、

「あれ？ゆかりさん。小学生と間接キスを気にしてるんですか？あんまり過剰反応してると・・・逆にロリコンって思われちゃいますよ？」

こちらを心から心配するような純粋な瞳で、内緒話をするような仕草で手を添えて、私の耳に近づけた口から声を潜め指摘される。

付き合いもそこそこになってきた私には分かる。こいつ内心でニヤニヤしてやがる。

同じ手に同じ向きで渡されるから、普通に飲むとうすると同じ箇所にも口をつけてしまう。回避しようとするや首か手首の角度を変えて飲むか、持ち手を変える必要がある。どっちも傍目から小学生との間接キスを意識して避ける、滑稽な感じになってしま

う。
迷ったが、じつと見つめ続けるきりちゃんの瞳に急かされるように、そのまま飲んでしまった。．．きりちゃんが口をつけた箇所に。

「どうですか？甘かったですか？．．．いつもより」

囁かれる言葉に頷いてしまう。．．．やっぱりいつもより甘く感じる。

えつとつまり、この甘さが、きりちゃんの味で、それを感じるってことはつまり私がきりちゃんに恋をしてるってことなわけ．．．なの？

何だかよく分からなくなってきた私は目を回しつつ、コーヒークップをきりちゃんに

取り上げられてしまう。

また目の前で口をつけるきりちゃん。そして近いから聞こえてしまう。コーヒーを飲み下す音。

「ん♪：。また、ゆかりさん頂いちゃいました。コーヒーへの苦手意識なんて吹っ飛ばすくらいにドキドキしちゃう味ですね。」

頬が赤いきりちゃん。横から身長さで覗きこむように見つめる視線。そして手渡されるコーヒー。

何か、やばい。

コーヒーを飲んでいるだけなのに、秘め事をしているような、こっそり2人だけでやってはいけないことをしているような…この背徳的な感覚はやばい。よく分から

ないけどやばい。

でも甘く感じるのは事実だ。いつも通りの豆と砂糖とミルク。分量だつていつも通りな訳で、違いと言ったらずん子さんに手渡されたコーヒーカップくらいなわけで…

ん？

ずん子さんが用意したコーヒーカップ？

んんっ？

ずん子さんが甘い口付けについて話してた？

「ね。きりちゃん。この用意してくれたコップなんだけど、ずん子さん何か入れてなかった？その、内側に砂糖かシロップ的なものとか。」

「えっ、流石にずん姉さまでも……いや、ありえそうですね。ずん姉さまだと。」
私の言葉にピタリと勢いを止め、納得するきりちゃん。そうだよね。ありえそうだよね。ずん子さんだと。」

「……で、でも。仮に、仮にですよ？ずん姉さまが何かしていたとしても、私は同じカツプの二口目が甘く感じたのは本当です！それにゆかりさんが感じた甘味だって、ずん姉

様の仕業なのか、私への愛情によるものなのかなんて見分けつかないじゃないですか。」
きりちゃんの事は最初から疑ってる訳ではない。… 思い込み、と言うか妄想。…
じゃなくて想像力逞しい子だし、その、愛情を向けられてる自覚もある。プラシーボ効
果がバンバン効いているのだろう。

対して私を感じた甘味は多分、ずん子さんが裏で糸を引いていた可能性が高い。… け
ど確かに証拠も何もない。

ずん子さんへの疑惑で一旦勢いが弱まっていたきりちゃんだが、疑われていない事
と、言い渡す私に再度勢いを復活させ顔をズズイっと近づけてきた。虚を突かれ言葉を
失ってしまう。

そしてそのまま至近距離できりちゃんから提案がされる。

「そ、それなら！ゆかりさんにご提案です!!私の唇… 今から直接味わってみれば、甘い

かどうか、白黒はつきりつきますよ!! オススメです!!!
えっ、それってキス…

「ち、違います。キスじゃない…です。ただ確かめるだけ、です。ちよつとその過程で口…えつと肌の一部が触れるだけです!…いいんですか? このままだと、ずん姉さまにやられっぱなしです。確たる証拠を持って、やりかえしてやりましょう!!」

ぐいぐい押し込むきりちゃんに、重心が移動して、後ろにあつたクツシヨンに私の体は受け止められる。

ずん子さんにやり返すのは賛成だ。私自身悔しいし、年始の時きりちゃんと共闘してずん子さんと対峙するのは楽しかった。

でも方法が、いや、確かめるだけだからノーカンにな…いやいや。

「抵抗、しないんですね。… 嬉しいです。それじゃあ…：… い、いただきます。」

考え事をしていたのと、感じる体温に安心して数瞬惚けていてたようで、気づいたらきりちゃんはさらに近づいていた。

さらに真剣な視線からの嬉しそうに綻ぶ表情に抵抗する気力が抜けてしまう。

ついに瞼を閉じて迫るきりちゃん。このままだと本当に唇を奪われてしまう。

でも、きりちゃんが迫る速度は酷くゆっくりだった。ゆっくりなものも、そして黙ってキスされてれば抵抗できなかつたのに声をかけてくれたのも… 両方とも、ぼーっとしていた私への配慮で、不意打ちのようにならないためだろう。

相変わらず良い子のきりちゃんに、ほんわかしつつも、静止するために、きりちゃんの名前を呼ぶ。でもその声は、

自分でも驚くほど掠れた… なんと言うか甘い声だった。

「… ゆかり、さん？」

目を開いたきりちゃんは、私の声質に怪訝そうに眉根をひそませる。

震えてしまった声を咎められているようで、微妙に視線をそらしながら、キスはダメだとしつかり言う。今度はいつも通りの声を出せた。

「…ダメ、ですか。」

ダメです。きりちゃんのいつもより躊躇いがちな言葉にいつも通り返答する。少し間を置いて、納得して体を離すきりちゃん。

きりちゃんは小学生だ。いくら波長が合っても、親愛を感じても、そして社会や周囲の目を別にしても… やっぱり恋愛対象として、私は見る事ができなかった。

けど、自分を騙して今の状況をほんの少しだけ受け入れたら、向け合う感情の差は消え、きりちゃんから向けられる気持ちに答えることができるかも…なんて考えてしまった。

返せない形で気持ちを受け続ける罪悪感に、流されも良いんじゃ……なんて考えが、声を震わせてしまった。

「ぬぐぐ、空飛べるって戦闘に凄いアドバンテージなんですネ。空中から攻撃してくる敵キャラに殺意が沸きます……。あつ、明日のずん姉様への追求は一緒にしましょうね。1体1だと言いくるめられかねないので。」

その後、昨日に引き続きゲームを再開した私達。きりちゃんからの言葉に、ウンと頷く。

また声が震えてしまいそうと言葉があまり出ず、私の様子に時折チラチラと不安そう

に表情を覗き込むきりちゃんには申し訳なかったけど、今日はスルーして欲しい。自分でもびっくりにしてゐるから。

そしてコーヒーのおかげか、いつもよりちょっとだけ長い、2人で遊ぶ時間は楽しかった。

☒ゆかりさんと、アップグレードしたきりたん

「最近、大分暖かくなってきましたね。」

うん。そうだね。

上にコートとか羽織らずに外に出ても大丈夫になってきた。

頭の後ろから聞こえる言葉に、そんな返答をする。私ときりちゃんは、ベットの上でうつ伏せで重なってごろごろしてる。

あれだ、2体重なってる《たればんだ》的な状態。まあ、きりちゃんはうつ伏せになったり仰向けになったりして、たまに私の背中から転がり落ちてるけど。

「そうなってくると、ゆかりさんの暖房器具を自負する私のアイデンティティーの危機

な訳です…。 そんな訳で、私、アップグレードしてみました！」

… はあ。 そうですか。

それよりきりちゃん、ぶよぶよV S テトリスって言う色物ゲーム見つけて来たんだけど、やってみない？ 3DSの本体が2つあればソフト1つで対戦できるみたいだから。

「やります。 でも私のおきな話題を流さないでください。 ゆかりさんに末永く使ってもらうために必死に企業努力してるんですから」

いや寒くなくても、きりちゃんとずっと一緒に居たいって思ってるからそんなことしなくても別に…

なんて返しつつ、3DSの準備を進める。

「こっちも起動できました。： ゆかりさんって、人たらしですよ。しかも割りと無自覚の。」

通信が上手く繋がり、ゲームを起動できたらしいきりちゃんに指摘される。何か視線を後頭部に感じるからジト目されてるのだろう。

今の私の発言を振り返って見ると。： うん。改めて考えると確かに恥ずかしい言葉を発したのかも。

「な、何で時間差で恥ずかしくなってるんですか。： かわいくてズルイです！責任持つて、こっちにお顔見せてください!!」

そう言われても… きりちゃんとの反応で恥ずかしい言葉だったんだって自覚しちゃって。

えーと、ごめんね話しの腰折って、続けて？そっちは向かないけど。

「むう… こほん。それです。私にこの度の追加された機能は… 花粉対策バリヤードです!!」

… はあ。そうですか。

それより、どうせならテトリスとぷよぷよ別に選んで戦ってみようよ。私テトリスやってみよう。

「あつ、テトリスやったこと無いんで助かり…。ふふん。ゆかりさん、今は自分が花粉症じゃないからって油断してますね。花粉症ってならない人は存在しないですよ」

それじゃあ、ゲームスタート。

…。いや、全員が全員花粉症になるわけでは無いでしょ。

「アレルギー反応は人によって許容量が違います。今は症状が無い人も、体内に少しづつ花粉が蓄積して、何時か発症しちゃうんですよ！」

…。へえ、そうなんだ。

それなら未然に防げる花粉バリヤー？は、花粉症になつてない私でも嬉しいかも…。これテトリス不利じゃない？連鎖しづらくて攻撃しづらい。

「そうなんです。でもバリエーも万能じゃなくてですね…。むふふ、ゆかりさんの選択ミスですね！倍返しだ！」

攻撃して見たが、積み込みが足らず、逆に連鎖を重ねたきりちゃんへの攻撃に相殺されて倍返しされてしまう。ぬわー。

「ふっ、これは決まりましたね…。で、ですね。バリエーの話ですが万能でもなく制限があります。私から10…じゃなくて、5…いえ…えつと2mくらいが限界…。なわけではないのですが、うーんと…。しよ、諸事情により、あんまり範囲を広げたくないの、ゆかりさんは私に日ごろからくつついてください！」

最後らへん困ってるのは伝わったけど、説得を雑にしすぎ。きりちゃんはもう少し本

心をごまかす術を学んだほうが良い気がする。ずん子さんを見習い……わなくていいやうん。

んう？テトリス、ぶよぶよのお邪魔ぶよと違って、相手の妨害ブロックも連鎖に組み込めるんだ。

きりちゃんの攻撃によつて、積み上げられたブロックを連続で消していき、連鎖が繋がっていく。

「でも、ゆかりさんに対して嘘は付きたくないと言うか……つて、何ですかその仕様。それだとぶよぶよが圧倒的に不利……そつ相殺できな、ぬわー！」

お邪魔ぶよに埋もれてしまったきりちゃん。

これ、ぶよぶよ側は確実に倒しきれる攻撃しないと逆転されて《死ななければ安い》つてやつになつちゃうね。

それでバリアーのことだけど、2mだけ？それなら今は大丈夫だよね？

「むー、なるほど：：あっ今はくつついてるしOKです。後、商品名《東北きりたん》は、日ごろからメンテナンスを必要があつて、具体的には定期的なナデナデとか：：」

その後もゲームをしつつ、きりちゃんの仕様だか、メンテナンスだかで色々要求された。

だけど要求された以上の回数や距離を普段こなしているので、特に負担に感じず、二つ返事で受け入れた。

☒ ゆかりさんと、お腹が大きくなったきりちゃん

「ゆかりさん……その、できちゃいました。」

何がとは聞かない。愛おしげに撫でている、ぽっこり膨らんだお腹。きりちゃんの幼い姿と相まって背徳的な姿。

……ああ、昨日の夜のやつかな。

「は、はい。昨日の夜のやつです。」

恥ずかしそうに告げるきりちゃん……うーん、見ていたら使いたくなくなってしまった。

できたばかりで悪いけど、使わせて欲しいと、きりちゃんに頼んでみる。

「もちろん。ゆかりさんが望むのならばいつでも使ってください。…どうぞ。」
きりちゃんは嬉しそうに頷き、トコトコと私の近くに来て、少し恥ずかしそうに服を
めくり…

服の内側からボールを出した。昨晚のゲーム時に話題にあがったバランスボールだ。一回使って見たかったんだよね。ありがとう、きりちゃん。

「いえいえ、魔法少女きりたんにかかれば、バランスボールなんて魔法でチヨチヨイのチヨイと作れちゃうんです。」

きりちゃんに感謝を告げつつボールを受け取る。

：：
でもなんで服の中に入れてたの？

「：：ちよつと恥ずかしいんですが、イメージするために目を瞑りながら作ったんですが、気づいたら服の内側に作ってました。」

なるほど。後、服から出した前後でボールのサイズ変わってない？

「魔法少女の作り出したボールなので、服を破らない程度に大きくなり過ぎない……ご都合主義が働いてたみたいです。」

そっか、そういう理由だったんだ。

たいしたことはして無いと言いつつも、誇らしげな様子なきりちゃんに、きちんと頭を撫でてお礼を返す。

……昨日きりちゃんから事前に求められていたお礼の形だが、こんなんでも良いのだからか。

「んー、ゆかりさんは分かかってませんね。普段恥ずかしがって私にラブラブできない奥手なゆかりさんからしてくれるナデナデ… プライスレスです！」

奥手。確かにそうなのかも知れない。

この娘から送られる恋慕は同じ形で返すことはできていない。だから別の形になつてしまうが、こういう時に少しでも返したい。

…
なんて考えていたら、

「ゆかりさん、真剣に撫でてくれてるのは嬉しいですけど、もう少しにつこり笑ってくれ

るともつと嬉しいです。」

きりちゃんに指摘をされつつ私の頬をモニユモニユされた。メツとか言われた後に、二へへと笑うきりちゃんに釣られ、クスクス笑ってしまった。

そんな感じでじやれついた後、一瞬忘れかけたバランスボールに乗ってみた。

最初は足を着けないと倒れそうになっていたが、何回か試す内に足を空中に浮かせな

がら座ることができてきた。

「相変わらず、何でもコツをつかむのが早いというか何と言うか……私に乗ってみてもよいですか？」

そしてきりちゃんの言葉に、一通りボールに満足してきた私は、もちろんと返す。

元々きりちゃんのものだしね。

「……うへへ、そうですね。私の物ですもんね。じゃあ、失礼します！」

そして、きりちゃんはバランスボールの上に乗った。

その間に私を挟んで。つまりは私がどく前に膝上に座られた。

「ゆかりさんのお膝は、私の物ですから遠慮なんかいらなかったですよね！」

正面から腕を背中に回され、しっかりと抱きつかれてるので後頭部しか見えないが嬉しそうなきりちゃん。

抱きしめられたのは取りあえず良いとして、二人乗りは流石にバランスが……あれ、なんか安定してる？

「このボールは私が魔法で作り出したものですから、多少は私の意志で動かせるんです。あれです、アニメの魔法少女が出す誘導弾的な感じですよ。」

ああ、なるほど。つまりは、きりちゃんも一緒にバランスをとってくれてるのか。

… うん。むしろさつきより安定してるかも。

「毎日協力プレイで鍛えていますからね！私とゆかりさんは息ぴったりですよ!!」

ぎゅーぎゅー抱きついていた体を少し離し、顔を合わせるきりちゃん。目がキラキラ輝いている。

何だかそう言われると、日ごろの努力が実ったような達成感を感じ…。 いやいや。

「しかもこれは魔法の特訓にもなる…。らしいので定期的にやらないといけない…。：：：らしいんです！」

最近分かって来た事の一つに、きりちゃんの《伝聞形式》かつ《自信ありげな発言》は、大体ずん子さんが暗躍しているという事だ。

「えーと、確かにずん姉さまから教えてもらったんですが…。魔法の特訓にはきちんとなるみたいなので、協力してくれませんか？」

うん？…。まあ別に良いけど。きりちゃんってそんなに魔法少女として頑張ってたっけ？

「えつと確かに魔法、当初は持て余してたんですが……魔法は何かを攻撃するだけじゃなくて守ることもできるって言われて、だから、その、ゆかりさんを守りたいなあ……と」

……き、きりちゃん。

真摯な言葉に、照れながらもキチンと目を合わせる様子に、目から鱗的なものがポロポロ出た気がした。

そうなんだ。

魔法とかに関しては、きりちゃん経由のずん子さんの言葉を鵜呑みにするしかないが……ずん子さんも嘘は言わないと言い切れるくらいには信頼している。なので。そう言うことなら喜んで協力するよと告げる。

「ありがとうございます！：：とところで不安定な場所で恋が芽生えるって言う、つり橋効果って知ってますか？これもずん姉さまが言ってたんですが：：」

ずん子さん、色々台無しだよ。

苦笑しつつも、その日は不安定：：と言うには安定した体勢で、たまにびよんびよん跳ねつつ、のんびりゲームや漫画をいつも通り楽しむこととなった。

㊦結婚間近なゆかりさんと、お布団なきりたん（エイプリルフル）

「すぴー、すぴー……」

目を覚ます。今日は日曜日だ。

起きたばかりで、ぼやけた視界にはつきりしない思考。

そして聞こえる規則的な寝息に、感じる体温と、軽い重み。

…… ああ昨日は、きりちゃんに乗っかられたまま寝たんだった。

トト口のお腹に着地したメイ的な感じだ。そこまでの体格差は無いけど、大体あつてる。

昨日、きりちゃんから新魔法を習得したと話を切り出された。その魔法は、体重を軽くする女の子には夢のような魔法……かと思いきや、やせる訳では無く質量だけ減らす、体型は変わらない…… 微妙な魔法だった。

きりちゃんが、そんな魔法を習得した理由は私に負担をかけずにくつついて寝たりしたいから……らしい。

確かに小学5年生とは言え、体重をかけられたら寝苦しいかも知れない。好意を寄せつつも気をつかってくれる、良い子なきりちゃんに、頬を緩めてほんわかした。

そして説明しながら、頑張ったから褒めてと言葉にはしないが仕草や瞳で全力アピールするきりちゃん。無論断れずに、たつぷり褒めた後、要望通りの寝方をして昨日は就寝した。

「んー……」

足は蟹挟みで、腕を私の腰に回し、顔を私の胸につつぷし、寝息だか寝言だかを漏らすきりちゃんは、私の体からズリ落ちたりせず、思ったより安定していた。

安定している一因に、私の胸の膨らみがあると推測した（確信）。

見ていると、きりちゃんの頭が横にズレないようガードレール的な役割をしているようだった。…これがずん子さんやマキシさんだったら、きりちゃんの首が90度後方に曲がるか、顔が埋まって窒息しかねないので、何事もホドホドが良いと言うことなのだろう。また1つ世界の心理を悟ってしまった。

「…うかりさん、えへへ」

何やら幸せそうに寝言を呟く、きりちゃんの体重は軽い。一夜明けてもしつかり魔法は継続中らしかった。

でも暖かさはそのままで…昨日も感じたが完全に寝具だった。暖かくなってきたら、就寝時、きりちゃんをかぶるだけで、他の掛け布団はいらさないかもしれない。

… 私は何を考えているんだろうと自問自答しつつ、きりちゃんを起すために声をかけた。

「……………んっ… おはよう、いびきいまう」

私の視界には後頭部しか見えないが、これ絶対瞼が閉じて、意識も半分夢の中な状態

だ。

平日よりゆつくりだが、可能な限り東北家では休みでも全員一緒に朝食を取っている。

時間的に、そろそろ起きないとまずい。

「…だっこ」

…えっ？

なので、きりちゃんを起そうとしていたが、不意にきりちゃんから予想外な言葉が発せられる。

「このまま、だっこで、運んで、くだ…さい」
えー…。

逡巡している内に回されていた、きりちゃんの腕が動き、きゅつと抱きなおされた。

…まあ軽くなってるし、いいか。

朝起きたばかりの私の頭は、様々な思考を放棄し、手の位置を調整して抱きあげる。

「…ふみゆ。」

お腹が少し圧迫されたのだろう、ぬいぐるみのような音を口から出すきりちゃんを抱え、私は目を覚ますために、部屋を出て洗面所に向かった。

そんな感じで始まった今日は、4月1日。年度初めな日曜日だ。

←← 顔を洗って、朝食中 ←←

「ゆかりさん、今日はエイプリルフールですね。」

そうだね。

無事朝食を済ませ、きりちゃんの部屋に2人で戻ってきた。：：今考えると朝食から戻る時は、だっこはいらなかった気がしつつも、きりちゃんの言葉に頷く。

「だから、嘘をつきましよう。」

はあ……。

いいけど、それは事前に言うことなのだろうか。

「良いんです。標的はゆかりさんじゃないので。… 2人で共謀して、マキさんやずん姉さま達、皆んなを騙しちゃいましょう！」

ふむ、なるほど。

2人で悪巧みするの楽しそうだし、私もそれで構わない。… きりちゃん相手に嘘付くと、かなり荒唐無稽な嘘でも妄信された上に、騙した後の罪悪感が凄そうだし。

「ふっふっふ。… 悪のゆかきりコンビ結成ですね！それでは。… ちよつとスマホを貸してくださいませんか？LINE使うので。」

ニヤリと笑い合う私達。

えっスマホ？… ああ、なるほど。

直接会って嘘をつくより、簡単に会話できてすぐに嘘がつける。しかも2人同時に同じ内容を言うことで信憑性を上げるのか。

納得した私はあんまり深く考えずに、きりちゃんにスマホを渡すと、以前教えたパス

ワードを慣れた感じで入力し、まず私の端末でグループメッセージを打ち込み始めた。
画面を後ろから覗くと：

《ゆかり》

私、結月ゆかりと東北きりたんは、この度、結婚することになりました。

…
!?

「ふふつ、皆のびつくりする姿が目には浮かびます…。」
いや、既に私がびつくりしてます…。まあ、エイプリルフールだし、誰も傷つけない

嘘だし、別に良いか。何て考えていると、きりちゃんは次に自分の端末でメッセージを送る。

《きりたん》

昨日デートだったんですが、高級レストランでディナーを食べて、夜景の綺麗な橋の上で抱きしめられて求婚されました。もちろん、喜んで受けました。

【夜景が綺麗な橋の上で2人で自撮りした、仲良さそうな写真送付】

「ぬふふ…」

昨日は確かに映画を一緒に見て晩御飯食べ、帰り道、夜景の綺麗な橋を通って、そこ

その日、いつもとは逆に我が家に遊びに来たきりちゃん。あまり家にいないが偶然揃っていた私の両親に、きりちゃんは猫かわいがりされていた。

娘が増えるとか、自分達あまり構えない分、私を構ってあげてほしいとか、私の好きな卵焼きの味付けは：：とか色々言っていた私の父母。それでいいのかあんなら。

「あつ、こつちの画像も上げときましよう」



《きりたん》



【東北家親戚一同がずらつと並んだ集合写真：：に、ゆかりさんも並んでる写真送付】

「えへへ：：あの時、親戚の皆に認められちゃいましたね。ゆかりさん、堂々としてて、かつこ良かったです。」

いつも通り、きりちゃんの部屋に遊びに行ったら東北家親戚一同が集まっていた日があつた。

流石にそんな中、無神経に混ざるほど肝が据わつてなかつたので帰ろうとしたのだが、ずん子さんに家庭教師として面通し?とか言われ、着替えされ、あれよあれよと紹介されてしまった。

少し前なら作法とか分からなかつたが、ずん子さんに色々習っていたので、良家らしい人たちが集いの中でも料理や食事などには困らなかつた。…なんか周りが関心してたけど付け焼刃です。

しかも大御所っぽい雰囲気でありながら優しそうな曾々おばあちゃんには視線を合わされ《優しくして誠実な目だね。あの娘をよろしく頼むよ》とか言われた。

犯罪者の目だ!とか言われなくて良かったけど、私ときりちゃんが愛し合っていると、言う勘違いをされてしまった。

後で知つたのだが、私がずん子さんから作法を習つてることが花嫁修業として取られてしまったらしい。

そのため私がアクションを取る度に、「健気に花嫁修業を頑張つてる娘」的な視線を向けられていたそうだ。…何でだ。

頼みの綱な、きりちゃんも自分の親戚達だろうに何故か恥ずかしがつて私の背中で赤面しつつ隠れて、親戚達を説得してくれず…結局誤解は解けなかつた。



《ゆかり》

後ほど、招待状を正式に送りますが、日時と場所は以下の通りです。



【式場の招待状の写真送付】

「そしてトドメに…この写真です！」



《きりたん》

式場の下見に行った時に試着しました。



【和洋中様々な花嫁衣裳を着た2人の写真送付（20枚ほど）】

私ときりちゃんのを勘違いしてる人だらけな東北家の中で、誤解していない数少ない理解者がいた。

妙齢な女性の方で、連絡先も交換していたのだが、結婚式場で働いているらしく、無料試着のイベントをやっているのので試してみないかと誘われた。

女友達同士でも参加可能で2人一組とのことだったので、きりちゃんと私で参加させてもらい、着せ替えて、写真を撮って、かなり楽しんだ。

その際、なんちゃってな招待状も作ってもらったが、きりちゃんは取っておいたらいい。

「ふーっ、やりきりました。」

うん、お疲れ様……。でもこれ、大丈夫だろうか。

一つ一つは何て事もない。ただ仲良くしてるだけの写真だけど、これだけ集まると何だか真実味を感じる。

「いや、真実味がある嘘ならエイプリルフール的に良い事じゃないですか。それより、ネ

夕ばれまで時間空けたほうが良いと思うので、しばらくゲームしてましよう！」
うーん……。まあいつか。

その後、ゲームに熱中してそろそろ昼食と言う時に、そう言えばネタばれしてないことに気づいたのだが……

誰一人内容を疑わず、グループトークで、式場の出し物を相談する親友達。
どこからか聞きつけたらしく、お祝いメッセージを送る私の両親と東北家親戚達。
結婚式のスピーチの原稿を既に結構な枚数書き上げているずん子さん。

そんな様子を見て、私ときりちゃん、2人して肝を冷やした。誤解を解くの大変だから。

「えーつと、エイプリルフル成功…？で良いんですかね？」
う、うーん…

何と云うか、成功と失敗が両立してゐる気がする。そんなエイプリルフルだった。

☒ハーレムなゆかりさんと、増えるきりたん。

久しぶりに長期休暇が取れたらしい両親と家族旅行に行ってきた。

行きの際、きりちゃんが体重を無くしカバンに浸入していたが、ギリギリで気づきカバンごと東北家に預かってもらい出発し、旅行を終え無事帰ってこれた。

そんなこんなで3日ぶりに東北家にお邪魔した私。帰ったばかりで今日は家庭教師はお休みなのだが……何と言うか、早めにきりちゃんに合わないと言われないことになりそうなのがしたので遊びに来てしまった。

「「「はい、どうぞ」」」

お土産をずん子さんに手渡し、何だか久しぶりに感じながら、きりちゃんの部屋まで行き、ノックの返答を聞きつつドアを開けたら、

「「「ゆかりさん、お久しぶりです!!」」」

きりちゃんが増えていた。

もう一度言う。

きりちゃん、増えていた。しかも5人に。

「『あれ？ゆかりさん、どうしま…』」

パタン。

…意味が分からなかったので一旦ドアを閉め、仕切りなおす。そして状況を努めて冷静に考える。

今の現状は…

【3日ぶりにあったら、きりちゃんが増えていた。】

…やっぱり意味が分からない。

視覚だけでなく、声もユニゾンして聞こえたので幻覚の類では無いのだろう。

うーん。3日前までは、きりちゃんは確かに一人だったはずだ。

という事は…。放置したのが不味かった？水を入れた増えるワカメ的な感じ？

「「「どうしました？ゆかりさん？遠慮しないで部屋に入ってください」」」

ハテナマークを量産していると、ドアを開けて部屋からこちらを伺うきりちゃん達
(複数形)。

そして1人がドアを開閉し、2人に両手をひっぱられ、2人に背中を押され部屋に連れ込まれる。

別に力が入っているわけでは無いが、これがきりちゃんじゃなければ、数の多さにビビりそうだ。

∴ とりあえず、何で増えてるのか聞いてみる。

「「「ゆかりさんへの愛ゆえです！」」」

うん。

とりあえず分かったことは、全員きりちゃん本人と言うことだけだった。

「赤レンジヤイ！」

「黄レンジヤイ！」

「赤レンジヤイ！」

「赤レンジヤイ！」

「黄レンジヤイ！」

「……5人揃って……ゴレンジヤイ！」

決めポーズのまま静止し、こちらを見る10の瞳。何かを期待した視線は漏れなくキラキラと輝いていた。……うん、まあ、気持ちは分かる。私も5人に増えたら同じことし

たい。… そんな機会はないだろうけど。

そして私への特効持ちの視線に逆らえず、色被ってる的な、お望みのツツコミをしつつネタに乗った。

「いやー何回も元ネタの映像見て打合せしたから、上手くいきましたね！」

「何度もりハして、頑張りましたからね。」

「でもまさか、急にネタを振られても、最後まで完璧に対応するとは… やっぱり、ゆかりさんは凄いです！」

「ゆかりさん高スペックな上に、ノリもいいですからね！流石は私の… いえ、私達の未来のお嫁さん!!」

「お願いすれば何とかしてくれそうな包容力も、ゆかりさんの魅力の一つだと思います!!!」

ネタを終え、満足そうなきりちゃん、s。5人順番にキヤツキヤと話しあう。

仲良いのは結構だけど、全員に纏わり付かれてるので、音声にサウンド効果がついてる。うーんと、とりあえず、増えてるのは魔法が原因ってことでもいいの？全員本物っぽいんだけど。

「ご明察！さすがはゆかりさんです！3日間暇で習得しました！」

「身代わりのな残像拳とかでは無く、全員が本体の分け身の術……って感じですね。」

「バカめ！そっちも本体だ!!」

「しかもパラメータ劣化なし！1人多いですし、どこぞの三つ目……天津飯とは違うのだよー！」

「魅力も5倍になってます！（当社比）」

やめて、ネタを混ぜないで。つつこまずにはいられ無くて、話進まない。

「本来かなり難しいんじゃないんですが、増えた私達でゆかりさんにご奉仕するのを夢見て頑張りました！褒めてください!!あつ、ゆかりさんお菓子どうぞ。はい、あーん。」

「だから、ゆかりさんへの愛ゆえにつても嘘じゃないんです……えへへ。あつ、クッキーだから喉渴きますよね。はい、ジュースです。コップは私が持つてるので、そのままストローで吸ってください。」

「まあ途中ゆかりさんを誰が一番愛しているかで喧嘩になりかけましたが…… あっ、ゆかりさん長距離移動してて疲れてますよね。肩揉みます。」

「いざこざは1日かけてゆかりさんの魅力を語り合つて、無事和解しました！ゆかりさんのお膝も順番制で仲良く分けます。ハーレムルート突入ですよ！…… あっ、ゆかりさんゲーム電源入れてきました。コントローラーどうぞ。」

…… なんだこれ。

きりちゃんとの付き合いも長くなってきたけど、こんなめちやくちやな状況は始めてかもしれない。副作用的なのは無いらしいので一安心だが、何だか大変な一日になりそうだ。

…… つて思ってたんだけど。

なんか1時間しない内に慣れた。

他の人に5人ワラワラ話しかけられたらパニックになるだろうが、全員きりちゃん本人だから話しは早い。きりちゃん側もこちらを考慮して一人づつ話してくれるし。

「ぬわーっ！負けましたか。ふっ、私を倒した所で第2、第3、さらに第4とおまけに第5のきりたんが…ガクッ」

「ふっ、きりたんが負けましたか。やつは私達全員と同格…っでことで、次私の番ですがハンデお願いします。」

「はーい、じゃあ片手ボツシユートです。テレッツテレッツテ…使わない手は私が責任持って、もみもみしときますね」

「多分私は4番目だから…。結構待つことになりますね。あつ5番目きりたん、私もゆかりさんの髪いじりたいです。混ぜっていいですか？」

「ふっふっふ、私の味方になれば世界…。じゃなくてゆかりさんの腕ですけどね！」

わいわいと話しているが、キチンとこちらの反応を待つてから次のきりちゃんが話してるし、言葉じゃなくても返答がほしい伝わるし、例えるなら…。きりちゃんの手が増えただけで一対一と対して変わらないことに気づいた。

そんな感じで増えた以外はいつも通り：：とゆうには少しテンション高いきりちゃんと一緒に遊ぶ。

多少テンション高いのは期間空いたから、その反動だろう。なんだかんだ言いつつ、私も久しぶりなきりちゃんにホツとしてるし、人の事あんまり言えない。

だけど、

「『寝る時の順番考えてなかったです。』」

夜も深まつてきたころ、きりちゃん全員が一斉にハツと気づいたようだった。いや順番も何も、寝ながら交代なんてできない。。。寝る時は流石に一人に戻ったら？

「『。。。それもそうですね。じゃあ一人に戻ります！』」

お互いに顔を見合わせ、すつと半透明になりながら一人にまとまるきりちゃん。

「。。。はう!?!」

途端に蹲るきりちゃん。

：：えっ、もしかして無いつて言つてたけど魔法の反動があつたとか？と一瞬焦つたが、何だか嬉しそうな表情に疑問を持つ。

「いついえ練習中も問題無かつたし魔法の副作用とかでは無いんです。ただえつと：：5人それぞれの経験をひとつに集約したんですが」

ああ。NARUTOの影分身みたいに、経験をまとめることができるのか。

「ん：：ゆかりさんに抱きついた感触とか、ゆかりさんにお菓子をアーンしてるドキドキとか、ゲームしたワクワク感とか、なでなでされたフワフワ感とか、全員分の経験が一気に：：わ、私視点だと同時刻にゆかりさんの感触が5人に増えて：：：：アバババ」嬉しそうに悶えるきりちゃん。危険とかでは無いらしいけど：：これはひどい。こう言う時、どんな顔をすればよいのか分からない。

若干呆れつつ、きりちゃんが落ち着くまでゆつくり撫でてあげた。そして落ち着いた後は3日ぶりに一緒に就寝した。腕に収まるきりちゃんのおかげか、会えなかつた時より眠りが深かつたらしく、たつぷり寝てしまった。

ついでに件の魔法は、ずん子さんから禁止令を出されてた。ユカリウム？とやらの過

剰摂取になりかねないから……らしい。魔法用語はよく分からない。

☒拘束されたゆかりさんと、暴発したきりたん

「すいません、ゆかりさん。私の魔法が暴発したせいでこんな事に：：」

シユンと俯きりちちゃん。

普段なら：：いや今も慰めようと頭を撫でようと私の腕は、届く事はなかった。

私達は揃って拘束されて身動きができないからだ。そして拘束しているのは：：

布団だった。

つまり、くつつついて寝ていた私ときりちちゃんは、朝起きたら2人まとめて布団に簀巻きにされ転がっていたのだった。

：：意味が分からない。

「……えつと」

反省中らしく言葉少なげな本人が話した通り、寝ぼけたきりちゃんの魔法が原因らしい。

私ともつとくつつきたいと言うきりちゃんの欲求が布団を魔道具化。布団は私達が離れないように今も頑張ってくれているらしい。

現状、布団は呪われた装備のように外せなくなっており、結果として恵方巻きの様に、私達は包まれ転がっていた。

昨日交代でやっていたゲームの、解呪の巻物か装備外しの罫が欲しい所だ。

「……すいません」

何度も謝るきりちゃん。……でもまあ、本人に悪気は無い見たいだし、あんまり気にしないで欲しい。悲しそうな様子に胸がザワザワしてしまう。

痛みも無いし、普段からくつついてるので、いつも通りと言えはいつも通りだし、そ

れに時間が経てば魔力が消えて外せるようになるらしいし……きりちゃんには笑って
いてほしい。

「……：：：：：そうですか？：：：：：そうですね、呼吸も（スハスハ）できるし、手だつて（サワ
サワ）動かせるし、体も（グリグリ）触れ合つてあつたかいし……いつも通りで問題無
いですね！」

言葉にしていけないが何故か伝わる擬音がおかしい……と指摘する前に、その擬音通り
の行動をしてくるきりちゃん。体勢を固定されている私は逃げられない。

「くつくつく……：：：：：今のゆかりさんは、まな板の上的な状態です。許してもらつたからに
はこの状況を思いつきり楽しんでやいますよ！観念してください！！……：：：：：スハスハ」

くつ、殺せ……：：：：：!!的な、ちよつと教育に良くなさそうな悪ふざけな掛け合いをしつつ、
きりちゃんの様子を観察する。まだ少し空元気気味だが、調子が戻ってきているよう
でホツとした。

そして、きりちゃんの表情に陰りが消えたあたりで私達は、いつも通りゲームをする
ことに。布団の呪いが時間制限で解呪されるまでの時間つぶしだ。

「意外と体勢を限定されてもゲームってできるもんですね。」

きりちゃんの魔法でテレビを付け、近くにあったSwitchなコントローラーを隙間から布団の中に取り込み、それぞれ布団の中で操作する。

色々と試行錯誤した結果、布団の外に手を出せない以上、互いに背中に回した手で操作する持ち方が一番楽だった。

それと簧巻ききの布団は魔法のお陰か転がりやすく、少し力を入れると布団ごとベットの上で私達は転がった。今も、きりちゃんが力を入れたらしく半周し、きりちゃんが私の体の下にくる。

「んっ……ふうっ」

残念ながら体重を軽くする魔法なんて私は使えない。体重は同年代の平均より軽いとはいえ、小学生のきりちゃんには負担が大きい……と最初のほうは慌てて私が下に来るように体勢を元に戻していたのだが、

「ゆかりさんが上だと密着度が上がって……ふへへ。それに押しつぶされて、ちよつと

息が苦しくなるの、何か、イイ、ですね……」

……らしく、本人が喜んでるのでやりたいようにさせている。

と言うか、体勢を戻そうとしてもイタチゴッコになって互いに目を回すだけなので、諦めた。……きりちゃんが何か目覚めかけてるような気がするが、きつと気のせいだろう。……気のせいのはずだ。

ただ、ずっと体重を支えるのはキツイらしく、たまに私が下の状態に戻る……本人曰く「息つき」とやらをしながら、ゲームを進めた。

「ゆかりさん、ゆかりさん、これがいわゆる縛りプレイってやつなんですね」

違う、そうじゃない。確かに縛られてるけど、いつも通りゲームできるから縛りになってないし。

それに『ゴロゴロしながらゲームをする』のは好きだが、実際にゴロゴロ転がりながらするのも何か違う気がする。そんな縛り違いとゴロゴロ違いについて取り留めなく談笑していた。

そしてゲームのBGMを鼻歌し出したきりちゃんに釣られ、低音と高音に分かれて2人で口ずさみながらのんびりゲームに夢中になっていた…。そんな時だった。ノック音と共にずん子さんが現れたのは。

「… あつ、ずん姉さま。」

ずん子さんは朝食に呼びに来てくれたらしい…。そう言えば、色々あつたせいで朝食の事忘れてた。

「… えつと、これはですな」

朝食を告げる途中で黙り、私達を見下ろしながら、言葉を失っているらしいずん子さん。

うん、まあ…。無理もない。友人と妹が布団に簀巻きになって転がりながら楽しそうにゲームしてたら、私だって言葉を失う。

そんなことを考えつつも、何とか状況を説明しようとして私ときりちゃんも口を開く前に、ずん子さんはどこから取り出した高級そうなカメラを構えた。

そして響くシャッター音。

「…えっ、ちよつとずんねえ様!?何で写真撮ってるんですか!」

さらにスマホも取り出し写真を撮り続ける。ずん子さん曰く、かわいいから皆にもおすそ分けするらしい。

恥ずかしいのでやめて欲しいが、文字通り手も足も出ず、大人しく被写体になり続けるしかない私達。

その後、呪われた布団の装備が外れたのは私のスマホの通知音《LINEグループの新作メッセージ》が一通り鳴り終わってからだだった。…無念。

□奪われたゆかりさんと、裏切りのきりたん

「ゆかりさん……いい、ですよね？」

きりちゃんといつも通り、のんびり遊んでいると不意にきりちゃんの言葉が響いた。

きりちゃんを見ると、いつになく真剣な表情……。え、何が？と、思わずキョトンとする私。

「もう私、我慢できないんです。ゆかりさんの……奪っちゃいますね？」

そんな不穏な言葉と、動けない自身の状況、そしてきりちゃんが持っている危険な道具……。ここまで状況が揃って、やっと身の危険を感じた私は腑抜けていたのかもしれない。

……いや違う。きりちゃんを信頼していたが故にだろう。

きり、きりちゃん？冗談だよな？そんな悪いことしないよね？いい子だから……

「すいません、ゆかりさん。もう私は決めたんです……!!」

きりちゃんの言葉は決意に満ちていて、説得や抵抗が意味をなさないことを察してし

まった。そ、そんな…

もう、どうすることもできない。私は、私を陥れるために動くきりちゃんを見ているしかできなかった…

「…それじゃあ、アイテムでテレサを呼び出して、50コイン払って、ゆかりさんのスター強奪!… やった最終ターンで逆転!!勝ちました!!」

マリオパーティにおけるテレサのスター強奪は、リアルファイトに繋がりがねないから禁止してたのに… 最終ターン行動後で私が反撃できない状態でのいきなりな裏切りに、私がゲーム内で集めていたスターは《奪われ》、きりちゃんに敗北してしまっただ…ずるい。

「禁止って言っても言葉にはしていないじゃないですか。それに勝負は時として非情にな

らねばならないのです。それじゃあ罰ゲームの時間です！… ゆかりさん、《お手》です。」

確かに空気を読んだだけではつきり言葉にしてないけど… それに罰ゲームなんて初耳だし、私はペットじゃないよ？

「そう言いつつも、しつかり《お手》をしてくれるゆかりさんが大好きです。」

注意した私の言葉とは裏腹に、私の右手は無意識にきりちゃんの手に着地していた。むう…

「はい。それじゃあ動かないでくださいね。」

そのまま、きりちゃんは私の手の甲にシールを貼った。〈持ち主 東北きりたん〉と書いてある。む、むう…？

「罰ゲームだから取つちやダメですからね。それじゃあゲームの続きしましょう。次の海のステージがやりたいです」

それは良いけど何これ？名前シール？

「はい。そうです。新年度が始まったので、教科書とか貰って…自分の持ち物にはシールを貼るように先生に言われて多めにもらっちゃいました。」

それで何故に私の手に貼る発想に行き着くのか意味不明なんだけど…正月の羽子板と同じような罰ゲームってことかな？

「そうです。罰ゲームですし…それに、ゆかりさんの両手は既に私のものですから」
純粹な笑顔。けれど瞳は光を反射しない、本気で私の手の所有権を保持していると信じて疑わない狂信者な目だった。

ダイスを振るまでも無く説得は自動失敗する感じの。

「むふふ…。次は左手に貼り貼りしちやいますからね。」

何か既に次のゲームまで勝ったつもりな、きりちゃん。そんな様子を見ると、まさかの逆転で負けた現状も相まって普通に…いやかなり悔しい。

…次は絶対勝とう、どんな手を使っても。

《←←←残り3ターンまで時間経過←←←》

「大人気ない…。」

残り3ターンが表示されたころ、きりちやんの飽きたような呟きにピクリと反応してしまう私…。 やっぱりそうかな？油断ならない相手とは言え、小学生相手に容赦なくスターを10枚以上荒稼ぎして単独トップ。そんな状況に、今更ながら気恥ずかしさを感じてきた。

って言うか、きりちやん、さつきから同じ所回ってるの何で？勝負を捨ててるってわけでもなさそうだし。

「まあ子供っぽいってことは私と同じ目線でいてくれるってことなので、私はそんなゆかりさんでいて欲しいです…。 あー、同じ所を回ってるのもう普通の手段だと、ゆか

りさんに追いつけないので… あっ、これ行けそうかな？」

私、周囲から大人っぽい印象で通ってるつもりなんだけど… きりちゃん相手だとついムキになっちゃうんだよね。

なんて思ってたなら、自分に《呪いキノコ》を使うきりちゃん。確か効果は、サイコロの目が3以下しかでないってやつだ… げっ、まさか。

「… よし！ 《チャンスタイムマス》に止まりました！ それじゃあ対象は《ゆかりさん》と《私》で内容は… 《持つてるスターを交換》!! やった!! 逆転です!!」

目押しに成功したきりちゃんに、私と持つてるスターを強制的に交換されてしまった。し、しまった!?! これを狙って…

「残り2ターン、これはもう決まりましたね。」

くふふと笑うきりちゃん。圧倒的だった得点差がそのまま私に跳ね返ってくることに。残り2ターンでは流石に足掻き用も無く、また敗北してしまった。そ、そんな…

「2連勝!! じゃあ次は左手の罰ゲームですね。ゆかりさん、《おかわり》です… むっ。」別にシールを貼られるくらい気にしないが、また負けた上に良い様に操られるのが悔しかったので意識して左手を動かさなかった。そもそも罰ゲームなんて私は了承して

ないし…

手を出さない私に、不満そうなきりちゃん表情。思わずニヤリしていると、

「…ちゃんと言う事聞かないと」躩しちやいますよ?」

色彩が消えた瞳と、一オクターブ下がったきりちゃんの言葉に、反射的にサツと左手を差し出してしまった。

…別に小学生相手にびびったとかではなく、断ると面倒そうになると、私の勘が告げたからだ。…ちよつとだけ、ペットにされてしまった日《ペットな話参照》を思い出して、背筋がビクツとしてしまったが。

「はい、良い子ですね。じゃあこっちも…よしよし」

結局貼られてしまうシール。それに満足そうに私の手を撫でるきりちゃん。…ぐぬぬ。つ、次は絶対勝ってやる!!

《 ← ← ← 3 戦目終了まで時間経過 ← ← 《

「… あつ、私のことはお構いなく。もっと可愛いく、喜んでてください。」

その後、3度目の正直で何とか勝ち星を掴んだ私。思わず両手を挙げて、はしゃいでしまった。

それ自体は、まあ、良いのだが… 何だか生暖かい目で見つめるきりちゃんに、その様子をスマホで撮られてた。お前は、ずん子さんか…

「姉妹ですから行動が似ちゃうんです。それじゃ、罰ゲームですね… ふむ、私にシールを貼る所、おへその下とかどうです？」

ん？別にどこでも良いけど、何でおへそ？

… 何て聞くと、ススッと近づき耳元に口を近づけるきりちゃん。過去の経験から何だか不穏な予感がする。

「…淫紋って知ってますか？ シールもそれっぽい形の用意しますので、ね？」
内緒話をするように耳元で囁くきりちゃん。うん。おへその下は却下で。

「むう、残念。それなら…額とかどうですか？」

前髪を上げて、目を閉じ、ついでに頬をほんのり赤くしながら待つきりちゃん。

うん。そこなら大丈夫かな？…でも何で頬を赤くしてるのか意味不明なんだけど。

「いや、目もつぶってますので、ついでにファーストキスも奪ってくれないかなーって
思っちゃって…合わせるとお得なので、おすすめですよ。」

セツトメニューか何かなの？…絶対しないから、ドキドキしてるのが伝わる表情や
めて。

何か変なことしてる気がしちゃうから。私も何だか頬に熱を持ちつつ、きりちゃんのおでこに私の名前を書いたシールをペタリと貼った。

「んっ、ゆかりさんの物にされちゃいました…えへへ。でも今回、唇はお求めじゃな
かったんですか。残念ですが次の機会に期待です。それじゃあ、ゲーム再開です！」

そんな感じに、ペタペタと互いにシールを貼りつつ、きりちゃんと私はゲームを楽し
んだ。

その後、剥がし忘れたシールがあつたらしく夕食中にずん子さんに指摘され、きりちゃんが悪面して慌てて剥がす…。なんてイベントがあつたが、ずん子さん含むご家族からは特に深く追求されなかつた。でもやたら生暖かい視線を送られた。

「こっつ、これが、羞恥プレイってやつなんですね。また一つ大人になってしまいました……。」
「違います。」

☒打ち返すゆかりさんと、嫉妬するきりたん

「ゆかりさんは、ずん姉様に甘いですよね」

そんな言葉を投げかけられたのは、きりちゃんの前を枕にしながらゲームを楽しんでいる最中だった。

《お前が言うな》と言う言葉は、恐らくこれ以上無い場面だろう。自分自身が重度のシスコンのクセに何言ってるんだこいつ…

「むぐつ… 反論できない痛いところを突かれましたね。確かにこの前も私、即堕ちしちゃいましたし」

この前って、また二人揃って誘導された挙句、また恥ずかしい目にあつて、ずん子さんに文句言いにいった時だよな？

きりちゃん、意気揚々とずん子さんに対して口火を切ってたけど、初手でずん子さんに《近くでお話ししましょう》なんて言われながらお膝に誘われ、膝枕されて頭撫でられて魂抜けた。

「むぐぐ…で、でもゆかりさんだって、その後ちよつと謝られただけで、すぐに許しちゃつてたじゃないですか。」

むう、それは確かにそうだけど… ずん子さんはそもそも親友な上に、今は夕飯とか色々お世話になつてるし、最近は茶道とか作法とか色々教わつてて頭が上がらないと言
うか… そんな人に、きちんと謝られてしまうと追求できなくて。

それにずん子さんの行動つて、好意100%なんだよね。方向は異次元に向いてるけど。

「まあ仮にも正義の魔法少女ですし。茶道… そういえば習つてるんでしたね。家の事情的に私も一通り習いました。でも好きこのんで教わるほどには楽しくなかったです… やけに苦いですし。」

確かに小学生の舌にはきついかも。まあ私も教えてくれるのがずん子さんじゃなければやらなかったかもしれない。

何というか、教えるのが上手いと言うか、その気にさせるのが上手いと言うか、口車に乗せるのが上手いと言うか… まあとにかく、一緒にいて楽しくなつちゃうんだよね。

「むっ…： そう言えば最近は何料理とかも一緒に作ってたりしますよね。」

あつ、うん。私自身、ほぼ一人暮らしだったから色々作れるんだけど我流で、だからきちんと習った人に教わるの楽しくて。

それに最近は何か居候っぽくなって、そのくらいのお手伝いしないと良心の呵責が…：

「むむっ…： もしかして、ずん姉様と浮気ですか？」

何でそうなる。だいたい、きりちゃんとは変な関係じゃないからそもそも浮気にはならないし…：

「むむむっ…： 言い逃れしようとしてますね…： 今日のお夕飯も、ゆかりさんお手伝いするんですか？もしそうなら私も混ぜてください。ラブラブな恋人としてチェックします。」

あれな発言はいつも通りだからスルーするとしてチェックって…： まあ別に私は良

いけど、きりちゃん料理できるの？

「ふふん。良い機会です。私の頭についている髪飾りが、包丁の形なのは伊達じやないってこと……ゆかりさんに教えて差し上げましょう！」

なんて会話の流れで、今日は三人で食事を作ることに……。なお、小学生のきりちゃんには危ないので包丁は使わせなかった。

「ふっふっふ……」

今日のメニュー、カレーを作ろうと台所に行くと、何故か私の腰辺りに手を回しくつつき、得意げなきりちゃん。ずん子さんに向かってドヤ顔してる。

「むっ、ずん姉様、嫉妬ですか？ やっぱり浮気……。あっ、はい。すいません。ふざけないで料理します。」

手伝いに来たはずが、思いつきり邪魔してるきりちゃんを嗜めるずん子さん。

そんな様子に疑いを深めるきりちゃんに、猛獣も即座に生存を諦めるような微笑みを

見せるずん子さん。うん、相変わらず怒らせたら怖い。

「料理はお嫁さん修行。：。そ、それならしようがないですね。それでずん姉さまにとつて、ゆかりさんは。：。えっ妹的な存在、ですか？」

あの笑みを向けられた後も、調査を続けるきりちゃん勇氣は人類史の中でも最上位に入ると思う。：。まあ、怒られないように今度はきちんとピーラーを持った手を動かしながら話しているが。

そんな流れで聞こえたずん子さんの私への評価。お嫁何たらは置いとくとして、妹。：。まあ確かに最近家事手伝いを一緒にやって姉妹的な関係になつてるかもだけど、私とずんこさん年齢同じなんだけど。：。

「ゆ、ゆかりさんっ！ずん姉さまに聞いたらゆかりさんは妹みたいな存在だつて言つてました。」

すぐ近くで話してたので既に聞こえてるのだが、報告してくるきりちゃん。

妹扱いにちよつと納得行かないけど、これで話しは丸く収まるかな？何て考えていると、

「ずん姉様の妹は私です！ゆかりさん取っちゃダメです！」

えー。何故か矛先がこつち来た。

んー…。じゃあ私はずん子さんの姉になるよ。それでOK？

「そ、それなら…。まあ。ん？何ですか？ずん姉様。」

どさくさに紛れて、ずん子さんとの上下関係を反転しつつ、きりちゃんの追求を逃れた。

上手くいって良かったのだが、ずん子さんに手招きされて、何やら耳打ちされるきりちゃん。

「あ…。そ、そつか私と結婚したら義理の姉妹に…。そうですね。それじゃあ、しようがないですね…。えへへ」

何話してるのか、小声で聞こえづらいが何やら不穏な感じにニヤつくきりちゃん。そして私に近づき、

「ゆ、ゆかりさんは、ずん姉様の妹になりました!」

きりちゃんが何やら嬉しそうに報告してきた。見るとずん子さんは鍋に火をかけたつ玉ねぎを炒めながら、何やら私たち2人に、被保護者を見るような視線を送ってきていた。

…ほほう。姉貴分は渡さないつもりか。正直どつちでも良いが、何だか負けん気が出てきた。

きりちゃん。ずん子さん最近、私に撫でて欲しいって求めてきたり、妹みたいに甘えてくるから…私の方がお姉ちゃんが良いと思うんだ。

「えっ…ゆかりさん、ずん姉様にナデナデしちゃったんですか!!?ずん姉様!ゆかりさんのナデナデは私のです!!」

きりちゃんは、私のナデナデが如何に素晴らしいのか良く語っているらしい。

それで興味を持ったずん子さんから少し恥ずかしそうに撫でて欲しいと求められたことがあった。撫でてあげるとご期待以上だったらしく、その後も求められるままに、たまに撫でている。

ずん子さんは責めるきりちゃんに苦笑しつつ対応しているが、いつもより頬が赤い。うん、仲が良い妹たちだなあ。

なんてニヤニヤしつつ手元の作業、材料をザクザク切っていると、服の裾を引つ張られ、

「ゆかりさん、ずん姉様にお膝枕してもらったって本当ですか…？」

帰ってきたきりちゃんの矛先は再度こっちにそらされていた。ぐぬぬ、それなら…

その後も、きりちゃんをボールに見立てた、私とずん子さんのラリーは続いたが、どちらが姉貴分なのか決着はつかないまま料理は無事完成し、みんなで美味しく頂いた。

「信じて送り出してた恋人が実の姉に……けど、知らない人と浮気されちゃうくらいならいつそのこと、ずん姉さまとの関係を認めても……で、でも本妻は私ですからね！」
ボールになっていたきりちゃんの思考は、攪拌されて大変なことになっていたらしく、夕食中話が4次元方向に進んでいた。

そこに、ずん子さんが悪乗りして乗っかってきたりしたが……まあいつも通りな団欒となった。

☒赤ペン先生なゆかりさんと、反省文を書くきりたん

【反省文】 東北きりたん

私、東北きりたんは魔法を悪いことに使ってしまった。とっても反省していることを示すため、以下に反省文を書きます。

事の始まりは、私の妻、恋人、互いに好意を寄せ会う仲である結月ゆかりさんが浮気、私を放置して旅行に行こうとした事でした。例え同期のみの旅行でも言い訳にはならないと思います。ゆかりさんギルティ。

そこで私は、精一杯淑女的に、ちよつと大人気なく、具体的には商店街近くの地面に寝転がって駄々をこねて私も連れていくように恥も外聞も捨ててお願いしましたが、鬼畜な、冷血な、クールビューティー（笑）な、ゆかりさんに断られてしまいました。

なのでドラえも的な頼り甲斐があるずん姉様に相談した所、アドバイスを頂き 悪魔の囁きを聞いてしまい新魔法を習得し、結果的に文頭にある悪用をしてしまいました。

使った魔法は《認識阻害》で、不自然を認識させない効果を持ちます。それをゆかりさんに使い、旅行中ずつとゆかりさんにくつついて付いて行きました。反省してますます後悔はしていません。

魔法自体の範囲は一人だけ、それに本来すぐに気づかれてしまう程度の効果しかないそうです。： 普段くつついてる私達だとむしろくつついてない方が違和感を感じるとの、的確な助言をしてくれたたつた今「一カ月ずんだ餅禁止」が決まった ずん姉様の言葉の通り、ゆかりさんは二泊三日の旅行中ずつと気づかず、後日写真を見て真相に気づいてました。

気づかずに私とイチヤイチャしていて、しかも周りからは生暖かい目で見られていたと気づいた時のゆかりさんの表情はやばかったです。具体的にはご飯三杯はいけ二度とそんな表情をさせてはならないと自分を戒めました。とつても反省しているので、

旅行で行ってしまった悪行を、さらに一日ごとに振り返ります。

旅行初日、行き先は京都で新幹線を使うので、集合場所は駅の改札前でした。この時、私は恋人らしく、ゆかりさんと手を握って到着しました。

マキさんは予定に無い私の存在に二度見し、素晴らしいアイデアをくれた。諸悪の根源のずん姉様は微笑み、ずん姉様のそんな微笑みをチラ見した茜さんと葵さんは納得した表情で、IAさんはゆかりさんが自分の手の届かない世界に行ってしまったとか逮捕されちゃうとか色々つぶやきつつ儂げな表情でした。兎にも角にも予定の6人プラス私が集まったので旅行開始です。

ずん姉様に予約してもらった乗車券で新幹線には乗れましたが予約した時期が違っていたので、ゆかりさんとすぐ近くの席ではありませんでした。でも乗務員さんに確認して、すぐに私の特等席なゆかりさんのお膝の上に移動したので問題ありませんでした。

ゆかりさんとタッグを組んで、皆さんとトランプをしつつ、主に行き先についての話題で盛り上がりました。その際、普通にゆかりさんと会話していましたが、ゆかりさんは私がここにいる不自然さに気づかないようでした。なんだか いけない事をしていようのでドキドキしました。反省しています。

魔法の効果の凄まじさに戦慄していると、ずん姉様に簡単に破れるはずの魔法がゆかりさんとの両思いでラブラブな愛 情の力によって揺るぎないものになるとの指摘を受けました。嬉しくなつてゆかりさんに視線を送ると、何も言わなくても私の頭をナデナデしてくれました。流石は私の嫁です。

そんな状況を周りで見られているのは少し気恥ずかしかったです、例えばIAさんは私達が幸せならそれで……的な感じで何か達観？納得？してくれていました。1つずつ私とゆかりさんのゴールまで障害が消えていく気がします。周りが私達を応援してくれるような、風……なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、私達のほうに。中途半端は

そう言えば地味に私とずん姉様の（既知のゆかりさん以外に向けた）魔法少女バレイ

ベントだったみたいですが、特に話は続かず、そんなことより旅行と恋バナをしていました。

皆さん女の子なので、バトル方向の話にはあんまり興味はないようでした。何とか私とのラブラブな話を回避しようとするゆかりさんと、周りにラブラブな事を自慢したい私とのバトルが発生してましたが、周りからみたらきつと夫婦喧嘩どころかイチヤイチャしてるようにしか見えなうるさかったのかも知れません。反省します。

京都に着くとバスを乗り継ぎ、清水寺に行きました。ゆかりさんに車内で釘を刺されていたので、実際に飛んでみることはしませんでした。ほめてください。的確なご忠告ありがとうございます。

その後、恋愛成就の滝の水をゆかりさんと2人で飲みました。マキさん達から1〜2ℓ飲ませて早くくっつけようかとかコソコソ話し合っていました。周りから祝福されているのかも知れません。いや誤

解じゃ無いです。真実です。私にも譲れぬ一線が。ゆかりさん、赤ペンで消すのズル。日頃の行いから正して周りの誤解を解いていく所存です。……（注1）
（注1）明らかに別人の筆跡

その後、廊下の立て付けが悪くなってる寺院に行ったり、和スイーツを味わったり、とつても楽しめました。ゆかりさんとの結婚旅行、京都でも良いかも知れません。そして今晚泊まる宿に着きました。寒がりなゆかりさんにあつた、温泉付きでとつて良い宿でした。

暖まって夕飯を頂いた後に、従業員さんがずん姉様に本当に布団は6枚で良いのか聞いていました。ずん姉様に誘導されたゆかりさんも6枚で十分と答えていました。これは既成事実と言つても過言では何かを察してくれた従業員さんは微笑みながら納得してくれました。その日はいつも通り、ゆかりさんと1つの布団でぐっすり眠れました。

□平坦なゆかりさんと、悪夢を見たきりたん（プロポーズの日）

「…… ゆかりさん、…… ゆかりさんっ！」

日がまだ登り初めたばかりの時間。いつもより早い時間に目を覚ますと、きりちゃんに抱きしめられている私の体。いつも通りと言えばいつも通りなのだが、いつもと違いきりちゃんの様子は涙目で涙声だった。

「あっ…… 良かった。いつものゆかりさんだ……」

不安げな様子に反射的に抱きしめる力を込める。胸の中で、よく分からないが安堵の息を零していた。

な、何があつたんだろう。普段のギャグ的なきりちゃんからは考えられないシリアスな雰囲気にはハラハラしてしまう。

「すいません、怖い夢を見て…」

発せられた理由は、ずいぶん子供っぽいものだった。色々疑わしい所が多々あるが、きりちゃんは小学生だ。多少情緒不安定なのは仕方がない。安心するように心を込めて撫でてあげる。

そんなこんなで始まった1日。土曜日だったのでマキさんとショツピングの予定だったのだが、取りやめた。不安そうに震えるきりちゃんを放置するなんてできなかつた。

マキさんには中止を伝えた後、理由を告げる前に『きりたん関係?』と聞かれてスムーズに話を通った。笑って許してくれてありがたいし、今回はその通りの理由なのだが私の急用がきりちゃんしか無い的ない思ひ込みは訂正してもらいたい。

「ねっ、ゆかりさん！… えへへ、呼んでみただけです。」

「やつ！ゆかりさんと離れたくないです!!」

「ゆかりさん！ずん姉様と話しちゃダメです！ずん姉様は敵です！」

「ゆかりさんは私と一緒に嫌じゃ無いですよ？私を捨てないですよね？」

その日、きりちゃんはいつも以上にべったりだった。情緒不安定なのだから仕方がないが、私と同程度慕ってるはずのずん子さんに何故か敵対的なきりちゃん。その様子は私が今日の約束をキャンセルした要因の1つでもある。

ずん子さんは困ったように眉根を寄せていただけだったが、割とシヨックを受けてそうだった。後々フオローしよう。

「あの… すいません、ゆかりさん。今日用事あったんですよ？大丈夫でしたか？」

私の腰にしっかり捕まりつつも、不安そうに尋ねるきりちゃんに、マキさんも分かつ

てくれたから問題ないよと告げる。

「むっ、よりにもよってマキさんでしたか…… 葵さんや茜さんやIAさんでもなく、よりにもよって……」

よく分からないが、後半3人は良くて、マキさんとずん子さんはダメらしい……。現状になった原因の夢に関係するのだろうか、想像ができない。

あえて避けていたが、夢の内容を聞かないと原因が分からなくて、これ以上はどうしたら良いのか分からない。

なので、きりちゃんの自室に連れ込み、いつも通りふたりつきりになって安心できるようにぎゅーっと抱きしめながら聞いて見ることにした。

「え、…… えっと、それは、その…… ゆ、ゆかりさんに失礼な内容なんです、怒らないですか？」

私に失礼?…もしかして私が夢の住人ならではのメチャクチャな行為をして、きりちゃんを不安がらせてしまったのだろうか。何やってんだ夢の中な私。

とにかく夢の内容に責任なんて無い。怒らないことを約束する。

「ありがとうございます。えつと…」

それでも瞳を揺らし、言いずらそうにするきりちゃんに視線を合わせて再度お願いすると、ついにその重い口が開いた。

「は、はい。：：。あの、夢の中で、ゆかりさんの胸が：：：。胸が大きくなってたんです！」
：：。はい？

思わず表情が固まるが、きりちゃんは堰き止めていた言葉を一気に吐き出すように口を動かし続ける。

「具体的に言うのと、ずん姉様レベルな、こう：：。ボンツて」

自分の胸あたりで、手を使って大きくなった胸のジェスチャーで説明するきりちゃん。
ん。

う、うん。そっか。

正直想定外過ぎてなんて言っただけ良いか分からないけど：：。うん、そっか。私の胸が。

そ、それで胸が大きかったのが怖かったの？…何で？

「いえ、それ自体は別に良かったんです。夢の中で触らせてもらったら、ふにゆんふにゆんで、いつものフラットなゆかりさんも最高だけど、巨乳なゆかりさんも至高に感じて受け入れたんですが…」

夢の私、揉ませるな。それとフラット言うな。そんなツツコミが口から漏れそうになり慌てて止める。今は話を聞かなければならない。きりちゃんもふざけた感じはまったく無いし。

「でもゲームをしようとしたらいつもは無い胸が邪魔になって上手くお膝に乗れなくて…」

きりちゃん？無いことは無いからね？一応…。いやいや私、自信を持って。一応じゃなくて確実にある。と言うか、ずん子さんとマキさんが異様なだけで、私だつて別に…

「その時は並んでゲームしたんですが、その後も、私が胸に埋まって窒息しかけたり、ゆかりさんの胸が大きくなったせいで歯車が噛み合わないと言うか、すれ違いが大きくなってきて、それでついに…」

ギリツと歯を噛み締めて恨めしげに私の胸を睨むきりちゃん。睨むのやめて、減りそう。

「夢の中のゆかりさんに、私達だと胸の大きさが違いすぎて……い、一緒にいられないって言われて、巨乳派のずん姉様とマキさんに連れられて一離れていっちゃうんです。」

なるほど、それですん子さんとマキさんを敵対視してたのか。ツツコミたい箇所があるが……きりちゃんの様子は涙目どころかポロポロと涙が溢れていて、ツツコミたいなんて気持ちは消えてしまった。

「ん、良かった……小さいままで。」

話を聴きながら、きりちゃんの不安になってしまった心を落ち着かせるために頭を撫でてつつ抱き寄せる力を強める。そうすると、胸の中できりちゃんの安心した言葉が漏れる。

：：うん。いや、きりちゃんが安心できるのならばそれでいいんだ。気にするな私。

「それで、私は必死に追いかけるんですが、追いつけなくて：：それでも諦めきれなくて、胸に詰め物したり、いろいろ胸が大きくなる食べ物とか運動とかしたり、魔法で何とかしようとしたんですが、全然上手く行かなくて：：大丈夫ですよ？ ゆかりさんの胸、大つきくならないですよ？ ずっと小さいままで、ずっと一緒にいてくれますよね？」

一瞬言葉が出なかった私を恥じるように、きりちゃんにもちろんと返す。

私の胸はずっと小さいままだし、ずっときりちゃんと一緒にいるから安心して欲しい。うん、：：うん。

「良かった：：」

安心したのか、力が抜けたような笑顔を見せてくれた後、きりちゃんは眠ってしまった

た。

悪夢を再度見ないように私はしばらく撫でていたが、きりちゃんのみりながら笑みがこぼれてきた様子に安心して、一緒に寝てしまった。

「ゆかりさん？巨乳って肩がこるみたいですよ。それにゲームするのも邪魔でしょうし、ゆかりさんの体型的にスレンダーの方が似合いますよ？それにくつついた時に控えめの方が密着度が上がりますし、私的に枕は硬めで低めの方が……」

たつぷり昼寝をした後、きりちゃんの巨乳への敵愾心は消えていて、ずん子さんと仲直りしてくれた。それに私にも変なことを口走ってすみませんと謝られた。

……ただ、軽くトラウマにはなっているようでこの日以降、本人的にはさりげなく、私に必死に貧乳の良さを説明するようになった。どうしてこうなった。

☒一緒にエロ本を見るゆかりさんときりたん。

「ゆかりさん、ゆかりさん、ここに座って…ちよつとお耳、貸してください。」
きりちゃんの家庭教師を初めて半年ほどになる。今日は何だか気がそぞろで、何か楽しみなことを伝えたくて頬がピクピクしちやつて、でも我慢しているような…そんな感じだった。そんな様子が伝わってきて、何だか分からないが私も楽しみに思えて、ニコニコしていた。

そして家庭教師の時間が終わり、目をキラキラさせながらベットの端、きりちゃんの隣に座るように促され、満を辞してという感じで私の耳にコソコソ話しかけてきた。何か分からないが勉強中は我慢していたらしい。相変わらず良い子だ。

「実はですね。エッチな本を持ってきたんです。一緒に読みましょう！」
私の耳にコソコソと伝えつつ、A4ほどの本らしきものが入っている紙封筒を取り出すきりちゃん。

良い子って言う前言の撤回が必要になった。きりちゃん、自分が小学生ってことを

ちゃんと自覚しようね。没収するから渡しなさい。

「ふっふっふ…ところがこの本、私が読んでも大丈夫なエロ本なんです。」

そんなはず無いでしょ？変な言い逃れしようとしらないの。

今なら、本を渡してキチンと反省するならずん子さんには言わないから。

「言い訳じゃありません。確かめて見ますか？」

叱つても変わらない態度に少しひるむ。きりちゃんは居直ったり、嘘を言つて誤魔化すような子じゃない。…エッチな要素があるけど全年齢向けな漫画とかなのかな？

「ぬふふ、それでは一緒に見て見ましょう。」

何故か肩を並べてエロ本？を見る事態に。そして封筒から出てきたのは雑誌風のグラビア的な写真集で、ページを開くと年端もいかないせいぜい中学生程度の少女の裸体が目に入る。目や重要な箇所は黒い線などで隠されているが下着姿で、充分エッチな本だった。

確かに性描写などは無いけど、あんまり教育には良く無い。すぐに読むことを止めよ

うとしたが、きりちゃんを見るとニヤリと不敵な笑みを浮かべていて、氣勢が削がれる。

「私が見ても大丈夫な理由、別に年齢指定は関係ないんですが……まだ分かりませんか？ほらこことか、よく見てください。」

挑発的にきりちゃんにそう言われ、目をそらしがちだったが細部まで見始める。横で説明するきりちゃんのコソコソと囁く声と、小さな指の誘導を受けて真剣にページを見ていると……幼い姿だが、柔らかそうな肌をさらしている少女の姿に、何だかドキドキしてくる。

「お腹が少し出ていますよね？これは別に太っているわけではなく幼い故に内臓が下に出ってしまったんです。通称イカ腹と言いまして、このくらいの年頃特有なぶにぶに減でしてね……」

きりちゃんと同年齢くらいな少女のあられもない姿を、同じく幼い少女のきりちゃんに臨場感たっぷりな表現で説明されて、よく分からなくなってきた私だったが、ギリギリであることに気づくことができた。

…この写真集に写ってるの、きりちゃんだ。

「ふっふっふ、その通りです！私の写真を私が見ても無問題です！ずん姉様にゆかりさんに意識してもらう為にはどうしたら良いか相談したことで生まれた努力の結晶です。もちろん、ゆかりさんに見せるためだけの世界に2冊しか無い超プレミア本ですよ！それにしても、顔が隠れてるのに裸だけ見て判別できるなんて、やっぱり毎日裸を見せ合ってるだけあって、私の裸体は覚えられちゃってるんですね。恥ずかしいけど、ゆかりさんなら…」

早口でまくし立てて、赤く染めた頬に手を当ててテレながらクネクネするきりちゃん。多分成長したら黒歴史になるに違いない様子だがスルーしてあげよう。… 思春期と言うのは多感な時期だ。きつとしようがないのだろう。

そして注文すらしてないのに特注品が誕生する世の中って不思議。ついでにもう一

冊は目線無しバージョンらしい。そして、やっぱりずん子さんの暗躍か。後、お風呂のことを誤解を招く表現するのやめて。

「ついでにカメラマンもポーズの指導も、ずん姉様です。そ、それでどうですか!?興奮しましたか!?小学生は最高だぜ……って感じになりましたか?ダメですよ?犯罪者になっちゃうから性的な対象は私に限定しないと。私なら相思相愛、合意の上なので合法ですから!セーフな上に、むしろウエルカムです!」

純粹で邪な……矛盾した瞳をこちらに向けつつ、横から私の腕に頬をすろすりして、先ほど説明したお腹に私の手の甲を当てて誘惑?しているらしいきりちゃん。合意の上でも違法でアウトだからね?

そもそもいやらしい目線なんて向けません。確かにこう言う本を見るのは初めてで、ちよつとどきどきしてたけど、きりちゃんって分かったらスツと熱が消えたし。

「え、な、なぜ!?!」

いや、きりちゃんってかわいい妹的な立ち位置だから。家族の裸じゃ興奮しないよ。そもそも毎日お風呂一緒に入ってるから見慣れてるし。

「妹…かわいい…家族…。む、むう。親愛は感じるの、それはそれで嬉しいのですが…それだけじゃなくて恋愛的なラブも欲しいと言うか…」

不満そうなの、でもなんだか口元がニヨニヨしているきりちゃん。かわいいなあ。

その後、健全な写真を一緒に何枚か撮ったことで、きりちゃんの気をそらすことに成功した。チヨロい。

…と思っていたのだが、帰った後、きりちゃんの本（目線無しver）が私のバック内から発見された。こっそり入れられたらしい。チヨロいのは私だったようだ。

本人に返そうとしても拒否されそうで、そもそもこれを東北家まで持ち歩きたく無いし、それに内容はともかく私のために必死に作ってくれたことを考えると捨てることもできず、悩んだ結果取り敢えずテンプレ通りにベツトの下に隠しておくことにした。なんだってこんなことに…

☒赤ちやんなきりたんと、お母さんなゆかりさん。

吾輩、いや私は小学生である。名前は東北きりたん。

魔法少女と霊媒師の姉2人を持ち自身も魔法少女な三女と言う、漫画やラノベにありそうな設定の東北家に生まれた。

そんな私は、最近一緒に遊んでくれる結月ゆかりさんと出会い紆余曲折：：ではなく、まっすぐ歩いて三步目くらいで恋というものに落ちた。まさに現在進行系で初恋真っ最中で、日々を満喫している。

仮にこの世界が漫画だったとしても、どうやらジャンルのには『異能力バトルもの』では無く『日常系ラブコメもの』だったらしい。やったぜ。

そんなある日、空いた時間にゆかりさんとさらにラブイ展開のためのネタ探し：：ネットサーフィンをしていた。

エッチなのは断られてしまうが、軽く天然が入ったゆかりさんの基準は微妙な判定が多く、何だかんだ言いつつ割と受け入れてくれる抱擁力を持つゆかりさんに、つついっ色々提案してその胸にダイブしてしまうのだ。

その吸引力は「きりたんホイホイ」の異名が付くほどだ。：：私の中で。本人対して口

には出さない。怒られそうだし。

そんな私は、ネットの海を探索中「バブみ」という言葉を見かけた。言葉の響き的に赤ちゃんプ〇イ的なものを想像し、実際にそんな意味だった。しかし私の好み的には少しズレているように思える。ゆかりさんとラブラブの予行演習のシミュレーション、つまりはエッチな妄想をする際の呼び水には、「おねロリ」とか「ロリおね」とかのジャンルを検索するのが一番成果があつた。

私とゆかりさんは、そこまで年齢差は開いて無いし……あつ、プレイだから実際の年齢差は近いどころか、逆転すらしても良いのか。

ゆかりさんに抱きついてあやされる私を妄想……ほう、なかなか。

逆に恥ずかしげな表情の年上のゆかりさんをあやす私を想像……ほうほう。

私はさらに検索し、授乳や赤ちゃん言葉……等の単語を元に知見を広げ、その日の内に「バブみ」の沼に入り込み、件のワードは私の検索履歴で大体上位に来るようになった。

ここまでが、私の普段どおりな日常であり、本題の原因になってしまった事象の前書きである。本題の内容はこの3日ほど後だった。

「きりちゃん、何か難しいこと考えてるの？ 眉間にしわ寄ってるよ？」

ゆかりさんがその少しひんやりする手の指で私の眉間をグリグリしながら覗き込んできたのは、家庭教師として勉強を教えてもらう前に雑談している時間だった。顔が近い。誘っているのだろうか。

確かに考え事をしていたが、内容は『おねロリとバブみの共存関係』で、とてもじゃないが口に出すことははばかれた。なので私はやんわりと否定する。

「……妄想と同じく『ゆかりお母さん』と言う呼称を口に出して。」

「……えっ？ お母さん？」

痛恨のミスだった。繰り返すが、私は本を人目の前にして『ゆかりお母さん』の呼称

を実際に口にしてしまったのだ。

確かに一番最近の妄想で、ゆかりさんに半ば強制的にお母さん呼びを指示されて、最初はしぶしぶ…。時が経つと喜んで呼んでいたのだが、現実ではまだ…。そう、まだそんなやり取りはなされていけない。フライングにもほどがある。重大なマナー違反だった。

「…私も学校で先生のことお母さんって間違つて呼んじゃった時あったなあ。私の時は大勢に聞かれて恥ずかしかつたけど…。今は他に誰もいないし、私も内緒にしてあげるね」

マイブーム真つ盛りの嗜好を、しかもその対象相手に暴露してしまった事を自覚して混乱する私。

そんな私を見て、実情とはかけはなれた健全な理由を察して、フオローしてくれるゆかりさん。自身の唇に人差し指を触れさせる、内緒のジェスチャーをする様子は半端ないほど似合っていてかわいかった。状況と、年上のはずなのに幼い仕草も似合うゆかりさんの色気にクラクラしてしまう。絶対に誘ってる。

「誰でもたまにあることだから気にしないでね…。何なら今日はきりちゃんのお母さ

んになつてあげようか？」

裏声つた声で何を返事すれば良いか混乱しつつ、目を回し始めた私に、冗談を交えつつ追加のフォローしてくれるゆかりさん。

その様子はまさに良妻だった。現状でこれなのだから、将来の本当に私のお嫁さんになつた時、私は正気を保っていることはできるのだろうか。

……さて、一般的な小学5年生ならば、話を誘導しようとしてくれるゆかりさんの優しい思惑に乗っかり、数回掛け合いをして、この話しはきっちり、そこで終わったのだろうか。

しかしこの東北きりたん、数多くの（注1）本を読み知見を広げ、師と切磋琢磨（注2）し、自らを見つめ高める研鑽（注3）を日頃から積んでおり、通常の小学5年生の領域を遥かに超えていた。

（注1）… 主に薄いやつ

（注2）… ゲームのこと

（注3）… 妄想のこと

故にゆかりさんがお母さんになってくれる機会を逃しはしない。機を見るに敏、真剣な表情で私はその提案にお願ひした。

自分でも関心するほど、きれいに五体投置して。

「えっ… あつ、うん… じゃあ、勉強終わったらね」

まさか自身の冗談を真に受けるとは思わなかつたのだろう、ゆかりさんはちよつと面食らっていたが… 恋する少女は己の欲望を満たすことに忠実なのだ。

ちよつと申し訳ないが、自分から発したセリフだ。責任は取ってもらおう。

私は満足げに土下座から姿勢を戻して勉強の時間に入った。

「ん、勉強終わりだね… それじゃあ、えつと、きりちゃんは私にお母さんになって欲しい… んでいいんだよね？」

何だこの特殊なプレイをする前の手探り感的な恥ずかしさは。改めて聞かれてしまひ、頬に熱を自覚しつつも頷く。

「それで、甘えたいんだよね？」

再度頷く。

ゆかりさんの純粋な瞳を見てみると、勉強しながら今晚の最終的な目標を授乳プレイに設定した私が薄汚れているように思えてしまう。

しかし元々普段からゆかりさんにくつついていて、谷間に挟んだ顔をたまにぐりぐりする事も受け入れられている。

そんな私ならば、授乳程度、ちよつと足を上げれば超えられる程度の段差で、大した目標ではないはずだ。

何なら服の上からでも良い。どことは言わないし、触れたことは無いが普段の触れ合いから換算し、私が唾える頂の位置は、確度99%の確信を得ていた。

後は作戦通り、その場所を偶然、たまたま、自然に、さり気なく、口に含むだけで……いやそれってどんな動作だ？

「きりちゃん、もしかして、その、家族にあんまり優しくされてないの？」

自分の立てた計画の実現性と言う重大な欠陥に気づいて戦慄していると、ゆかりさんから凄い温度差がある質問を受けた。

あつこれ、実は家族から放置されてて私が愛情に飢えてる……的な勘違いをされてる

やつだ。大好きな人に心配な顔をそれ以上させたくないし、家族からの愛情なら割と過剰に受けているので、即否定する。

「そうなんだ、良かった。何か家庭に問題とか色々悩んでたのかなあって思っちゃって。」

ほつとするゆかりさんを見て：：この辺りで私の限界だった。ちくちくと痛んでいた良心へのオーバーキルの意味で。

よく考えなくても私、親切に心配してくれるゆかりさんをだまし討ちしようとしてる。

再度五体投置する。さきほど土下座したのは人生初だったが、さらにもう一回、つまりは1日に2回もするのは今日で最初で最後だろう。

私はその体勢のまま、ゆかりさんに邪な気持ちでお母さんになつて欲しいと言ってしまったことや、最近ハマっているシチュエーションに関して、お気に入りの画像や小説を含めて私は赤裸々に語った。

その際、ゆかりさんが如何に母性溢れて、それに私が凄く引き寄せられていることは

特に熱弁してしまった。

土下座しながらゆかりさんへの劣：愛情を搾り出していると、脇を持ち上げられ、ベットに座らせられた。私はベットか。いやゆかりさんなら飼われるのもOKなのだけど。

そしめまだまだ語り足りないが、少し赤くなつたゆかりさんの表情を見るに、多少余計な事を口走つたのかもしれない…。黙ろう。

「そつ、そつか、こういうジャンルに興味が…。んー、じゃあ、して見る？」

目を合わせられ、ゆかりさんの純粋な心配を踏みにじるようなことをしていたことを再認識して流石に怒られるだろうなど、しゅんとしていたのだが、ゆかりさんの提案に耳を疑う。えつ、良いの？

「その、きりちゃんが言つてた、じゅ、授乳？とかのエツチなことはダメだけど…。お母さんになるつて言つたのは私で、甘えたいつて言つたのはきりちゃんだよ？需要と供給ばつちりじゃない。ごっこ遊びみたいなものだし。」

多分貴方の供給より、私の需要はもうちよつとエツチなやつです。噛み合つてそうで噛み合つてないやつです。

って言うか、ゆかりさんボイスで授乳なんて卑猥な言葉を言わせてしまい、私の鼓膜が甘く揺れた。いや、授乳って言葉自体は卑猥じゃないんだけど……声だけで妊娠しても、きちんと責任って取ってもらえるのだろうか……ゆかりさんならいける気がする。何とか想像妊娠しろ私。

「ほら、ぎゅーしてあげる。ハハ、おいで？」

思考が異次元に飛んでいると、ぽんぽんとお膝の上を指定され、腕を広げたゆかりさんに吸い寄せられるように正面から膝に乗った。変わらないどころか日に日に強まる吸引力だった。

そのまま抱きしめられ、背中を優しく撫でるようにポムポムとされた。あ、あやされてる。

私の妄想ではエッチの前の戯れ的な、前段階的なものでしか無かったはずのただのナデナデは、相手が私を日頃から触れていて弱点とか知り尽くしているゆかりさんだと話がつまみたく違った。

それに触れてくれる手は、いつもと違う母性的なエネルギーが溢れていて、私にクリティカルヒットし続けている。

髪の毛に指を通される絶妙な力加減。耳元で、甘えていいよと囁かれる声。押し合つてくにくにくにゆつぶれる私の頬とゆかりさんの胸。

恥ずかしさ等の精神的に起因する心の防壁は瞬時に溶け、背中を撫でる優しげな手に、気づけば『お母さん』と何度も甘えた声を絞り出されていた。こ、これ……やばい。確実に人をダメにする系のやつだ。

「はい、お母さんはここにいますよ。きりちゃんは毎日きちんと家でも勉強して、きちんと成績も上がって良い子だね。」

ここまでの、流れに沿ったような髪の毛のすき方とは違った、少し乱雑な撫で方をされた。髪の毛がぐちゃぐちゃになるの、マーキングされている見たいできもちいい。頬の引き締め方を忘れてしまった。

家での勉強?…恐らく家庭教師のことだろう。

ゆかりさんはすぐに課題を片付けてしまう私に、勉強の意味があるのか不安に思っているようだが、きちんと私のための思って選んでくれた教材を、その後の最高に楽しいゲームの時間を餌としてぶら下がれて、とつても集中して頭を回転させる時間が無意味なはずが無い。

実際に私の成績は上がっていた。

一番最近の通信簿では、それまでしなかったテスト中の見直しや授業態度の様子について言及され、向上心が上がった的な書き方で内申点さえ上がってしまった。

確かに努力や成果はある。けれど2つともゆかりさんと一緒にゲームしたり、誉めてもらうための邪な気持ちの原因だ。先ほどの自身の所業も兼ねて不安になり、私って良い子なんですかとゆかりさんに尋ねてしまう。

「うん、もちろん。きりちゃんはとーつても良い子だよ？それに最近は料理のお手伝いもできて、こんなに良い子なきりちゃんには、いーっぱいご褒美上げなきゃね？良い子だから…特別だよ？」

良い子、良い子…そうか、私は良い子なのか。何度も繰り返してくれる言葉に私の心は納得した。

良い子だからこんなに甘い言葉を囁かれて、お母さんって言っても受け入れてくれて、背中をすりすりしてくるのか…良い子って凄い。

そして体も心も液化化し、ゆかりお母さんにくっついて何とか形を保っていると、聞こえた『ご褒美』という言葉に耳がピクピクした。それなら、それなら…

「えっと、それは…」

何だか現実味が無くて滑舌がゆるゆるだったが、ゆかりさんのおっぱいが欲しくて、とっさに求める言葉を伝えていた。

たしか、さつきダメって言われちゃったけど、ちゅーちゅーして甘えたくてしようがなかった。口がさびびしくて半開きになってしまう。

たすけてほしくて、ゆかりさんをみつめる目がうるんでしまう。

「うっ、んー： お口が寂しいんだよね？それなら、指じゃダメ？」

口元に近づく、ゆかりさんのひとさし指。頭が何か考える前に近づいてきた指を入れてたくて、口を大きく開く。

そして、ゆっくり入ってくる指を舌と上あごで押しつぶす。欠けていたピースがはまるような、まんぞく感。もう遠慮はいらない。私の口に入ったのだから、もう私のものだ。

「いや、私の手は私の：。まあいつか、今だけだよ？」

唇に力を入れてちゅーちゅーする。私のものになった指は、しよっぱくも、甘くも、にがくもない。

けど、いつもハナに感じる大好きな、においの『元』が私には感じられた。きつとお

母さんに会ったばかりの私では、感じ取れなかつた味にむちゆうになる。私はお母さんが大好きだから、きつとこの味も大すきにちがいない。しつかり覚えなないと。

そんなふうに関分に言いきかせながら、もごもごしているとお母さんのやさしい声となでてくれる、きもちいい手。私の中で、赤ちゃんになつて甘えることが、しあわせにちよくせつ、つながつてく。

私の手も足もお母さんにしつかりしがみついでいて、顔もやわらかいにはさまれて、目の前にはお母さんのおかおがあつて、とつてもふわふわする。あたまがぼーつて、目がとろんとしてしまう。

「ん？きりちゃん、眠いの？…じゃあ今日はそのまま眠つちやおうか。おやすみ、きりちゃん。」

おかあさんの、おやすみのあいさつ。いいこなわたしは、もちろん、おやすみとかえす。

わたしは、からだにあふれる、しあわせに、うまつたまま、まつくらになつた。

☒ プール日和水着で協力プレイな、ゆかりさんときりたん

「予定のバスが来るまで後10分ですか。」

反射する日光で真っ白に輝くアスファルト、そして燃え尽きる寸前の悲鳴のようなセミの鳴き声が響く炎天下のさなか、私ときりちゃんはバス停にいた。

今は私達以外、周りに誰もいないが約束したバスはもうすぐなのでそろそろいつものメンバーも来るはずだ。本当はずん子さんも来るはずだったが、残念ながら急用で来れなくなってしまうらしい。

「アイスと、木陰を作ってくれる木がなかったら干からびてる所でしたね。何というか、暑さが殺しにかかってきてますよね。」

気温は聞くところによると40℃を記録したらしいが、きりちゃんが言うように、バス停を守ってくれるような木陰で、アイスを食べているので暑さはかなり軽減されていた。…汗が滲んでしまうほどには暑いけど。

「ん、ここのう時はガリガリ君が最高でしゅよね。」

口の中いっぱいアイスをほうばり話す言葉は少し舌足らずな感じだったが、とつても美味しそうに食べるきりちゃん。そんなニコニコな笑顔に釣られて、私もニコニコしながら同じくガリガリ君をしゃくしゃくして、振られた話題について考える。

確かに、ガリガリ君は美味しい。普段食べるには多いくらいの量が60円で買えてしまい、今の気温だとパクパク食べることができる。

… ついでに、私のおススメの食べ方は、アイスを口に含みながらお茶とかの飲み物を少し口にいれる食べ方だ。口の中で程よく解けて喉に抜けるのが気持ちよく、さらに美味しく食べることができる。

「ほほう… 美味しそうですね。さっそく試して見ます。ん、んきゅ… ん、ん… なるほど。口の中で少し解けて良い感じですね。あつ、ゆかりさん。洋ナシ味も食べたから私のソーダ味とトレードしましょう」

きりちゃんはそう言うとき水色のアイスを口元に近づけてくれた。トレードは対等ではなくてはならない。だから、きりちゃんの口の大きさを考えて少し控えめにかぶりつく。

そして口内にソーダ味を響かせながら、きりちゃんに私のアイスを差し出した。

「あーんっ、…ん、んふー、んう？んー…ん！」

…うん。きりちゃんは本当に美味しそうに食べるのが上手だ。ニコニコと笑顔を送ってくる。口は互いにふさがっているので言葉は鼻声しか出なかつたが、それが逆に楽しくて互いに単音だけの会話をしばらくし続けてみた。…割と意味が伝わってしまったのがさらに笑えてしまつて、癖になつてしまふやうなやり取りだった。

誰かに見られたら恥ずかしいやり取りだがバス停には私達しか並んでいない。なので調子に乗つてしばらく掛け合いを楽しんでいると、横から視線を感じた。

きりちゃんと揃つてその方向に顔を向けると、一緒に集まる予定なマキさんとIAさん、それに琴乃葉姉妹がいつの間にか到着して、すっごいニコニコ…いや、ニヤニヤして私達を見守っていた。どうやらさつきまでのやり取りを見られていたらしい。恥ずかしくて日差し以外の熱を顔に感じた。

「えう…えつと、その、皆さん来てたんですね…こつ、声をかけてくださいよ！も

う：．． あっバスが来ましたよ！さあ乗りましょう!!」

そんなきりちゃんのリフトに同調しつつ、ちょうど来てくれたバスに逃げるように乗った私ときりちゃん。後から乗ってくるメンバー含め、6人で今日の予定である、市営のプールに向かったのだった。

そして話しはプール到着後に続く。．． そう、今回はプールがメインの一日だ。私ときりちゃんが恥ずかしい姿を見られた挙句、その後の逃げ場が無いバス内で延々とからかわれたなんてどうでも良い描写は全てカットだ。．． と、現実逃避をしていると

「う、たっ確かに間接キスですけど、．． はっ初キス!?違います!もう何度も．． じゃなくて、えっと、．． そっ、それにさっきのはアイスが甘い上に冷たすぎて、いつものゆかりさんの味が感じられませんかし．．」

残念ながらカットできないようだった。仮にこの世界が創作ならば著者はずいぶんと性格が悪いらしい。

そして、いつのまにやら琴乃葉姉妹に挟まれて両側から追求されていた、きりちゃんが混乱して爆弾発言をしていた。なんだ、いつもの私の味って。それと何度もって、間接キスの方だよね？

「あ：： ゆ、ゆかりさん：： !!」

案の定、さらに追求をされ助けを求めるように私を呼ぶきりちゃん。けれども私も動くに動けなかった。隣に座ったIAさんに、揺れる瞳で見つめられながら『ゆかりちゃんも、きりたんちゃんの味、分かるの?』なんて聞かれ、私にも追求の手が伸びていたからだ。

その真つ直ぐな瞳に思わず口ごもっていると、私を挟んだ反対側に座ったマキさんから『分かる、見ただね』と謎のアシストが飛んできた。そんな言葉にIAさんは『うん。そっか、分かっちゃうだ。：： 大丈夫、小学生に手を出しちゃっても、ゆかりちゃん はゆかりちゃんだよ：： 私達の大切な、大切な友達。』と悲哀に満ちた謎の納得をされてしまった。やめて、にっこり笑ってるのに涙を滲ませないで。そんな収監される友人を憐れむような、哀愁溢れる笑みを向けないで。

：： と言うか、何故か自信が持てなくて即答できなかつたけど、きりちゃんの味なんて流石に分からないから：： 多分。だからえっと、違うから。：： なんて弁解はできなかった。何故なら、

「ゆ、ゆかりさん! 助けてください!! へるぶです!!」

色々追求されて限界だったのだろう。きりちゃんが魔法でも使ったのか、文字通り飛

ぶように抱きついてきて私に助けを求めて来て、私は押しつぶされてしまったからだ。

バスの中は私達しかいなかったからか、騒いでも怒られることは無かったが、その後も押し合いへし合いしたせいで冷房が聞いている車内にいたはずなのに、バスを出た時には息が切れて汗まみれになっていた。兎にも角にもプールに着いた… さっきのやり取りはさっさと忘れて、水着に着替えてパーっと遊ぼう。

「ゆかりさん、私の水着なんですけど… どつちが良いと思いますか？」

更衣室で水着に着替えていると、きりちゃんも左右の手でそれぞれ1着ずつ水着を持ち、私に聞いてきた。

片方はつい先週、一緒に買いに行った白を基調とした水着で、もう片方は紺色の学校指定の水着… 所謂スク水だった。

今日は別に学校の行事でも何でもない。それにこの前せつかく買ったんだし、白を基調としたものにしたらと告げると、

「いえ確かにこの前、ゆかりさんの助言に従ってゆかりさん好みの水着を買いましたが… 気づいてしまったんです、あの店のラインナップにはスク水が無かったんだっ

て。世の中には、スク水の方が興奮する方はいっぱいいます。だから念のため……そう、念のため聞いておかねばならないなど。」

きりちゃんに似合ってるってだけで別に私の好きな訳では無い。それにスク水の品揃えを普通の店に期待するのは間違ってると思う。

少し半笑い気味に冗談めかしているような口調とは裏腹に、その瞳はすさまじいほど真剣でこちらの意を読み切ってやろうという覇気が見えた。恐らく少しでも瞳をそらしたら最期、きりちゃんの中で私はスク水愛好家と決定してしまうのだろう。

……私にはっこり笑って、そんな趣味はない。と断言した。

「そうですか……. そうですか? …… 本当に? 別に私はゆかりさんを貶めようと何てしていません。安心して、性癖を暴露しても大丈夫ですよ? 受け入れますから……. ね?」

……. ね? じゃない。優しげな表情をするんじゃない。

だから、私に、そんな趣味は、無い。

更衣室で謎の見詰め合いタイムを過ぎた後、きりちゃんは無事にこの前購入した水着を着用してくれたのだが……. 何故かちよつと残念そうだった。何でだ。

「そりや、ゆかりさんに私が有利な属性が無いのは残念ですよ」

むすつとするきりちゃん。…なるほど。…なるほど？

いや、スク水属性が無いことを不満に思われても困る。

「…まあ、ゆかりさん趣味の水着も着れて、私が選んだゆかりさんの水着も見れたし、良しとしましょう。ふふつ、水着姿なゆかりさんもきゅーとですね！…だけど、何ででしょう、普段着のほうがエロさは高いような気がします。」

失礼な。確かにちよつと露出が高い服を普段着にしているかも知れないが、至って健全な服だ。…きりちゃん、そんな不思議そうな顔しないで。

「えー…まあ、いいでしょう。ゆかりさんのエロさは今に始まったことでは無いですし。…さて、着替え終わりましたし、まずはプールに潜って見ましょう！」

エロくなんて無い…

まあいいや、プールを目の前にした炎天下でする話じゃ無い。気持ち切り替え、ゴーグルを付け、2人して水底に沈んで…特に何をするでも無く、息が苦しくなったら水面に顔を出した。

：： 何をしているのかと言うと、日差しを受け続けていた体を冷ますのと、

「ゆかりさん！水の中冷たくて気持ち良くて、それにキラキラ輝いてて、とっても綺麗でゲームと一緒にでしたね！」

きりちゃんの言う通り水中の風景を楽しんでいたのだ。

別に普段からそんな習慣があるわけではないのだが、つい先日2人で楽しんだゲームは海の底を歩くゲームで、グラフィックにかなり力をいれていて凄く綺麗で、今日のプールで一緒に現実の水中も見えて楽しもうとこっそり約束していた。

無論、ゲームのように海の底ではないし、そもそも実際の海底だと真っ暗になってしまいそうだが、そんな無粋なことなど気にならないほどに、冷たい水は気持ちよくて、きらめく日の光とゆらゆらと揺らめく水中が綺麗で、事前のゲーム補正もあつてか、2人して大満足な光景だった。

「ふふふ、ゲームだったらあの隅らへんにアイテム落ちてそうですね。あつなるほど。そっちはセーブポイントがありそう。」

一緒に一通りゲームを楽しんだ私ときりちゃんの感性は通じるものがあるらしく、現

実がゲーム空間だったらあるだろう様々な物を妄想して、流れるプールに流されながら水中を楽しんだ。

：． なお、水着に着替えてすぐに楽しみにしていたプールに特攻した私達は、何も言わずにいなくなってしまう上に大体水中にいたことで見つけにくかったらしく、マキさん達に怒られることとなった。

見つかつた時、いつも通り手を繋いでいたこともあいまって、恋人同士の逢引とか勘違いされかけていたので慌てて弁明したが、そもそも一緒にゲームをしていないと説明しづらい事をしていたので上手く伝わらず、結果的に『私ときりちゃんでしか分からないことを水中でこっそりして楽しんで（ラブラブ）していた』と言うことになった。言葉にして無いが4文字の副音声は聞こえた。

：． きりちゃん、頬を赤くしてくっつかないで、勘違いを加速されちゃうから。

その後は6人揃ってプールを遊びまわったが、その中でも特にウォータースライダーが一番楽しかった。

きりちゃんの年齢だと保護者同伴が望ましいらしく、きりちゃんをうしろから抱えるような形で滑ったのだが結果的に質量が増えていつも以上にスピードが上がったのが、いつも以上に楽しめた要因だったのかも知れない。

子供じゃなくても2人くつついてスタートするのは問題ないらしく、途中から2人組みを私達含め3個作って競争したりした。体重的に負けているはずなのだが、スピードをあげるための様々な工夫が功を奏しているのか戦績は勝ち越すことができた。

「ゆかりさんっ！ドキドキしますねー！」

スライダーの先で水しぶきを上げ、何度目かのダイブを終えると同時に告げられた、きりちゃんの言葉に肯定を返す。

実際に例年よりも楽しい。同時に出発するメンバー達に勝つために抵抗を減らす体勢を考えたり、スタートダッシュになる手の動きをあわしたりと、きりちゃんとの協力プレイに通じる楽しさがあった。

そんな風に思っていると、繋いでいたきりちゃんの手腕を引かれて顔がきりちゃんに近づく。

そのままきりちゃんは私の耳に口元を近づけて、こっそり囁いてきた。

「ふふっ…それが恋ってやつですよ…!!」

顔を離してニヒルに笑うきりちゃん。相変わらずな、きりちゃんの様子に苦笑が微笑みに変ってしまふ。

その後も皆んなで競争して楽しみ、通算できりちゃん曰く恋に10回ほどは落ちるこ
ととなり、その日のプール行事を終えた。

「すぴー、すぴー」

……なお、きりちゃんに囁かれていた場面は他のメンバーにしつかり見られてい
たらしく、視点の関係でキスをしていたなんて疑惑が上がっていたのを知るのは、帰り
道だった。遊び疲れて眠ってしまったきりちゃんの頭を膝に乗せた私は、追及から逃げ
ることができずに散々いじられることとなった。

☒ きりたんなIAさんと、ゆかりさんときりたん【番外編】

「ねえねえ、ゆかりちゃ…さん。いつも通りに遊ぼ…ましよう？」

結月家、ゆかり部屋に、2人の人間がいた。

1人は私、部屋の主な結月ゆかりで、もう1人は東北きりたん…に変装しているつもりなIAさんだ。

慣れない丁寧語を使い、頭に包丁の髪飾り（布製）を付けて、どこから引つ張り出したのか巫女服的な和装の彼女は、急に我が家に訪れて自身を東北きりたんだと言い張り、現状を処理できない私を置いて部屋に押し入ってきたのだ。

「あつ、それとも…エッチなこと、しちゃう？」

IAさんが何故こんな暴挙に出たのかは直ぐに判明した。今もしているように時折私に誘惑？的な行動をしつつ探るような瞳を向ける彼女は私を”試して”実態調査をしているのだろう…私が小学生に手を出しているのか。

ちよつと変わつていてたまに突拍子も無いことをしだす我が親友は、何か服の裾をチラチラめくりながら少し恥ずかしそうにして恐らくこちらを誘惑していた。その様子はきりちゃんが普段見せる”小さい子が必死に大人びている”様な微笑ましさと残念さを想起させる。

とは言え、きりちゃんよりも成長している肢体で、そんな行動を見せるIAさんの様子は、無垢な表情もあいまつて男性が見ればたまらないエロさをかもし出しているのだろう。：： 無論、同じ女性で幼馴染ともいえるほどに付き合いが長い私には無効化されているが。

とりあえず、きりちゃんは小学生だからそういう事したらダメだよと告げる。：： 多分これで良いのだろう。

「そつか、うん。そうだよね。きりたんちゃん。：： じゃなくて、私。：： は小学生だもんね。エツチなのはダメだよね。：： 信じてたよ、ゆかりちゃん！」

断ると瞳を輝かせウンウンと頷くIAさん。信じている人は変装までして人を試そ

うとはしなと思う。

そしてIAさんが頷く頭の動きに、変装用の髪飾りは即席だったためか外れかかっていった。

いや、私もあの包丁がイマイチどういう原理でくっ付いているのか分からないけど…… たまにピコピコ動いてるし。きっと魔法的な接着方法なのだろう。

なんて事を考えつつ、プラプラ取れかかっている髪飾りを取り除いてあげようと頭に手を伸ばすと、IAさんはピクリと体を震わせ、目を丸くしてこちらを見つめてきた。

「…… あっ」

その様子に思わず近づけていた手を離すと、罪悪感に胸が締め付けられるような声を上げるIAさん。

手を右に動かすと瞳も右に、左に動かすと左に。IAさんの瞳は私の手の動きに合わせて動いている……。なるほど。

「… んっ、 んっ。 えへへ… 役得、 役得」

恐らく求められているのだろう頭へのナデナデをすると、満足そうな笑顔。 どうやらこの対応で合っていたらしい。

と言うか以前みんなの前できりちゃんを撫でてから、2人つきりになると”私も撫でて欲しい”と他のメンバーにも度々求められていたので察することができたのだろう。

意外にもリピーター率100%なので、そんなに気持ちよいのかと自分で自分を撫でてみたことがあったが、自分自身ではダメなのか、全く良さが分からなかった。

「流石はましよーの手… これで、きりたんちゃんも毒牙に… うみゆ」

何だか失礼な言葉が毀れていたので思わずほっぺ辺りも揉みこむように撫でて言葉を途切れさせる。 くすぐったそうにしているが、IAさんは特に抵抗せずに身を任せていた。

それはそうと人によってほっぺたの感触は違うのだと感じた。モチモチな柔らかさは少ないが、サラサラな肌さわりにあの娘とは違う触り心地を感じ取ってしまう。誰と比較しているのかと言うと…

「ゆかりさん？ずいぶんと楽しそうですね… 浮気、ですか？」

そう、たった今声をかけてきた東北きりたん、きりちゃんだった。きりちゃんはいつの間にか私の部屋のドアを開けて、ジト目で、私を咎めるような声を上げていた。悪いこと等全くしていないのに、何故か冷や汗が背中を伝った気がした。… えーと、何でここに？

「IAさんから連絡が入ったんです。」ゆかりちゃんのナデナデを借りるかも” って。なんだその怪文書。そんな思いをしつつIAさんを見ると、

「だってゆかりちゃんのだナデナデはきりたんちゃんのものなんですよ？だからちゃんと事前に断ったの。」

筋が通っているような筋違いのような返答をするIAさんはムフーとドヤ顔をして

いた。きりちゃんが以前告げていた所有物宣言を真剣に受け取っていたらしい。

思わず抗議として、IAさんの額に指をグリグリしてみる。IAさんは鳴き声のような声を上げて眉根を潜ませた。とは言え、口元が笑っている様子は全く反省していないようだった。

「そこーいちやつかないで下さい!!それで連絡を受けて家から急いで来てみたら…:どつかで見たような巫女服っぽい服なんか着させて!そういうプレイなんですか!?!ゆかりさん巫女フェチだったんですか!?!それならそうと言ってください、これからは部屋着や寝間着も和装にしますからね!!!」

「えっ、そうなの?ゆかりちゃん。」

きりたんの謎な追求に、心から驚くIAさん。いやいや、その服はIAさんが勝手に着てきたんでしょうに。

「あつそうだ。今、私はきりたんちゃんだったんだ。」

「へ？IAさんが私？何を言って…」

IAさんの謎の言葉に目を点にして聞くきりちゃん。うん、それだけだと意味不明だよね。

「えつとね。ゆかりちゃんが、きりたんちゃんにエッチなことをするのは年齢的にダメでしょ？だから私がきりたんちゃんになって…」

「ゆかりさん！幾らなんでも親友に恋人のコスプレをさせてエッチしようなんて高度過ぎます!!いくら私が幼くて手を出しづらいとしても!!」

続くIAさんの言葉に、さえぎるように叫びだすきりちゃん。違う、ちよつとまって。

「あつそうか。私がそうやってゆかりちゃんのエッチな衝動を解消してあげれば…」
「あー！やつぱり浮気！」

ボケにボケを重ねる、あまりにも早すぎるボケの応酬…私じゃなければ見逃しちゃうね…なんてネタに走りそうになるほどトントン話しが進む2人。誰か止めて。いや、この2人以外に私しかいないから、その誰かは私がしなきゃいけないのか。

「なるほど」

何とか理解してくれたのか、無駄にハモって納得する2人。それ自体は良かったけど、話しの途中で何故か対抗心を燃やし出したきりちゃん和IAさんに、ぎゅーぎゅーくつつかれ、競い合うように腕を取られて中々話しが進まず大変だった。

「じゃあせつかく3人集まったし、一緒に遊ぼつか?」

「あつ、いいですね。それじゃあ家に連絡してから:。急いで来たから家にスマホ置いてきちやいました。ゆかりさん、お電話借りますね。」

そう言つて部屋を出て、固定電話がある居間に向かうきりちゃん。きちんとお家に一報をいれる様は、相変わらずとっても良い子だった。

「ふふ、きりたんちゃんも、ゆかりちゃんもとっても良い子だね。」

その様子にほんわか笑うIAさん。きりちゃんは同意するけど、私まで良い子扱いされた。IAさんと私は同じ年のはずなんだけど。

そんなぼわぼわした空気の中、おもむろにIAさんは私の両肩に手を載せ、体重をかけてきた。

ゆっくりとした動作、けれども脈絡が無い行動に私は座っていたベッドに押し倒されてしまう。

…
えっ？

「でも、2人共良い子だから、純粹だから、心配だな…。」

憂いを含みつつもじつとこちらを見る瞳、そんな今までに見たことが無いIAさんの

表情に、思考が止まってしまふ。

「ねっ、ゆかりちゃん。小学生に手を出すのはいけないこと、なんだよ?」

私に覆いかぶさり、目と鼻の先ほどに顔を近づけ話すIAさん。急激な状況の変化に頭がからっぽになり、うまく返答ができない。

「だからね、さつき話しにあったけど、エッチな事したくなったら… 私に言ってね?きりたんちゃんの代わりに、してあげるから… 分かった?」

滑舌が良いとは言えない彼女の言葉は、それ故に一音一音をしっかりと聞き取り言葉にして耳に残る独特な波紋を響かせる。頭に響くIAさんの言葉と、至近距離にある真剣な表情に吞まれてしまった私は、身をすくませて”はい”と頷くことしかできない。

その返事を聞いたIAさんは先ほどまでの怪しげな雰囲気を消し、いつもの純粹な笑

みを浮かべた。思わずほっとするが、何か変な言質を取られてしまった。いや、効果を発する機会は無さそうだから別にいいけど。

「ふふつ、約束だよ?…うん。やつぱり、ゆかりちゃんも良い子だね」

先ほどとは違い、逆に頭を撫でられて、ぎゅうつとされてしまう。…うん、やつぱりナデナデの良さなんて分からない。だってこんなに頬が熱くなって、心臓がドキドキするほど恥ずかしいし。

その後、きりちゃんが戻ってきてきて3人でゲームをすることに。その日は夕飯も食べてもらって我が家にお泊りすることになった。まあそれはそれとして…

「… ゆかりさん。何だか全身から、さっきはしなかったIAさんの香りがするような気が… あっ！目を逸らしましたね!! やっぱり浮気ですか!?!」

「ごめんねーきりたんちゃん。さっき、押し倒してぎゅーってしちやった。」

「ええ!?! 押しっ、押し倒して!?!」

「ふふっ、こうやってぐーっとした後にぎゅっとしてね…」

「まっ負けませんよ!?! ゆかりさんにマーキングするのは私です!!」

ゲームを始めて早々に先ほどのやり取りがバレて、2人がかりでもみくちやにされてしまうのだった。

☒悪女なゆかりさんに、貢ぐきりたん

「ゆかりさんに貢ぎたいです。」

外は猛暑なので部屋にこもり、クーラーをつけつつゲームをしているのは私ときりちゃん、通称ゆかきりコンビ（とネットで呼ばれているらしい）だ。

冷房は少し冷え気味な26度に設定にし、きちんとお腹が冷えないようにタオルケットをかけてゴロゴロしていると、すぐ近くにおいてタオルケットを共用しているきりちゃんの口から唐突にヤバい言葉が発せられた。

「どうやらユカリと言う奴は小学生に貢がせるヤバいやつのようだ。私は平凡な一般人なので、きっと住む世界が違う、危険人物なのだろう。だから私はその人物について考えることを放棄した。」

「ゆかりさん、聞いてますか？ゆかりさん…… あっそうか。ちゅーをこそ望なんです。眠り姫を起す的な意味で。」

呼びかけられ、揺さぶられる。そういえば私の名前もゆかりだったけ…… 現実逃避に失敗してしまった。

瞳を閉じて嬉しそうに近づいてくる、きりちゃんの両頬をほぼ無意識にキャッチし、むにむにとする。

「んひゅ、にゅふう…… えへへ。あっ、目の焦点がやつと合いましたね。ダメですよ。妻が夫を無視するなんて家庭内不和の切っ掛けになっちゃいます……。それで何か欲しいものありませんか？ずん姉さまに相談すれば、簡単に予算が下りると思いますので。」

頬をもみもみされて、変な声を上げつつ満更でも無さそうなきりちゃんは手を離すと何事も無かったかのように色惚けた後にキラキラと瞳を輝かせて続きを話す。

至近距離で輝く瞳が眩しいから、今はサングラスが欲しいかも。

から、大丈夫なんです！」

あんまり考えなしに発言した私の自称に乗ってくるきりちゃん。腕の内側に入り込んで猫のようにスリスリしてくる仕草も相まって、何か妹属性に目覚めそうになりつつも、貢ぐ対象がどうのこうのな問題では無いとツツコミをする。

「んー。でもゆかりお姉ちゃん、私が渡した誕生日プレゼントの手袋とか大事に使ってくれるじゃないですか。ドラマの悪い人とは違います。でも最近は着けてくれないのが何だかモヤモヤして…。ゆかりお姉ちゃんが私のものだって印を付けたいと言いか、同じくらい喜んで欲しいものを渡したくなつたと言うか…。よく分からないけど、ゆかりさんに、いっぱいいっぱい、ご奉仕したいんです」

謎の衝動を燃料にメラメラと燃えるきりちゃんの瞳…。いやまあ、確かに誕生日に貰った手袋、凄いい気に入ってたけど、猛暑の中でも装着するほど狂氣的な執着を向けてるわけではない。

現在、手袋は来冬に備え押入れに眠ってもらっているが、きりちゃんの話聞いてい

ると私の所有者を示す首輪のように思えてしまった。

まあ、きりちゃんは変に偏った知識を持っている上に、その場のノリで話してしまう悪癖がある。だから言葉よりも内心はかなり純粋な善意なのだと分かっている…。分かってはいるのだが……。うん、まあ気にしないでおう。

「もちろん、お金だけで繋がっている関係になっただけ寂しいですけど…。お金で関係を補強できるかもって思っちゃったんです。多分、私の恋心が好きな人につくしたいって気持ちになってギョングン燃えちゃってるみたいなんです…。ね、ゆかりお姉ちゃん。私を幾らでも引き出せる都合の良いATM的に、思う存分使ってください…。いふあい、いふあいです」

瞳を揺らして息を荒げながらいつもよりも強く私を抱きしめて不穏なことを話し出した、きりちゃんに制裁を与えるために両頬を先ほどよりも強めにぐにぐにする。

って言うかそのATM、バックにいる東北家と言う大銀行に私自身が担保に取られる気がするから遠慮します。そもそも、きりちゃんと一緒にいるのは決してお金目当て

なんかじゃ無いから、冗談でもそんな風に言われるのは不満だ。

「つ、つまりお金じゃなくて、小学生な私の体をご所望ってことですね。ふふつ、ゆかりさんはエッチなロリコンさんで……いう、ちよつと痛いですが、冗談ですつてば!？」

年相応なかわいい表情をしつつも、懲りないきりちゃんのコメカミに握りこぶしでぐりぐりする……所謂うめぼしという制裁を行った。冗談だつてことは通じてるけど、教育に悪いのでアウトです。

「むう、ゆかりお姉ちゃんは酷いです。他の人ならともかく、私はお姉ちゃん大好きなんですからね。例え痛みでも、してくれるのが嬉しくて癖になっちゃったらどうするんですか!……それで話を戻しますが、欲しい物、ほんとに何かありません?」

若干涙目のきりちゃん。割と本当にこちらを責めるような視線に言葉が止まってしまふ。あつあれ?私が悪いの?

なんて躊躇してると、話しが元の路線に戻った。罪悪感を刺激された直後の話題転換に思わず受身になって、欲しいものを思案してしまっただが……そんな思考を中断する。

いくらお金持ちとはいえ、誕生日とかでもなく、何も無いのに小学生の友人に奢ってもらうつもりは無い。だから断ろうとしたのだが……ふと、あることを思いつき、それなら近くのでパートで、服が欲しいと伝えた。

「おおっ、任せて下さいー！」

ほくほく顔を私の胸にぎゅーぎゅー押し付けるきりちゃん。きつと私に貢ぐ薔薇色の未来で頭の中はいっぱいなのだろうか……残念ながらかわい妹妹分をそんな退廃的な悪の道に進ませるつもりなど毛頭ない。喜ぶきりちゃんから見えない角度で、私はニヤリと笑った。

くデパートへ移動中く

「え!? 私がゆかりさんの服を決めていいんですか!? そつそれなら、もちろんエツチな服とかでも構いませんよね!」

デパートに到着後、お姉ちゃん呼びのブームは過ぎ去っていたようだった。少し残念に思いつつ、きりちゃんに私の服を決めて欲しい旨を伝えると、欲望に染まった瞳と言葉を向けられた。

恐らく一般的なデパートの品揃えでは、今のきりちゃんの要望に答える品揃えは無いと思うが、もちろんエツチなのはダメだと牽制しつつ普段着る普通の… いわゆる普段着を買ってほしいと伝える。

代わりに私もきりちゃんの服を買ってあげるからと付け加えつつ。

「えっ、ゆかりさんから買ってもらえ… あっ、で、でも、それじゃあ私が貢ぐことに

ならなくなっちゃいます…。」

思わず私の提案に飛びつこうとしたきりちゃんだが、当初の目的が破綻することに気づき躊躇している。

そう、私の考え付いたことは、きりちゃんにもプレゼントすることで一方的な“貢がれる”なんて状態を阻止しつつも、服飾に無頓着なきりちゃんに服を買ってあげると言う、一挙兩得の作戦だったのだ。小学生と折半って微妙だけど、きりちゃんの持つてるお金はずん子さんからもらったお金だから問題無いだろう。

それにこの娘、割と着ているものには無頓着なのか、出会って半年経っても普段着のバリエーションは数着しかない。

たまに『働いたら負け』とか書いてあるネタTシャツをドヤ顔で着て、私をチラ見するツツコミ待ちだったりするがそれは別として、年頃の少女としてはどうなのかと思っていたのでちやうど良かった。

「え、えーと…」

目をぐるぐるして悩むきりちゃん。ゲームなどでは的確に即断即決をする手腕を持つているが、恋愛事情になるとやはり勝手が違うのだろう。恋なんてしたことないから想定しできないが。

まあとにかく、後一押しで転がってくれそうなので、その小さな耳元に悪魔…では無く真人間への道を示す天使な囁きをする。

きりちゃんに、“私”が選んだ服、着て欲しいな。

「きつ、着ます！喜んで！！私、ゆかりさんの色に染まります！！」

この娘のツボは大分知ってしまったので、きちんと重要部分を強調しつつ囁くと、あつけないほど上手く行った。

目をグルグル回しながら感極まってこちらを抱きしめるきりちゃんをあやしつつ、私は計画通り……的などつかの神（笑）風な表情をこっそりする。

……何だか本当に昼ドラに出てくる悪女のようにだと自覚してしまった。まあ進ませているのは真つ当な道のはずなので大丈夫だろう。

「えへへ、ゆかりさんのプレゼント。。。それにいっぱい試着して、楽しかったですね。」
最終的に互いの服を購入してプレゼントしあい、ついでに今度みんなプールに行くつもりだったので水着も買った。たりした。

吟味に吟味を重ねた互いへの服は、渡すのも貰うのも嬉しかったが途中経過の着せあいつこも凄く楽しくて、買い終えた後も服を着る未来の日々を楽しみに語りながら、きりちゃんと手を繋いで一緒に東北家に帰宅し、この日を終えた。

☒三姉妹になりたい琴葉姉妹と、ゆかりさんときりたんと、ちよつとだけずん子さん【ずんぱ記念】

「それでな、葵と話し合ってたんや。苗字はどっちになるのかなーって。」

「結月きりたん、東北ゆかり：。どっちもかわいいですよ。でも東北家の方々のゆかりさんを見るヤバ：。情熱的な視線的に、多分ゆかりさんが嫁入りかなって」

その日、東北家でずん子さんときりちゃんと琴葉姉妹で遊ぶ約束をしていた私は、手ぶらでお邪魔するのもどうかと思ったので、琴葉姉妹と雑談しつつ近くのコンビニでオヤツを買いにきていた。私のコミュニケーション能力が及ばず、雑談の内容は変な方向に進んでしまっているが。

会話の内容を変えたい所なのだが、修正しようとしても姉妹のコンビネーションはさまざま、気づいたら私ときりちゃんについて話している。

この姉妹、東北姉妹とは別方向に姉妹仲が良く、2人以上の力が無駄に発揮される。力を合わせることで単純な足し算以上の力を発揮すると言う、少年漫画でよくある

やつだが…… 残念ながら私はそれを受ける側だ。友情パワーでパワーアップする主人公勢を見る敵キャラ視点つてこんななのだろうか。

…… しかし会話をしているところの姉妹、本当に阿吽の呼吸だと改めて思う。テレパシーでも使いあっているのかと思いが横道にそれていると、

《ゆかりさんっ、ゆかりさんっ…… 聞こえますか？》

本当にテレパシーが頭に響いた。

何だか凄い聞きなれた小学生女子の声な気がしたが、きつと幻聴だろう。

しかし、響いた声にとっさに脳裏に思い浮かんだ親友は、弾んだ声の調子も相まって瞳をキラキラさせた楽しそうな姿で、思わず口元が緩む。

「んーお菓子、どれ買おうか悩むなあ…。ゆかりさん、きりたんとずん子さんはどれが好みなん？知り尽くしてるよな？…。ゆかりさん、何か良いことでもあったんか？」

「ゆかりさん？ニヤついちゃつてどうしました？…。もしかして、きりたんちゃんのことですか？大丈夫ですよ。ゆかりさんが選んで上げたお菓子をあーんして上げたら、きつと喜んでくれますよ。」

両隣から覗き込んで微笑みかけてくれる2人。…。うん、頭に響いた声は空耳もしくは幻聴として気にしないでおこう。2人の会話を聞くに私の風評被害は思ったより深刻そうだし。これ以上悪化させたくない。

《ゆかりさん、貴女の愛しの恋人…。きりたんですよ！》

しかし無常にも頭に響く声は続く…。ああ、うん。幻聴とか空耳とかじゃないや、これ。

恐らく頭の髪飾りをピョコピョコ動かしながら嬉しそうに告げる声の主は、明らかにきりちゃんだった。多分、テレパシー的な魔法を使えるようになって、さつそく試して

いるのだろう。いつものパターンだ。だけど、周りに人がいる今はやめて欲しい。

「へっ？きりたん？」

「ゆかりさん。きりたんちゃんはお家でお留守番ですよ？…もう少し我慢できませんか？」

思わず、きりちゃんという言葉を口から零し、2人に聞かれてしまった。何のことだか分からなくて呆けている茜さん。そして困ったように眉根をよせて、まるで私がきりたん欠乏症にでもかかっているかのように話す葵さん。思わず口元が引きつる。

《あれ？繋がってませんか？音量が足りないのかな？…でもあんまり大きく伝えると、ゆかりさんの脳がパーンって…》

何かテレパシー先からやばい事を言い始めたので、急いで返事をする。聞こえてるよ、きりちゃん。

「：： あかん。葵、ゆかりさんが脳内のきりたんと会話し始めたで。：： 手遅れや。」
「うん、お姉ちゃん。分かってたけど末期だね。でも幸せは人それぞれだから。」

気の毒そうと言えば良いのか、微妙な表情でコソコソ話し合う2人の誤解を解くべく、何とか現状を伝える。いや、頭の中にきりちゃんの声が響いて。：：

「：： うん。分かってるでゆかりさん。大丈夫や、帰ったらすぐにほんまのきりたんがいるからな。それまで我慢やで」

「：： おねえちゃん、ゆかりさんは先に帰って貰って、きりたんとイチャイチャしてもらった方が良いかもしれないよ？」

《良かった、繋がったんですね！あつ、そうだ。コホン、：： ファミチキください。》

天然の茜さんと冷静に心配してくれる葵さんからの、私の心の病への深まる疑惑。そして思い出したようにネタを付け足すきりちゃん。全員親友で味方で、好意的に接してくれているはずなのに、何故か私は追い詰められていた。コミュニケーションって難しい。

それと残念ながらローソンなので、ファミチキはありません。

「ファミチキ？もしかしてきりたんが欲しがってるんか？ゆかりさん分かるんか？」
「お姉ちゃん。いくらゆかりさんでも…いや、ゆかりさんならありうる、かも？」
《ゆかりさん、くっこいつ直接脳内！？って返さなきゃダメですよ。ネタ的に。》

真剣に悩み始める2人にダメ出しをするきりちゃん。色々面倒になった私は、ファミチキはきりちゃんのお冗談だから気にしないでと言いつつにっこり笑って面白い物を再開する。困った時こそ笑顔だ。タイトル忘れたけど漫画か何かで言ってたし…。恐らくこの場で根本的な誤解を解こうとしても無理なことは分かったからさっさと面白い物を済ませて帰ろう。

「そっか。冗談を言えるほど、脳内きりたんは成長してるんやね。」
「しっ！お姉ちゃん。あんまり否定しちゃダメだよ。とにかく話を合わせて、現実のきりたんちゃんに早めに合わせなきゃ…。大切な友人の危機だから、ここは姉妹のコン

ビネーションで乗り切らなきゃ…!!」

《あつでも本当にファミチキ買ってきてくれても、もちろん美味しく頂きますよ!…
できれば、ゆかりさんにあーんして貰いたいなあなんて…… えへへ》

笑顔の解決力への無茶振りが過ぎたようだ。何か勘違いして燃えている琴葉姉妹と、色惚けているきりちゃん。

私は全員無視してきりちゃんとずん子さんが美味しそうに食べているお菓子を思い出しつつ買い物籠に入れた。その迷いの無さに琴乃葉姉妹に流石はゆかりさんと褒められた。

「ゆかりさん! テレパシーの新魔法どうでしたか!?! 待っている間ずん姉さまに教えてもらって頑張って覚えたんです。褒めてください!! ふっふっふ、これでいつでもラブラブ

な会話を・・・」

「あー。本当にテレパシーやったんか。勘違いしてもうた。ごめんなあ、ゆかりさん」
「・・・あの、すいませんゆかりさん。私も、失礼なことを言ってしまった。」

コンビニからの道中、私がきりちゃんを求めて急に走り出したら危ないと手をそれぞれ琴葉姉妹と握って歩くことになった。気分は捕獲された宇宙人だった。

そして歩きながら琴葉姉妹と・・・テレパシーを相変わらず発し続けるきりちゃんと
の会話を続けた。何か気を使ってくれているのか、琴葉姉妹は私経由で話題を（この場
にいないはずの）きりちゃんにもふっつけて私にきりちゃんに聞いて琴葉姉妹に答え
る・・・なんて黒歴史的な会話をするはめになった。

きりちゃんとの会話中に両側から向けられる視線は、何というか、かわいそうな人を見
る目だったので、東北家に着き、きりちゃんが玄関に登場して早々に自白？自供？し
てくれたおかげで何とか誤解を解くことができて本当に良かった。

状況が分からずはしやぐりちゃんとは対照的に、思ったよりしゅんとして反省している琴葉姉妹。気分を持ち直して欲しくて少し俯いている姉妹の頭を撫でてみる。：対処方法がきりちゃん向けだが、私の交友関係全般に何故か通じるから問題ないはずだ。

「あつ：： やつぱこれ、気持ちええなあ」

「：： うん。この前耳かきしてもらった時もあったけど、ほんと魔性の手だね：：」

「あつ、あつ、ゆかりさん！私も！！私も撫でて下さい!!!」

撫でると思惑通り表情を緩めて声もゆっくりに落ち着いてくれた。残念ながら私の手は2本しかないのです、きりちゃんはお預けだ。：別にテレパシーを乱用されて可哀想な目を向けられた腹いせなんかでは無い。決して。

「やつぱゆかりさん、うちにも欲しいなあ：： なあなあ、ゆかりさん。琴葉つていい苗字だと思わへん？今なら長女の座は譲つて：：」

「琴葉ゆかり：： いい感じですね。東北家と同じ3姉妹になってバランスも取れます

し。」

「東北！東北がいいと思います!!」

この後、部屋で待つずん子さんを仲間にしたきりちゃん、琴葉姉妹の壮絶な戦い（ゲーム）が始まるのだった。

「うーん、それじゃあ全員でゆかりさんに嫁入りして【結月】姓になるのはどうでしょう？」

「「それだ!」」

収集がつかないような場面で、ずん子さんが天使のような微笑で冗談を言い、有耶無耶にしてくれたおかげでその場は収まった。だけど解散する際、ずん子さんは後ろから

近づき私の耳元に…

「言質、取っちゃいましたからね」

何てそつと囁かれた。ホラーじみた囁きに背筋がぞくりとして振り向くと、ずん子さんはいつものものように微笑んでいた。

☒ ベットの上で汗だくになりながら互いの体をいじり合うゆかりさんときりたん。

「……はあつ、はあ」

2人っきりの部屋、ベットの上で向かい合い密着する私ときりちゃんの荒い呼吸音が響いていた。

「んっ、はあ……」

私は向けられる熱に潤んだ瞳に急かされるようにきりちゃんの服をはだけ、服の内側、熱を持った肢体に手を挿し入れ、撫で回す。湿った感触を擦るように動かす手はぎこち無く震えてしまい、いつものように自然に動いてくれない。

「あつ、あつ……気持ち良い、です。」

そんな拙い私の手の動きを素直に受け入れて、身を任せて気持ち良くなってくれるき

りちゃんに、思わず頬を緩める。

ずん子さんが用意してくれベツト脇に並べられた様々な道具のおかげで、これからする行為の準備は万端だった。私はそのまま最後までしてしまおうと思っていたのだが

……

「私だけじゃ、ダメです。ゆかりさんだってこんなに、ぐっしより濡れてるじゃないですか……」

きりちゃんの両手がそつと私の腕を止めた。

そして所々隙間が空いてだらしなくなっている服の裾から進入した、幼く小さな手は私の体を這い回る。同じように震える手は気持ちよく、その気持ちを正直にきりちゃんに伝えると嬉しそうに微笑んでくれた。

そして先ほどまで私が握り、今はきりちゃんに押し付けられている熱いものの正体は……

暖かい”おしぼり”だった。

「……うん。普段おしぼりなんて使いませんが汗が消えて気持ち良いですね。あつ、先に飲み物貰っちゃいますね。」

それで互いの汗をふき取った私達は、ずん子さんが準備してくれていた替えの服に着替え、飲み物に順番で口をつける。

着替えに、保温性の容器に入れたおしぼりや、タオルも全て2組つつ用意してくれたずん子さんにはとても感謝している。……なぜか飲み物だけ一つしかない上に《バカツプルが使うような2口ストロー》が横に置いてあるのは、いつものずん子さんの悪い癖だろう。いつの間にこんなものを買ったの知らないが、先に見つけたおかげできりちゃんが目が届かない場所にサツと隠すことができた。

ずん子さん、こんな感じでちよいちよイタズラじみたことをしてくるが、私達の関

係進展のために色々アシストしているつもりらしい。ただ、今回含めずん子さんにはお世話になってるし本人的には悪意は無く基本無害なので、だいたいスルーしている。

「ふー。すつきりしました……もうお昼ですね。お昼ごはん食べましょうか……あえ？熱のせいとか、立ち上がるだけでもフラフラしますね。普段なら……あれ？普段、私どうやって起き上がってましたっけ？」

飲み物を飲んでいると先に立ち上がったきりちゃんがフラフラして、何やら普段の起床時の記憶が思い当たらないきりちゃんの様子に釣られて普段の起床時を思い出してみた。

……あつ。

普段は夢うつつのきりちゃんを抱き上げながら起きて、洗面所まで向かってるんだつた。最近起き上がる動作なんてして無いきりちゃんが、思い出せないのも至極当然だった。

「……あつ、あー。……なるほど。」

無意識で行うほど当たり前となってしまうていた行為、そして何時もよりも肌寒くて腕の中が物足りない自分を自覚してなんだか恥ずかしさを感じしまう。

それは結果として赤くなっている頬を互いにさらに染め合うことになった。

……話しを、切り替えよう。

さて、ここまでの流れで分かるかと思うが、私ときりちゃんは2人揃って風邪を引いてしまっていたようだった。冒頭の文章でエロい事を妄想した人はスクワットでもして……私は誰に語りかけているのだろうか？ どうやら頭がボーっとして変な思考をしてしまったようだ。

そのまま何となく、事の始まりである今朝の出来事を思い出す。

「体、だるいです……ゆかりさんも、ですか？」

朝、ほとんど同時に目を覚ますと頬を赤くしてぼーつとしているきりちゃんが視界に入り、同時に自身のだるさに気づき、互いに風邪を引いてしまったのだと分かった。

……まあ最近は生活リズムが完全に一緒に、寝ている時間を含めると一日の半分以上傍にいるから、同時に風邪を引くと言うこの結果は、ある意味当然なのだろうけど。

「……ずん姉さま、あつはい。そう見たいです。」

いつも通りきりちゃんを抱き上げて……いや、そんな描写いらなかった。とにかく、何とか体を起して部屋を出た私達は、ずん子さんに相談をしようと声をかけた。

ずん子さんは私達の様子を見てすぐに察してくれたようで、熱でぼーつとしている私

達は、2人揃って汗に湿った寝巻きを下着ごと脱がされ、着替えさせられ、引つ張り出してきたチャンチャンコをさらに着せられて、冷えピタを付けられ、速攻で作ってくれたおかゆを食べさせられ、布団に入れられ、用意してくれた氷枕の上に載せた頭をナデナデされているうちに二度寝をして……さつき起きたのが昼近くの時間帯で、眠って再度汗をかいた体を互いに拭いて着替えようと、冒頭の話しに入ったのだった。

ついでに書置きによると、ずん子さんはお昼ごはん用におかゆを作り置きしてくれた上に、今日は早めに帰ってきてくれるらしい。

いっぱいお世話になってしまった。今度、何かお礼を返さなきゃいけないだろう。

「んっ、味付けもばっちりですね。流石はずん姉さま」

回想を終え、暖め直した目の前のお昼ごはんに手を伸ばす。朝食ではスプーンを掴む指が震えていることを指摘され……ずん子さんが差し出すスプーンを前に、きりちゃんとお互いに口を開けるはめになつたのだが……お昼までたつぷり寝たことで多少は快復したのか、今は手が震えずに口に入れることができた。

「……………」

普段はきりちゃんといると話が尽きないのだが、風邪で喉の調子も微妙な事もあつて会話も無く、カチャカチャと食器の音だけが響く静かな食事になった。

「…………風邪、魔法で治せなくもなさそうなんです、禁止されてるんですよ。」

そのまま食事を終えて、食器を片付けていると、きりちゃんがポツリと話し出した。

「そうなんだ。治癒魔法的なのはファンタジーの定番の気がするけど。何か訳があるのだろうか。」

「魔法で治すと言っても、原因と対処法がきちんと頭に入って無いと危ないらしいです。」

「ご都合主義的に魔法は発動してくれませんが、流石に人の体に向ける力を、それに頼り切るのも問題なので……」

言われてみると確かに、具体的にどう治すのか分かっていない力を、病で弱った体に使うのは危ない気がする。

治す能力も使い方で攻撃になりうるし。どこぞのクレイジーなダイヤモンドみたいに。まああれは”治す”と言うより”直す”感じだったけど。

「後、魔法で治しきれなかった場合、魔法の抗体を持ったウイルスなんてものが登場しかねないらしいです。」

ああ、医療の薬でも似たような話を聞いたことがある……なんて納得しつつ食器を洗い終えると、きりちゃんはいつの間にかこちらを向き、私の服の裾を掴み、しゅんとしていた。

「ゆかりさん……ごめんなさい。魔法で、ゆかりさんを守るって言ったのに……私がもつときちんと勉強したら、本当なら今頃……わっ!？」

向けられる気持ちは相変わらず純粹でまっすぐで、けれども病気のせいも、きりちゃんは少しナーバスになっているようだった。

きりちゃんの悲しそうな様子は相変わらず私の心に刺さって、風邪のせいもあつてか、それをどうにかしたい衝動を抑えることはできなくて、気づけばきりちゃんを抱きしめていた。

ついでに病床で気持ちが不安定な時に側にいてくれるから、一緒に風邪をひいて良かった的な、自分でもどうかと思う言葉を発しながら。

きりちゃんを抱きしめることが癖になっている事は自覚しているが、普段から抱きついているので仕方ないし、ちよつと抱きしめるだけで幸せそうに微笑む、きりちゃんのチヨロさが悪い。……その笑顔に釣られて微笑んでしまう私も、たいがいチヨロいのだろうか。

そのまま抱き上げ、布団に向かう。食事も終えたし、こういう時はさっさと寝て、病

気を治すにかぎる。

「……強引ですね。ゆかりさんに抱えられて、無理やり布団に連れ込まれたって、皆に言っちゃいますよ?」

部屋に入り、布団を被ると調子を取り戻したきりちゃんがニヤニヤとした表情で不穏な言葉をかけてきた。

ロリコンの濡れ衣を散々着させられている私としては、それはやめて欲しい。……先ほどまでの気持ちを考えると、「キリコン」とやらは自分でも怪しくなってきたが。

「えへへ。ゲームなら攻略可能なくらいにお互い好感度上がっちゃいましたね。……次、ゆかりさんが風邪を引いた時は、ずん姉さまじゃなくて私が看病しますね。弱っているゆかりさんを献身的に介護して駄目押しに好感度をぐぐーっと上げるチャンスですから!」

腕の中に頭を押し付けグリグリ動かして、見えないが多分ニコニコしながら話すきりちゃん。

相変わらずゲーム脳な発言だが、同じくゲーム脳の私にはきちんと伝わった。それならば、次回きりちゃんが風邪を引いた時は私が看病してあげたい。

「……これ以上、私のゆかりさんへの好感度上がっちゃうと大変なことになっちゃうますよ？ほら、何と言うか……ヤンデレ？的な方向に」

それは私が一緒にいて、矯正してあげるから大丈夫。きりちゃんが良い子に育つように、先生だから責任持つよ。

「一緒に……責任……えへへ、それなら、大丈夫、かも……です……」

抱きしめながら頭を撫でていると、きりちゃんからの返事に眠気が混じりだし、ついにはスヤスヤと眠ってしまった。

そして響くきりちゃんの寝息は催眠術のように睡眠成分たっぷりです、気づけば私も眠ってしまうのだった。

「なおこれ以降……と言うより、未来永劫、約束した『互いの看病をする』と言う機会は来なかった。

……この一文だけだと、なんだか不穏な未来を予言する言葉にも聞こえかねないが、話は単純で今後も片方だけ風邪をひくような状況になることは無かった……ただそれだけである。

☒元旦なゆかりさんとずん子さんと、寝正月へ突き進む きりたん

「あけましておめでとうございます、ゆかりさん。今年もよろしくお願いしますね。特にきりたんを。……お嫁さんの意味で」

目を覚まし洗面所に行くと、先客のずん子さんが先に顔を洗っていて、挨拶をしてくれた。

新年初日の挨拶を返答しつつも、相変わらず私ときりちゃんをくつつけようとずん子さんに苦笑してしまう。妹的もしくは友人的な意味なら、「よろしく」するねと返す。

「むう、それで当のきりたんは、まだ寝ているんですね。まあ昨日は夜遅くに起きてもらいましたし、しょうがないかもしれませんね」

昨年と同じく、年が明ける0時ちようどからマキさん達と神社に参拝するため、夜9

時前に規則正しく眠ったきりちゃんを夜遅くに起すことになった。

私に『今日は眠っちゃダメですよ』とか良いつつ、クピクピとコーヒーを口にしていたが結局寝落ちしたきりちゃん。初詣出発前に何とか起こすことができたが、半分寝ているのか終始私の服の裾を掴んでボーっとしていた。

この状態なら去年のように煩惱にまみれたお願いは無いと安心しつつ、時にはだっこして参拝の列に並んだ。

そして順番が来たのでお賽銭とお祈りを促すと、：賽銭箱ではなく私の方を向いて虚ろな瞳で私と『ずっと一緒にいたい』とか、『抱きしめて欲しい』とか色々真正面から色々伝えられる事態に陥った。友人達含む多くの人の前で。

普段の半分からかうような状態ならまだしも、真摯に想いを告げてくる言葉に、私はごまかす事なんて器用な芸当はできず、必死に言葉を返した。重ねて言うが衆人環視のさなかで。

その後、何とか納得してくれたきりちゃんは私を抱きしめて眠ってしまった。お祈りを済ませていないが、お願いは散々聞いていたので2人分まとめて私がお祈りしておい

た。まあ、似たようなお願いだから神様側で混乱するようなことも無いだろう

：．
なんて考えていたら、神聖そうな声で『その願い、受け入れました』的な返答が頭に響いた。

一瞬本気で神様に返答されたのかと焦ったが、声が頭に響くと言う手法と、聞いたことが多々ある口調に犯人が思い当たり、隣のずん子さんにジト目で視線を送った。そうすると舌をペロツと出しつつ冗談ですとか反応を返された。姉妹揃ってかわいいなチクシヨウめ：．と誤魔化されつつ、初詣を終えた後はきりちゃんを抱きしめて帰宅して、寝巻きに着替え、そして着替えさせて就寝した。

まあ、そんな事があつた故か朝起きても、きりちゃんはまだ夢の中だった。

私もきりちゃんの生活リズムに合わせて最近はそんなに夜遅くまで起きてなかった
ので、正直朝起きるのが辛かったのだが：．今日は元旦でいつもよりも朝食の準備に手
間がかかる。

それをずん子さんに全て任せるのは半分居候の身としてはできなくて、手伝うために起きて、冒頭の会話に至ったのだった。

「ありがとうございます。でも時間のかかるものは既に下ごしらえを済ませているので、後は食器に並べる事と、お雑煮を作れば準備完了です」

朝食の準備を手伝うことを告げつつ、2人して台所に向かう。

なるほど確かにチャーシューや黒豆なんかの時間がかかる煮込みは既にきりちゃんも参加してやってしまったのでそこまで大変では無さそうだ。

でも、お雑煮か……。結構家ごとに具財や味付けが異なるが、まさか東北家でやけに出現するずんだ餅を入れたり……

「いえいえ、ずんだ餅をお雑煮に入れるなんて冒流的な事はできません。色々試しましたが、ずんだ餅は生が一番美味しいと確信していますので。」

愛ゆえ、なのだろう。ずんだ餅に関しては独特の言い回しをするずん子さんと話しつつ、盛り付けをはじめ。流石にお雑煮とずんだの魔配合は無かったか。

でもやつぱりずんだ餅自体はあるらしいし、以前は色々試したらしい。まあ、ずんだ餅美味しいし良いけどね。

「ふふつ、ずんだ餅は所謂東北家のお袋の味ってやつなので、東北家に連なるゆかりさんもすっかり好きになつてもらわなくてはなりません。」

連なつてない：・と言う反論が頭に浮かんだが、何となく声にすることはしなかった。

：・ いや、何となくと言うか、まあ、多分、私は嬉しかったのだろう。

入り浸っている東北家には愛着がずいぶんとわいていて、一員として受け入れてくれることに少し口角が上がりかけている自分に気づき、恥ずかしさに少し頬に熱を持ち視線を俯かせてしまう。

「：： んー、確かにきりたんの言う通り、ゆかりさん、とつてもかわいいですね。」

そんな何とも言えない表情をしているだろう私を、ずん子さんは少しかがんで覗き込んでくる。すつごいニコニコな笑顔だった。：： くつ、やっぱり姉妹か。仕草や挙動が似ている。

「褒め言葉として受け取っておきましょう。姉妹仲は良いに越したことは無いので。：：
ね？未来の妹さん？」

「そんな未来は無い。：：」と思う。何だか断言しずらくなってる気もするが、気のせいと思いたい。

：： それに前も言ったが、ずん子さんは同じ年だから妹ってわけでは無いような。

「んー何と言うか、ゆかりさんつてきりたんと挙動が節々で似ているんですね。だか

ら何となくゆかりさんも妹に見えると言うか……」

あー、なるほど。確かにそれは自覚するところが多々ある。

そういう、ずん子さん曰くの“重なる部分”とやらが、きりちゃんと一緒に過して一緒に楽しくなってしまう要因なのかもしれない。

そんな風に納得していると、朝食の準備のついででしていた会話中に、ずんさんがキチンとこちらに体を向けて話しかけてきた。

「ゆかりさん。きりたんは：不肖の妹は、迷惑になつてないですか？」

少し真剣な表情で声をかけてくる様子が疑問符が浮かぶ。急にどうしたのだろうか。

「今も、ゆかりさんは起きて家事を手伝つてくれてるのに、きりたんは起きませんし……たまに、ゆかりさんにあの娘を勧めてよいのか、不安になつちやうんです。きりたんの想い人以前に、ゆかりさんは大切な友人ですし」

あー、うん…なるほど。

…… 少なくとも私は、聖人君子なんかじゃない。迷惑だと想ったら嫌だと言うし、その人から離れる。それをしていないって事は… まあ、そういうことなんだろう。

「そうですか… では安心して2人が恋仲になれるように今年も応援頑張りますね？」
そこは頑張らなくて良いです。満面の笑顔で今年の抱負を告げずん子さんに満面の笑顔で受け取り拒否した。

なお、これまでのずん子さんとの会話や朝食の準備中、最初から最後まで寝ているきりちゃんに私に正面から両手両足でしがみ付いていて、だっこしながらの状態だったりする。

：．．．だからまあ、先ほどの不安そうなずん子さんの気持ちも分からなくも無い。自分の妹が赤ん坊のようにくつついたまま、友人が家事を手伝ってくれたら、流石に申し訳なく感じそうだし。

私が引き剥がすことをしなかったのは、体重をほとんど消した上に最近はくつつく効果まで追加したきりちゃん魔法で負担を感じないのと、何より暖かくて私自身がきりちゃんとかくつついていたいと思えてしまったからだ。まあ形はどうあれ、私もこの娘を大好きになつていて、と言うことだろう。

そんな私の独白に感づいたずん子さんのニヤニヤ顔をスルーしつつ、私の胸に顔を埋めて幸せそうに眠るきりちゃんに、朝食ができたことと、新年の挨拶をするために私は優しく起してあげるのだった。

☒ エッチな動きをするゆかりさんと、しゃっくりするきりたん

「MMMDをパソコンに入れてみました。」

きりちゃん部屋の部屋には私用の物をいくつか置かせてもらっている。その中の一つ、私用のイスまで手を引かれるまま誘導されて座ると、きりちゃんは私の膝に乗ってそんな事を言い出す。目の前のパソコンを見ると、何も無い白い空間が映った画面が表示されていた。

MMMD：．． ああ、ニコニコ動画でよく見かけるやつだよね。

「そうそれです。それで、ゆかりさんソックリのグラフィックがここにあります。」

顔に触れるきりちゃんのサラサラな髪と、無意識に抱きしめるために回していた腕が心地よくてブーツとしていたが、画面に現れた私に正気を取り戻した。．． いや、何で？ 一般人な私のモデル何かWeb上にあるわけ無いし、まさか自作したの？

「はい。頑張りました。」

………　　そっか、頑張っちゃったか。

うーん……　　うん。頑張ったのなら、とりあえず褒めておこうかな。悪いことじゃ無いし、と頭を撫でてみる。

「えへへ……　　さらにですな！ ネット上には大抵のキャラクターにエツちな動きをさせる汎用モーシヨンのファイルもあつたりします……　　さあ！」

さあ、じゃない。ちよつと待てやコラ。

すぐに撫でていた手を止め、きりちゃんを取り押さえるが、もみくちゃになっている間に再生ボタンは押されてしまった。動き始める画面内の私。

「え……　　あつ！ ゆ、ゆかりさん、手をどけて下さい！！ 見たいです……　　私、とつても見たいん……　　ひうつ！？」

小学生にはまだ早い光景を映し出す画面を見せないために、両手できりちゃんの顔を覆う。するときりちゃんがバタバタ抵抗し始めた。両手が塞がっているので、無力化するために目の前の小さな耳にふーっと息を吹きかける。途端にビクツと反応して脱力するきりちゃんを持ち上げ、画面を見せないように私と向かい合う形に抱き替える。

そしてパソコンでなんとも言えない動きを続けている私を無事止めることができた。：きりちゃんの緊急停止、最近何だか手慣れてきた感がある。

兎にも角にも、今日も何とか多感な小学生女子がエッチな事に触れる機会を潰すことができた。：と自己満足しつつ、たまにピクピクしてる脱力したきりちゃんが再起動するまで待った。

「：ヒック、しゃ：：しゃっくりが出て：：ヒック」

無事再起動し、しゃっくりをしつつ弁明するきりちゃんによると私に止められた時点で本気で再生するつもりはなく、じゃれつく事に狙いが移ったらしいのだが、誤って指が触れ再生してしまった私の艶姿？を見たくて頭がいつぱいになって暴れてしまった

らしい。

：： まあ、きりちゃんが暴走するのはいつもの事だから良いとして、本人曰くそれが原因で何故かしゃっくりが出始めたらしい。

「ヒック、エッチなゆかりさんの前で目隠しで耳にイタズラされるなんて：： ヒック、特殊なプレイで興奮し過ぎて、ヒック、しゃっくりが：：」

しゃっくりって、そんな理由で出るものだけ？

それとエッチなのは画面の向こうの私だし、プレイとか言わないで。現実の私は至って健全だから：： まあ確かにきりちゃんとワチャワチャやってるの楽しいけど。

「いや現実のゆかりさんの方がむしろ：： まあ、いや。こんなしゃっくりの出方は私も始めてです。ヒック：： 鼻血は出てない、みたいですね。ヒック」

ペタペタと自分の顔を触って確認し、安心するきりちゃん。興奮して鼻血出す人ってほんとに実在するのか知らないけど、しゃっくりを出す人は目の前にいるし、鼻血を出

す人もいってもおかしくないのかも知れない。：：世の中って広い。

「そうだ、ゆかりさん。私を驚かして、しゃっくりを止めてくれませんか?：：ヒック」
えっ、そんなこと急に言われても：：

うーん。えーと：：

：：じ、実は私、男だったんだよ!

「ひっく。：：ナンダツター。：：あれ?でもそれなら私と合法的に結婚できますね。
じゃあ式場はどこにしましょうか?私的には神前でも教会でも。：：」

私の即興の嘘にしゃっくりとカタコトの言葉でダメだしをしつつ、妄想が花開いたらしくペラペラと話し出すきりちゃん。

性別以前に、小学生と合法的に結婚できるほど、この国は終わってないです。つて言うか、しゃっくり止まってない?

「え。：：本当ですね。ちよつと残念です。」

全然驚かせなかったけど……確か簡単な計算とかをして頭を使っても止まるって聞いたことがあるので、それで止まったのかも知れない。

そしてなぜだが少し残念そうなきりちゃん。しゃっくり止めたかったんじゃないの？

「いえ、ゆかりさん天然が入ってる所がありますから、何か私に役得な驚かせ方をしてくれそうな気がしてたのに……まさか一回目で治っちゃうなんて」

いやいや、そんなことはしな……ヒック……。あつ。

「あつ、もしかして、しゃっくり移っちゃいましたか。」

う、うん……ヒック、そうみたい。

きりちゃん、今度は逆に驚かせてくれない？ ……ヒック。

「痙攣が伝わって何かエロ……じゃなくて、えーつと急には思いつきませんね……あつそれはそうと、さつき見たら、ゆかりさんのポケモン《最初からはじめる》しかなかったですよ？ やり直すためにセーブデータ消したんですか？」

えっ、そんな!?

あの厳選した努力が水の泡に!!? せっかくイジツパリの…… あ、嘘か。

「はい、嘘です……。しゃっくり、止まっていますね。」

あー……。うん。止まってる。

「ふふふ……。お互い単純な性格で良かったですね」

……。まあ、そうだね。

なんか納得いかないけど、しゃっくり止めてくれてありがとう。

お礼を言いつつ頭を撫でると、きりちゃんからも頭を撫でられる。

「いえいえ、私も止めてくれてありがとうございます。」

互いにお礼を言い合い、互いに頭を撫であつた。

☒ マキさんと、 “ かわいいさ ” が上昇中なゆかりさん

私こと弦巻マキにとって、結月ゆかり… ゆかりちゃんはつい構ってしまいう存在だった。

別に彼女の要領が悪い訳では無い。一人でもきちちゃんと毎日をごなしそうなのだけど… ほおって置くと彼女は誰とも話さず学校に通い、両親が不在気味らしい家に帰り、誰も呼ばずに宿題やゲームをして、そのまま就寝して一日を終えそう… 何と云うか、あまり他者を必要としてなさそうな人物だった。

親友兼幼馴染を自負する私としてはもう少し… 何と云うか、こう… こちらとの交友関係を求めてきて欲しいわけなのだが、友人が増え、付き合いが長くなっても、ゆかりちゃんのそんな本質は変らなかつた。

時折ふと頭をよぎっていくそんな悩みは、性分は人それぞれだし、こちらから話しかけたり遊びに誘うときちゃんと応対して楽しそうにしてくれるので… まあいつか、と長続きすることは無かつた。

そんな日々を過ごす中、相変わらず出不精なゆかりちゃんに洋服が買いたいと言う口実で、お店に引つ張り出して一緒に服を見ている時……私は気づいた。変らなかつたはずのゆかりちゃんが最近、色々変り始めている事に。

「……ん、どうしました？マキさん？」

ジツと見る私の視線に気づいたのだろう、服を選ぶ手を止めて訝しげな表情でこちらに顔を近づけ、私の袖口を掴みチョイチョイと引つ張るゆかりちゃんに我を取り戻す。うーん、どうしたと言うか何というか……あれだ。

ゆかりちゃん、とってもかわいくなつたよね。

「む……なんですか急に。ナンパじゃあるまいし。」

そんな反応をしつつも頬を赤らめ、視線を微妙にずらして恥ずかしそうにするゆかりちゃん。冷静な口調とギャップがあるその様子は、狙ってやっているとしたら相当なテダレだろうが、天然なのは幼馴染として分かつてしまう。

：うん。やっぱりかわいくなった。

恋をすると綺麗になるって本当だったんだね。

「き、きりちゃんとはそういう間柄では……うぐ、だつ大体、私は私です。大して変っていませんよ」

ついマジマジと見つつも納得する私に、ゆかりちゃんは勝手にご執心中な小学生の友人の名前を告げて来たので「相手が誰とは言っていないんだけど……と返してみた。

すると墓穴を掘ったことを自覚してさらに頬を赤らめるゆかりちゃん。視線がふよふよ動きだした……。うん、かわいい。

変った所……。例えば今だつて前より真剣にお洋服選んでたよね？……。まるで身だしなみに目覚めた恋する女の子みたいな初々しさだったよ？

「こ、これは肌触りを気にしているだけで、別にファッションに目覚めたわけでは……」
そっか。感触は大事だよな。

…
抱きしめた相手にゴワゴワなんて感じられたら嫌だし。

「うぐ…」

あとは… さつき喫茶店で、ケーキの美味しい所を最後に残して食べてたよね？ 今までそんな癖無かったのに。そこも「ゆかりちゃん、新かわいいポイント」かな？

「何ですかその謎ワード… と言うか、よく見えますね。でもそのどこに、かわいさの要素が…」

あれ、普段からきりたんとケーキを分け合いっこしてるから無意識で避けてたんじゃない？ 一番美味しい所を。

思い当たる節があったのだろう。ゆかりちゃんの開いた口から否定の言葉が途切れ、パクパクしている。

「で、でもケーキは皆で分け合った方が色んな味を楽しめて良い… いやそうじゃなく

て

ああ、そうやって言いくるめられたんだね。きりたんの言葉に納得してしまうゆかりちゃんの情景が目には浮かぶ。ゆかりちゃん警戒心がきちんとあるけど、親しい人相手だとガードゆるゆるだよね。

仮に、ゆかりちゃんときりたんちゃんの年齢が逆転していたら、騙されてそんな親友を必死に守っただろうが…。相手が顔見知りで小学生な女の子だと、微笑ましいばかりで、そんな気持ちは露ほどもわかなかつた。

「ちよ、ちよつと服が気になったのと、食べ方を変えただけ…。です！マキさんの勘違いです、よ？」

いや、そんな不安そうに言わなくても…

まあそういう事にしても、他にも…。私、だけじゃなくて仲が良い人と距離が縮まつたよね。物理的にも精神的にも。

少なくともゆかりちゃん、今みたいに話している相手の服の端を掴むような事は無かつたはずだし、息が届きそうな距離で話すことも無かつたよね？

…きりたんとずーっと抱きしめ合ってるから、他人の体温に慣れちゃって、人恋し

くなつちやたんだね。

「えつと…これは、その……」

指摘されてピクリと反応するが、私の服を摘んだ手はそのまま、離れることはなかった。

最近何となく私が日常に感じていた違和感は、“ゆかりちゃんがかわいくなつたから”と言う根本的な原因に気づくと芋づる式に納得しはじめる。他にも、最近のゆかりちゃんの変化をつらつらと告げていくと…

「うう…マ、マキさん！分かりましたから…、降参しますから…、もうこれ以上、いじめないで下さい…」

ゆかりちゃんは潤んだ瞳で見上げて必死に降参し始めた…一瞬、もつと涙目にしてあげたいなんてイジメつこな考えが浮かんでしまうが自重する。

…うん、やっぱり本当にかわいくなつてる。良い事なんだけど、きりたんちゃんだけじゃなく、琴葉姉妹やIAちゃんに…果てはずん子さんまでにも無意識に毒牙にか

けているのは問題なのかもしれない。

「∴私、変ですか？」

そんな考え事をしていると、ゆかりちゃんは私が黙ったことに不安そうに声をかけてきた。

∴先ほどつらつらと上げた「ゆかりちゃんに魅了されてしまった友人達」の脳内リストに、母性をくすぐられた私の名前が載ってしまったことを自覚してしまう。

いやいや∴流石に親友を、しかも小学生から横恋慕するのはダメだろ私。しっかりしろ。

でも非力で身長小さめなゆかりちゃんの揺れる瞳を見ると∴この前IAちゃんが

“ゆかりちゃんの事、つい押し倒しちゃった。それ以上は我慢できたけど”
とか言っていた事にも共感できてしまう。

私に比べ身長も小さく非力なゆかりちゃんへの湧き上がってしまった妄想を、頭の片隅に追いやりつつ“良い変化だから大丈夫”と向ける瞳と言葉に親愛をこめて伝えてあげる。

「そ、そうですか。：。あつ、マキさんにこの服似合いそうですよ？ほらつ、これです！」
こちらの言葉に騙され：。いや、安堵しつつ、必死に話題を変えるゆかりちゃん。これ以上いじめてしまうのもかわいそうなので、そらした話題に乗っかり、その日の買い物を終えた。

「ふふつ、買い物楽しかったです。また誘ってくださいね。それじゃあ私はこの後、きりちゃんにお勉強を教えますので東北家に帰え：。じゃなくて、行ってきますね。」

その後、ずんちゃんによる“家庭教師”と言う名目に踊らされ、最近は家事もするらしい実質通い妻なゆかりちゃんを見送った。

そんな帰り道で、私はゆかりちゃんが買い物途中で口走っていた言葉をふと思い出した。

“ ケーキは分け合った方が良い ”

なるほど、確かにゆかりちゃんと言う通りだ。流石に今の“持ち主”の小学生から奪い取る”のは心が痛くて無理だが、“分け合う”のなら結構話しを通る気がする。

魅力的なものは奪い合うのではなく分け合うほうが良い。それこそ親しい間柄ならば。その言葉の責任をゆかりちゃんにとつてもらうことになるのは、そう遠く無い未来かもしれない…。なんて冗談を誰となしに思い浮かべてしまった。

ん
□ポケット付きなゆかりさんを、日々調教してるきりたん

「ゆかりさん、ちよつとギョッてしますね」

お菓子を買いにコンビニに行く途中、隣からそんな言葉を投げかけられた。

言葉の意味を咀嚼し切る前に、声の主であるきりちゃんに私は抱きしめられていた。

… えーと、急にどうしたの？

「えへへ… あつ、別にやましい事はしてないですよ？ゆかりさんのコートのポケットに入れてた私の財布を取り出してるだけです。取り出しやすい体勢してる副産物で、結果的にちよつと抱きついちゃってますが、やましいことはしていません！」

やましい事はしてないと言う言葉を2回も言いつつ、抱きついたまま私のポケットをゴソゴソするきりちゃん。ついでに反対の手で背中あたりの服を握られて、頭はこすり付けるようにグリグリしてきている… まあ、なるほど。

きりちゃんの外出用の私服は基本和服だ。帯の隙間など小物を入れることができな

いわけではないが、洋服よりもそういった点に関しては不便なので、きりちゃんの私物を私のポケットに入れることは今日に限らず多々あった。抱きつかれるのも、ちよつと恥ずかしいが取り安い姿勢なのなら、まあしようがないのかな？

あれ？・・・ だけど、今日もお財布預かってたっけ？記憶に無いような。

「お家で声をかけたのですが・・・ ちょうどゲームが佳境に入ってたので、ゆかりさん気づかなかったのかも知れません・・・ まずかったですか？」

しゅんとするきりちゃんに、反射的にそんな事は無いと返す。

脊髄反射的に出た言葉だが、実際使われても構わないし、さらに言えば一言断る必要も無い。自分のポケットだと思って勝手に使つて欲しいと告げた。

「そ、そうですか？・・・ えへへ。ゆかりさんのポケットも私のものになっちゃいましたね！」

ポケット『も』、という助詞が少し気にかかるが再び嬉しそうに顔を綻ばせるきりちゃんに釣られて笑みが浮かんでしまい、特に追求することも無く、買い物を終えてその日

を終えた。

まあ、それは良かったのだが…

「ゆかりさん、駅に入るのにSuicaが必要です。だからぎゅーってしますね。…むふふ、すー… はー… はい、取れました。じゃあピツとして… ポケットに戻すのでまたぎゅーってしますね。あつ、駅から出る時もぎゅーってしますから！今、予約しましたからね!!」

その日以降、きりちゃんは何かにつけて外出先で抱きしめてくるようになってしまった。

て言うか今、深呼吸しなかった？それに家の中ならまだしも、外だと他人の目もあるから流石に恥ずかしいのだけど…

「ゆかりさんダメですよ、私はポケットから荷物を出すだけなのにそんなに恥ずかしくがってたら、まるで：こ、恋人同士のニヤンニヤンしてるみたいじゃないですか!!」

きりちゃんは自分のセリフに自分でニヤニヤしつつも、熱を持った視線でジツと私の表情を覗き込んでくる。そんな状況に、頬の微熱を自覚し視線を逸らしてしまう。

「か、かわいい：大丈夫ですよ、ゆかりさん。逆に考えるです。ロリコンって思われちゃってもいいさと考えるんです：!!そう、私と抱きしめ合うのはごくごく普通の事、HBの鉛筆をベキツ!とへし折ることと同じようにツできて当然と思うことですよ!!」

俯いた私の表情をキラキラとした表情で覗き込みつつ、漫画ネタを口走るきりちゃん。欲望やらなんやらで、瞳はグルグルと渦巻いている。相変わらず思考が暴走しがちな親友で妹分を正気に戻そうと声をかけようとしたが、再度きりちゃんの言葉がかかれ遮られてしまう。

「ん、ゆかりさん。ポケットに手を入れるのにお手手がちよつと邪魔です。いいですか？ ゆかりさんのお手手はちゃんと定位置な私の頭の上か、きちんと私を抱きしめてください。…はい、OKです。」

急に真剣な表情で指摘され、されるがままに。結果、きりちゃんに掴まれた私の手は誘導され片方はきりちゃんの頭の上に、もう片方はきりちゃんの背中に回されてしまった。

「えへへ…」

我に返っても、相変わらず幸せそうに微笑むきりちゃんに毒気を抜かれ、やけに長い間かかった『きりちゃんがポケットに出し入れする作業』を頭を撫でつつ待つてしまった。

そんな日々はこの日に限らず続き…

「ゆかりさん、喉が渇きましたのでぎゅーつてしますね…ん、これかな？…

んー、でもこれじゃないかもですね……… あつ、やつぱり最初に触ったのでしたか。はい、飲み物出せました。ゆかりさんも飲みますか？」

「ゆかりさん、時間空いて暇になっちゃいましたね。こんな事もあるうかと、任天堂Switchを二台とも用意しておいたんです！こんな事もあるうかと！ゆかりさんのポケットの中に!!……じゃあぎゅーっしてしますね。」

「ゆかりさん、お菓子を食べませんか？多分ポケットの中に……ん……んー……んー？あつ、そう言えばこの前食べちゃいましたね。すいません、今度きちんと在庫を追加しときますので、今回はお菓子じゃなくて私の甘くいぎゅーっと、スリスリで我慢してください。……えへへ」

そんな感じに、何かにつけてきりちゃんは私に抱きついてくるようになってしまった。一応正当？な理由もあるので大人しく抱きしめられているのだが、私のポケットがドラえもんもかくやと言うほどにバリエーション豊かになってきた。

……と言うかお菓子とかならまだしも、ゲーム機やペットボトル何がコートのポ

ケツトに入ってたら流石に気づくはずなんだけど、

私はそんな物が入っていることに気づかず、毎回出される度に驚かされていた。

「あつ好きなように使つて良いと許可を貰ったので、空間拡張と簡単に物が出せるように魔法で補助してきました」

本当に4次元ポケット化してたのか…と試しにポケットに腕を突っ込んでみると普通に底まで行き着いてしまい、何も入って無かった…あれ？

「魔法の分類なので、魔法少女以外が扱うと危険があつたり無かつたりするかもしれないので、ゆかりさんには使えないようになってます…それにゆかりさんが一人で使えちゃうと、私がゆかりさんにくつつく工程が無くなっちゃうじゃないですか！」

あやふやな前半部よりも明らかに後半部が本音っぽいけど…まあいつか。

「んっ、はい。お財布ですね。んー、私とゆかりさんの2つ分だから2倍時間がかかったちやいますね。えへへ… あっ」

なお、出先で私ときりちゃんの小物が必要な際は抱き合う… と言う謎の儀式をしつかり癖つけられてしまった私は、財布を取り出してもらおうとマキさん達と一緒にいる際も何も考えずに抱きしめあってしまった。

そして、こちらを見物する友人達の視線に気づき抱き合ったまま固まってしまふ… なんて事態に。

すぐに二人して我に帰り弁明するも、力及ばず私達は『バカツプル』の称号を得てしまふのだった…。 どうしてこうなった。

☒ 選択するゆかりさんと、選択されたきりたん。

「ゆかりさん、心理テストを出すので解答してみませんか？」

心理テスト：… うん、いいよ。

ベットに仰向けに横になっていた私はきりちゃんの提案に目線だけ向け即答した。

提案してきたきりちゃんは、そんな私のお腹の上に座っている体勢で：… 最近きりちゃんの中でマイブームらしい。

重さや苦しさは感じないので別に良いのだが、たまに上体を倒して私の顔の横に手をつき、本人曰く壁ドンならぬ床ドンとやらを繰り返して満足げなご様子なのだが：… まあそれも良いか、実害無いし。

なんて考えている合間も、きりちゃんの話は続いていく。

「はい、じゃあ魔法でイメージ送るんで眼をつぶってください。それでは…あなたは森の中、小さな泉の畔にいます」

あんまり言葉の意味を理解しないまま眼をつぶると、広がる風景。瞼の裏にきりちゃんの話した光景がまるでプロジェクターのように映った。

小学生が出す心理テストからは想像できない超常現象が起こったことにびっくりして、何度か眼を閉じたり開けたりしてしまう。

… まあ、きりちゃん周りの突飛な出来事は今に始まったことじゃないか、と納得して眼を閉じておとなしくする。

最近異常な現象への耐性が高くなっている気がする。私自身の力は相変わらず一般人の域を全く出していないのだけでも。

「いいですか？続けますよ？その泉の中心から、白い光のエフェクトを出しつつ、女神役のずん姉さまが現れます。」

知り合いがやけに神秘的な光を携えて湖の中心から出沒した。湖に女神って言う
と：：金と銀の斧の話しを元にした心理テストなのかな？

それにしても女神さん、配役的にも似合っているが如何せんさつきまで一緒に家事を
していた相手が神様っぽいオーラを出しているのは何というか：：シユールだった。

「白色の布を巻くような衣装を身につけたその姿は、神聖さとエロさを兼ね備えていま
す。下着はもちろん上下とも純白のやつです：：ギリ見えませんが。あと特に重要な
のですが、微風によって衣装が動いて、むっちりな太ももがチラチラと：：」

きりちゃんの会話に連動しているのだろう私の視界は、ずん子さんの太ももでイッパ
イになっている：：カメラ近い。それにネットリと映す箇所を移動させないで欲しい。
いかがわしいビデオみたいだから。

「(中略)さて、まだ語り足りないですが一旦切り上げて：：そんな人外のエロさと神格
を見てしまったあなたはS A N値チエックです。精神で対抗後、1 D 4を振ってください

い。」

やけに長い力説の後：「この前一緒にセッションをこなした影響なのか、視界の端にサイコロが出現してきた。きりちゃん、心理テストでしょ？TRPG要素が混ざっちゃつてるよ？」

いや、今度GMする時はこれやつてもらえると楽しそうではあるけど。

「あ、はい。そうでしたね。えーとそれでは、ずんねえ様は「あなたは何を落としたのか」と聞いてきます：あつそうです、声は未実装です。何か人工っぽくなっちゃうから調整が難しくくて：どうしました？ゆかりさん？」

視界下部に映るメッセージウィンドウ。どうやら音声は流れてこないらしい。そんな事をつぶやくと、きりちゃんが事情を話してくれた。

：：何だろう。「きりちゃんがボイス調整」をしている事にツツコミをいれるべきな気がするけど、理由がはつきりしないでモヤモヤしてしまう。そんな私の様子を勘付いたきりちゃんは不思議そうな瞳を向けてきたので、頭を撫でて何でも無いと誤魔化した。

体勢的に手が届かない所だったが、すぐに察したきりちゃん上半身を倒すようにくつついてくれたので助かった。そしてその姿勢のまま、きりちゃんによるお話しは続き…

「んっ…では続けますね。女神は質問をしてきます。貴女が落したのは金髪爆乳幼馴染の美少女…マキさんですか？」

女神の横にマキさんが現れた。

…ちよつと待って。私、マキさんを湖に落したの？どういう状況？殺人事件なの？

「あつ落したと言っても、湖じゃなくて恋愛的な意味なので大丈夫です。マキさんではないのなら、胸は控えめですが同じく幼馴染な天然系の愛くるしい少女ですか？自分色に染めれちゃいますよ？それともつても仲が良い双子姉妹ですか？こちらは2人セットなのでお得ですよ？」

さらに横に現れるIAさんと琴葉姉妹。この人数を恋に落したのなら、痴情のもつれ的にも大丈夫じゃないような気がする。

「あつ、それと隠しキャラとしてIAさんの妹さんのツンデレさんと、ごはんを美味しそうに食べる後輩さんに、お酒が大好きらしい自称未来さんがいますが、私会ったことが無いので黒塗りになっちゃいます。：それと実は女神様自身も攻略可能です！：ゆかりさん、ちよつと節操が無すぎませんか？昨今のエロゲー主人公ですら、もうちよつとラインナップ少な目ですよ？」

コナンの犯人みたいなシルエツトになって現れる3人と、何か照れてるずん子さん。何というかカオスな視界に戸惑っていると現実のきりちゃんから、いわれのない批判を受けた。

まず昨今のエロゲー界の事情を知っている時点で問題だからね？きりちゃん、ちゃんと小学生の自覚持とうね？

「むう… まあいいです心理テストを続けますよ。補足情報ですが、受け受けしいゆかりさんでは、誰をお持ち帰… 選択しても、お家に帰ったとたん押し倒されて貞操を奪われてしまうでしょう。そのままHシーンに移行します。仮に多くの美少女を魅了している自身の所業を正直に白状した場合は、ハーレムルートに突入します。」

受け受けしい言うな… なんだそれ、眼を閉じると友人とのエロ映像が流れるって新
手の精神攻撃が何かなの？

それとまるで私がマキさん達を誘惑してる的な言い方はしないで欲しい。

「まあ、ゆかりさんが無自覚なのは分かってます… さて、そんな貞操の危機に直面しているゆかりさんに朗報です。さらに選択肢が一つ増えます。それは趣味が合っ
ていると楽しくなる、とつても良い子な小学生です！」

私は分かってますとでも言いたげな表情のきりちゃん。ツツコミを入れる間も無く、ぼんつと言う擬音と共に瞼を閉じた視界の中央に小学生：：きりちゃんが出現した。嬉しそうに手を振ってる。かわいい。

：：いやいや、これ以上選択肢を増やされても困るんだけど。

「大丈夫です。他の人を選ぶと簡単に押し倒されちゃう恋愛クソ雑魚ゆかりさんですが、私：：では無くこの小学生を選んだ場合、小学生の非力さ故に押し倒されそうになっても回避できて、良い子な故にもう少し大人になってからね：：で説得できちゃうんです。つまり全年齢版ってことですね。へたれなゆかりさんにおススメの選択肢ですよ！」

ふふんつとドヤ顔で説明してくるきりちゃん（現実）と、瞼を閉じると擦り寄って来るきりちゃん（非現実）。どっちがどっちだか混乱してきた。

て言うか、そりやまあ恋愛経験無いけどクソ雑魚言うな。ドヤ顔のきりちゃんの頬をコネコネする。

「ふあう、うあう、んい… ほおれで、どおします？他の人を選んだ場合しばらく瞼を閉じる度に知り合いにエッチな事されちゃうゆかりさんの姿が映っちゃうかももしれませんよお…？」

頬をうにょーんと伸ばされたまま、なんか悪い顔をするきりちゃん。選択肢があつて無いようだし、まあ…。うん。それならきりちゃんを選ぶよ。

「やった！… それでは早速、心理テストの結果です。あなたが選んだ女性… 実は、その人はあなたが将来結婚する人なのです！」

酷い誘導尋問だったが、嬉しそうに抱きついてくる現実と非現実な2人のきりちゃんの様子に、何だかほっこりしてしまう…。そんな大体いつも通りの一日だった。

☒前世を占ってもらおう、ゆかりさんときりたん

「ゆかりちゃんと、きりたんちゃんの前世は……」

切れ長な眼をさらに細め、ほのかに光る水晶球を見つめる女性は東北イタコさん。

私の服の裾を掴んで隣に座っている東北きりたんの姉で、東北家の長女にあたるそう
だ。

イタコさんは出会ってそうそうに、私達の前世を占ってくれると持ちかけてくれたの
だが……

「……最っ高にラブラブでしたわ!」

眼をカツと開いて断言した言葉は……何だか残念だった。東北三姉妹は全員美人で
優秀なのに、何で揃いも揃って、こう……ちょこちょこ残念なのだろうか。

……うん、きりちゃん。聞こえてたから。

だから目をキラキラさせながら、服の裾をぐいぐい引つ張るのはやめて。だいたい毎

日掴まれて、ひと目で分かるくらいには伸びてるみたいだから。部屋着だからそこまで気にしないけど。

「ふふつ、前世も今世も… 本当に仲良しさんでラブラブですわ!」

そんな私達を見て嬉しそうにするイタコさん。仲良いのは否定しないけど、ラブラブ何かじゃない… と言うか、前世を占うってそういう感じだっけ?

何かこう… 前世は動物だったとか、武士だったとかそういう系を言われるのかと想像してた… 何て事を敬語でイタコさんに伝えつつ、興奮してるきりちゃんをなだめるために、お膝に乗せてぎゅうつと抱きしめる。

そのままトントンと一定のリズムで背中を軽く叩くと、きりちゃんは動物のような鳴き声をあげつつ落ち着いてくれた… よしよし。

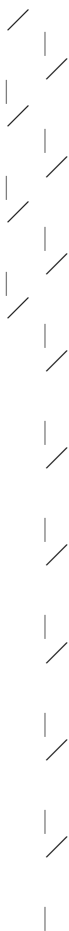
「いや、どう見てもラブラ… まあいいですわ… んー。そういうのだと、ゆかりちゃん村人で、きりたんちゃんは大きな動物… 神獣と呼ばれてみたい、ですわ!」

え? しんじゆう” って” 神獣” ってこと? どういうこと? 村人Aと神獣がラブラブ

な展開がいまいち分からない…。きりちゃんの「ノーマルキャラと超激レアキャラですね」って言葉は残念ながらだいたい意味が伝わってしまったけど。

「うーん、言葉では伝わりにくいので、映像を直接送りますわね。」

相変わらず東北姉妹の便利な魔法？超能力？をイタコさんに使ってもらった結果、私ときりちゃんの頭の中に映像が流れ出した…。



神々が実在する、こことは違う未発達な世界。

これは、とある神獣【きりたんぬ】と、

その庇護下の村に住む少女ゆかりのお話し。

↓後編へ続く。

☒村人なゆかりさんと、神獣なきりたんぬ

神獣なきりたんぬ。

いくつかの山々を縄張りとするこの獣は、山に匹敵する巨躯と言われ恐れられているが、ほとんど姿を見せず有り余る力を周辺に散らすことで作物を実らせ魔物を遠ざける恩恵をもたららし周辺の村々から崇め奉られる存在でもあった。

そんな恐ろしくも気高い神獣は今…

「きりちゃん、やっぱりモフモフだね…」

子犬ほどに小さくなって、目をキラキラさせた少女に抱きしめられ、モフモフされていた。

少女の名前は結月ゆかり。少し身長が小さめだが村の決まりではそろそろ成人に達する年齢だ。

神獣きりたんぬを信仰する村の一つに住むごく一般人な彼女は、自分の腕に収まる小さな動物が敬われ恐れられる神獣きりたんぬとは、気づいていない。

しかしそれも仕方が無いのかも知れない。なぜなら

「ふふつ、きりちゃん気持ちよさそう…。マキさんに作ってもらった特注品のクシだからね！」

もふもふされた後、丁寧にブラッシングされて気持ちよさそうに目を細め、そのまま眠ってしまいそうな様子は神獣としての威厳の欠片も無いのだから。

「ん、私も眠くなっちゃった…。朝のお仕事もひと段落したし一緒に2度寝しちやおうか」

そのまま横になり眠ってしまう1人と1匹。互いの四肢がすっかり相手にしがみついているその様は、両者の深い信頼関係を感じさせた。

「くー…くー…」

本来、山をも越えるほどの巨体を有する神獣きりたんぬ。しかし本人（獣）は注目を浴びることはあまり好きでは無かった。故に普段は小さくなつて引きこもりライフをしていたのだが…昔、幼いゆかりと遭遇し見事に餌付けされつつ数年経過、現状にいたる。

「… あつ、きりちゃん。おはよう。お昼ごはんちようどできたから一緒に食べようか。じゃあ、お手できる?… うん良い子だね、はい。食べていいよ!」

たつぷりと2度寝を堪能した後、先に起きたゆかりは昼食を作っていた。美味しそうな匂いに鼻をピクピクさせたきりたんぬは、ゆつくりと目を覚ます。

起き抜けのあまり回らない頭だったが、しっかりと躡されたご飯前の儀式をすませ、昼食にありついた。

「ん？おかわり？…もう、おねだり上手なんだから。あんまり食べるとお腹壊しちゃうかも知れないから、これで最後だよ？」

「ご飯が足らなかつたらしく、お腹を必死に見せて上目遣いでアピールするきりたんぬの姿は、重ねて言うが神獣としての威厳など欠片も残っていない。」

「ごちそうさま…じゃあ、畑仕事に行こっか。」

ゆかりと会うまでは、寝て起きて食べてゴロゴロしてを繰り返していた引きこも…いや動物として正しい生活をしていたきりたんぬだが、ゆかりのペット…いや居候を初めてからは仕事をするようになった。それはゆかりの畑の世話だけでなく、他の村人の手伝いもしている。

「きりちゃん、やっぱりちっちゃいのに凄い力持ちだね。あつお礼ですか。いえいえ、こちらこそいつもありがとうございます。」

倒れた巨木を簡単に動かすきりたんぬ。魔法などの神秘が有るとは言え、重機など無い発展途上なこの世界の住人にとって、小さくなつても神獣の力はそのままなきりたんぬは、非力な村人達にとって貴重な存在だった。たまに別の村に招待されるほどで、周囲からもありがたがれ、ゆかりはお礼に作物を貰い、それをきりたんぬに料理として還元していた。

「あつ隣のおばあちゃん。また、きりちゃんを撫でたいんですね。いい？きりちゃん？… いいみたいです、どうぞ」

本来いくら役立っているとは言え、通常の動物を超える力を有するきりたんぬは人の世界では忌避される存在なのだが…ここは神獣きりたんぬの縄張り。この異常な力を持ち年月が経つても外見も変わらない小動物は、きりたんぬの眷属なのではないかと思われ、ありがたく拝まれたり撫でられたりして受け入れられていた。

何よりも見た目小動物で、ゆかりにべつたりな様子に村人達が危機感など抱けない事も要因なのかもしれない。

「ふふつ、きりちゃん人気だね。私も鼻が高いよ！」

そんなこんなで当初は“きりたんぬの眷属様”等と呼ばれていたきりたんぬだったが、出会ったばかりの幼いゆかりは“きりちゃん”と略称し、その呼び方は村人にも広がり、完全に村のマスコットとなっていた。余談だが、親友のマキが作るきりちゃんの木彫りは一定数の需要が常にあり、村の特産物化している。

「お家に戻ったら、一緒にお風呂入ろーね。」

本来、ゆかりはもう少し大人びた言動なのだが……対話相手が人ならぬ動物と言うこともあり、少し子供じみた言動になってしまっていた。親バカならぬ、飼い主バカだった。デレデレだが、両思いのため誰も止める人はいなかった。

「それじゃあ、おやすみ。きりちゃん。」

一緒に起きて、一緒にご飯を食べて、一緒に働いて、一緒にお風呂に入って、一緒のお布団で就寝する。

ゆかりにとって幼いころから続けていたその毎日は当たり前の繰り返しで、幸せな繰り返しだった。

だがそんな毎日の繰り返しは、急に止まることとなる。

この次の日から、きりたんぬが姿を消し現れなくなつたのだ。

「きりちゃん、山に帰っちゃつたのかな…。」

きりたんぬがいなくなつてから一週間が経つた。ずいぶん長いこと共にいたが、元より野生動物だ。急に去つてしまうのもしかたがない事だと分かつていても割り切ることなんでできずに、一人分と言うには作りすぎた昼食を前に、ゆかりは自宅でしょんぼ

りと肩を落としていた。

そんな中に響く軽いノック音。

「つはーい! : : マキさん達、ですか。真剣な表情でどうかしたんですか?」

もしかしたらきりたんぬかもしれないと慌てて出てみるが現れたのは親友達だった。 : : そもそもきりたんぬはノックと言うには前足で雑な叩き方だったと今更ながらに気づき苦笑してしまう。

「 : : え? : : えつ、どうしたんですか?」

落ち込みつつも用件を聞くゆかりをしり目に、いつに無く真剣な表情の親友達はゆかりの家に入り、勝手に荷造りをし始めた。

「神獣さまへの生贄、ですか? そんな話し聞いたことも : : えつ私が?」

慌てている親友たちに何とか話しを聞くと、ゆかりが“神獣きりたんぬへの生贄”に選ばれてしまったと村中で噂になっているらしい。

生贄なんて聞いたことが無かったが、親友達はゆかりを逃がそうと駆けつけてくれたようだった。

話しを聞き終えた時には、親友達の手によつて荷造りも済んでいた。何よりも自分の事を逃がそうと行動してくれた親友達にゆかりは思わず笑みを零したが…同時に力なく首をふった。

「いえ…私は逃げません。」

状況に流されそうになったが自分が逃げた場合、村がどんな事態になるのか想像してしまうと、ゆかりは逃げる訳にはいかなかった。

この山に住まう神獣きりたんぬは古くから近隣の村々を守り、多くの恵みを授けてくれている。

村を守るためなのか、それともたんに力が漏れ出ているのかは定かでは無いが…これまででの加護の代償と村の今後を考えれば、自分一人の命など差し出すべきだと、ゆか

りは感じたのだった。

：：最悪、神獣の逆鱗に触れたら小さな村等、壊滅してしまいかねない。

「私一人で済むのならば、村のためにも命を捧げるべきでしょう」

そんな思考を巡らせたゆかりの瞳には決意に溢れ、それを見てしまった親友達は何も言い返すことはできなかった。

「こ、これを私が着て良いのですか？：：はあ」

数日後、ゆかりを何とか助けようと奔走したくれたらしく顔色が悪い村長の手によって申し訳無さそうに渡された生贄の衣装は、純白の衣服で：：何とか嫁入り衣装のようだった。正直、1村人のゆかりは生涯目にすることも無さそうな逸品だった。

「こんな展開になるなら、きりちゃんともう一度……いえ、会えなくなってしまうって逆に良かったのかも知れませんが。あの子、勘が良いから」

小さいころから一緒に居た小動物は何かにつけ危険を察するとゆかりに教えてくれ、助けてくれたことは何度もあった。仮にこの場にいた場合、ゆかりは無理やり村から連れ出され逃げていたかもしれない……なんて思いつつ、ゆかりは神獣が待つ山奥に連れて行かれたのだった。

「わっ…… 灯りが浮いてる?」

連れてこられた山奥にある洞窟…… と言うには広過ぎる空間は、輝く光の玉が無数に浮く神秘的な場所だった。

そこは神聖な場所らしく、案内に来てくれた人は入ってこれず、ゆかり一人になっていた。

「ここに神獣きりたんぬ様が… わっ! …… え? きりちゃん!」

自身を捧げる相手をキヨロキヨロと探すゆかりに… 見慣れた小動物が胸に飛び込んできた。

必死にぎゅーぎゅーくつついてきたのは、いなくなっていたはずの小動物… きりちゃんだった。

「どうしてここに… ま、まさか私を心配して?」

幼いころから一緒にいて、心配性なこの動物なら自分を助けるために来たのではないかと、ゆかりは思い当たってしまう。しかし、それをされてしまうと自分一人の命では済まない事態に陥いることに、ゆかりは顔色を青くした。

「きりちゃんだって、ただではすまないかも…」

眷属かもしれないとは言え、見た目より力があるとは言え、久しぶりの再開に喜んで嬉しそうになき声をあげる小動物が、伝え聞く神獣と戦うなんて、ゆかりにはどう考えても無理だと思えた。

「神獣きりたんぬ様が来る前に、きりちゃんを逃がさないと…。」
状況に混乱し久しぶりに胸に収まる存在に嬉しくなりつつも、ゆかりは決意を固めたのだった。

その後、ややこしいがきりたんぬが来る前にきりたんぬを遠ざけるため、冷たく当たろうとしたゆかりが潤んだ瞳を向けられ断念したり、

人目が見つからないここなら大きくなれると巨大になったきりたんぬにゆかりがダイブしてモフモフモフモフモフモフしたり、

モフモフを力の限り楽しんだゆかりが、事ここにあつて【きりちゃんⅡきりたんぬ】に気づいたり、

何とか意思疎通したら、神託でゆかりを（お嫁に）欲しいと告げたら、生贄だと勘違いされていたことが分かったり、

ゆかりを生贄から救うため、駆けつけて来た幼なじみに事情を説明するはめになったり、

結局、ゆかりが神獸きりたんぬの巫女的な役職を得たものの、変わらない日常に戻ったり、

ツガイになったので、エッチなことをしようときりたんぬが人化したものの、神獸としては幼かったらしいきりたんぬの姿が10歳ほどのしかも女の子で、ゆかりが頭をかかえたり、

きりたんぬの姉神らしい、ずん子とイタコが神界からやって来て無理難題をふっかけられたり、

色々あるのだが……まあ、なんと申うか、ゆかりときりたんぬは幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし。

☒ 染まるゆかりさんと、潰れるきりたん

「そう言えばゆかりさん… 最近太りましたね！」

今日も今日とて二人でゲームをしていると、お膝に乗ったきりちゃんから失礼な言葉が飛び出した。

やけにドヤ顔だが… この子確か、私に好意を持つてくれているはずだったが、私の記憶違いだったのだろうか？

・

・

・

・

・

・

「あつ、そうでしたね。すいません… んう」

とりあえず、人に、特に女性に対してそう言う事を言つてはダメだよと伝えると、ションボリして謝るきりちゃん… の頭を撫でる私の手が視界に映る。

で頓着無い私でも頬がひきつるのを自覚してしまう。

：：：と云うか、何で私が太ると嬉しいのだろうか。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ほら、ゆかりさんのスレンダーな太もも：：数%ですがムチムチ度が上がってます！」
 そんな私の疑問を即応で答えてくれるきりちゃん。私の太ももをスリスリと触りつつ、瞳には星が瞬いていた。なるほど「太ももマイスター」とやらを日頃から自称しているきりちゃん的には、私の足回りが増えることは喜ばしい事のようにだ。お腹がポヨポヨしてますとか言われるよりマシなのかもしれないが。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

☒お留守番予定なゆかりさんと、宇宙より大切にされてるきりたん

「ゴールデンウィーク、3日前」

「ま、まあ私なら？余裕でこなしちゃいますけどお？……」

私、結月ゆかりのお膝上に座って話しているのは東北きりたん、私がきりちゃんと呼んでいる子だ。視点の関係でお顔は見えないが、声の調子的に笑みを隠し切れずにニヨニヨしているようだ。

きりちゃんの2人の姉、ずん子さんとイタ子さんは5月の長期連休、いわゆるゴールデンウィークに用事があり、不在となってしまうらしい。

シスコンなきりちゃんは、当初駄々をこねていたのだが……

・
・

「私に任せてください、イタ姉様！ずん姉様！この東北家は私が守つてみせます!!」
きりちゃんのは扱いは慣れている2人の姉によつて、おだてられ今ではお留守番にノリノリになっていた。単純過ぎて不安になるが、まあ小学生だからしょうがない。むしろ素直な良い子つてことで、安心すべきところなのだろう。

「仮に不審者が来ても、きりたん砲のサビにして：：」

きりちゃんが鼻息荒くドヤドヤしてる間に、イタコさん達の視線がこちらに向いてるのに気付き：： 私は領いた。

小学生が1人でお留守番なんて論外なので、姉2人としては私に保護者をして欲しいようだ。

言葉を出さずとも領いた私にホツとするイタコさん達。視線や仕草でやり取りできくらいに東北家に馴染んだ自覚をしつつ：： 褒めて欲しいのか、袖をクイクイ引つ張つて主張するきりちゃんの頭を丁寧に撫でてあげた。

「ふふん、ふふーん!!」

いつも通りで絶好調なきりちゃんの様子について笑みがこぼれてしまうが……

この日、ゴールデンウィーク3日前を境に、きりちゃんの様子は日を経つにつれ弱々しくなってしまう事となる。

【ゴールデンウィーク、前日】

「はあ……」

きりちゃんのため息が部屋に響く。最初気のせいかとも思ったがきりちゃんの様子は悪化し続け、ゴールデンウィーク前日の今では明らかに不調そのものだった。

「あの、ゆかりさん…… いえ、何でも無いです」

そして原因を聞いても話してくれず、たまに何かを話そうとしてやめてしまう様子が見られるようになった。

正直、普段の調子に乗った様子とギャップが酷くて胸がザワザワしてしまう。慰めようと甘やかしてみても、きりちゃんの様子は砂漠に水を零したように少しすると元の状態、つまり落ち込んでしまう。

明日から始まる長期休暇に向け一緒に遊ぶ準備を色々用意したが、体調が悪いなら諦

めた方が良いかもしれない。とりあえず、体調が良く無いなら今日は早めにお休みしよ
うかと、きりちゃんに聞いてみる。

・
・
・

「体調不良ってわけでは無いので大丈夫です。ゆかりさんこそ、明日以降の準備は大丈
夫なんですか？ゴールデンウィークで旅行に行くんですよね？」

・・・
旅行？

明日と言わず、長期休暇はきりちゃんとお留守番の予定しか無いんだけど。まあ、近
場の映画くらいには一緒に行こうと思ってたけど。

・
・
・

「え？・・・あの、2日前くらい前に茜さんと葵さんに大阪旅行に誘われてましたよね？」

ああ、確かに2人の里帰りに誘われた。きりちゃん聞いてたんだ。いやまあ、私の所在地が最近ほぼ東北家近辺に集中してるから不思議では無いけど……でもその場で断つたはずだ。

「え、え……良いんですか？ カニとか、お好み焼きとか食い倒れツアーだって」

それはめつちや惹かれたけど……、そもそもそこまで聞いてて私の返事は聞いてなかったの？ 確か即答したはずだけど

・
・

「偶然聞こえて、でも盗み聞きは良く無いかなあって、すぐ離れたんです……じゃ、じゃあコンサートツアーの方に行くんですか？」

マキさんが誘ってくれたやつか。バンドのツテで、世界的に有名な歌姫のチケットを手に入る目処がたつたらしく誘われた。県外なのでついでに旅行も誘われたが……それも断つたはずだ。

・
・

「…じゃあ、宇宙旅行の方に行くんですか？」

… IAちゃんのやつか。ちよつと不思議系がはいつて天然気味なIAちゃんだが、実は本当に不思議な存在だったらしい。詳細は省くが、先月に宇宙的なアレコレに巻き込まれて大変な目に遭ったりした。

▪
▪
これで私の特異な友人は魔法少女に霊能力者に宇宙人になったわけだ。怖いのは自称未来人やら自称精霊やらが、まだ結構いるので私の周辺は不思議成分がまだ増加傾向にあることだ。

▪
▪
まあ、その辺の事情は今置いて…

「え？え…？」

情報を飲み込めないのか、宇宙猫状態のきりちゃんを正気に戻そう。

つまりだ。きりちゃんは私が東北家のお留守番をほっぽり出して外出するって勘違いしてたんだ。

「だ、だって、お留守番頼まれたの私だけでしたし……」

そういえば、頼まれた際に返事をしてたのはきりちゃんだけだった。私もアイコンタクトで返事をしていたが、流石にドヤ顔真つ最中のきりちゃんが死角のやり取りを察するのは無理があつたのだろう。

んー……これは、あれか。

最近のきりちゃんの不調、ゴールデンウィークに独りぼちだと勘違いして気落ちしていたのか。

きりちゃんとは阿吽の呼吸的な意味で割と通じ合っているが、言葉にしないと伝わらないことだつてある。自分がきちんと伝えなかつたことで、きりちゃんを不安にさせてしまった事に罪悪感が沸いた。

・
・

今からでも、ちゃんと伝えないと。

出不精な私を心配してだろうが、友人たちに他にも色々誘われたが、全て断ったので長期休暇中はずうっと一緒に遊べるよ、と伝える。

・
・

「それって、つまり：：ゆかりさんは大阪の食べ歩きツアーより、私と一緒にゲームしたい：：ってことですか？」

控えめに聞いて来るきりちゃんに、肯定を返す。

すると、きりちゃんの不安気な瞳の奥がキラキラし始めた。

そのまま私は、きりちゃんを優しく抱きしめ、その小さなお耳に如何にきりちゃんと遊んでいて楽しいのかを優しく語りかける。大事な友人兼妹が数日とは言え溜め込んでいた悩みを解消できそうなチャンスだ。ここを逃す手は無い。

・
・

「えへへ：：じゃ、じゃあ世界的な歌姫よりも：：：いえ、宇宙よりも私の方が大事つ

てことですか?… ふへへ」

背中を撫で続けると、最近の不安が押し出されるようにきりちゃんの口からこぼれだした。きりちゃん曰く、私が色々誘われている所を目撃して、慌てて一緒に居たいと伝えようとしたが… 誘われた先がどれも魅力的で、ただのお留守番では太刀打ちできず、しかもお留守番宣言をした手前私についていく選択もできずに、口ごもりつつけてしまったようだ。

理由は分からなかったが真剣に悩み続けていたことを知る私は、きりちゃんの悩みを溶かしてとあげるように、きりちゃんの言葉を全肯定してあげた。世界よりも宇宙よりも、きりちゃんの事が大好きだよと、言葉だけでなくぎゆうつと抱きしめて伝えてあげる。普段から抱きしめ合って洗練された密着具合は、きりちゃんの心に届いたらしく力が抜けて嬉しそうな声が漏れだした。

・
・
・

「しゆき… んっ… ゆかり、さん。しゆき、好きですう…」

その後も、たっぷりと優しく語りかけ続けること10分程。安心したのか、きりちゃん
んは寝息を立て始めた。腕と足でがっちりホールドされ、寝相で首に甘噛みされつつ寝
言で告白され続けているが、きりちゃんが不調に陥る前のいつも通りなので、むしろ安
心してしまう。

安心と、心をこめてきりちゃんに語り掛けていた分私も疲れたのか、私もそのまま眠
り……。明日から始まるゴールデンウィークに向けて力をためるのだった。

☒ 1割結婚しちやったゆかりさんと、きりたん（ゴールデ ンウィーク初日、掲示板回）

「皆さんこんにちは！ゆかきり動画配信者… 夫の方、キリです！」

元氣よく挨拶をしたのは東北きりたん… 私がきりちゃんと呼んでいる子だ。続くように少々恥ずかしい挨拶をした私、結月ゆかりのお膝に座り、前方のカメラに視線を向けている。

そう、カメラだ。元々が個人のゲーム実況動画から始めた経緯のため今までは声さえ録音しておけばよかった。でも今日は映像、いわゆる顔出しでしかも生配信だ。

その理由は…

「急に顔を出した理由ですか？そんなに気になります？… しようがないですねえ、教えてあげましょう… 理由は皆さんに報告… いえ、自慢するためです!! 実はユカ姉、私の事がとーっても大好きだったんです!!」

朝から、そんな理由で配信したいと言い出したきりちゃん。

いつもなら窘めるのだが、昨日まで落ち込んでたきりちゃんの様子を考えると、まあいいかと流されてしまった。が…早くも私は後悔し始めていた。

【生配信中】ゆかきりを愛でるスレPart128 【初顔出し】

63 ななし

生配信、SNSで予告あつたつけ？ゆかきり補給ありがたいけど。

65 ななし

ㄨ 63 昨日までなかった。配信開始1時間前には予告はあつたけど。

65 ななし

ユカリ凄い美人さんだな。キリもかわいい。解釈一致どころか想像を超えてきたレベル。それと色違いの部屋着、おそろいでかわいい

66 ななし

お膝抱っこしての身長差が解釈一致で助かる…と言うか、この美貌で一般人は無理あるだろw w

67 ななし

キリは小学生って言ってたからそのまんまな感じだけど、ユカリは高校生くらいかな？ 落ち着いた声的に成人してもおかしくないとは思ってたけど

68 ななし

◇63 今もキリが熱く語ってるけど、ユカリに愛されている事を自慢したくて突発に近い配信になっちゃったらしい。何かプロポーズしてみた言葉をもらって自慢したい気持ち爆発？ したみたいww

70 ななし

配信初手「実はユカ姉… 私の事とーっても大好きだったんです!!」

74 ななし

◇70 知ってる

75 ななし

◇70 知ってる

77 ななし

◇70 むしろ前世から知ってた

78 ななし

ロリコンだもんね、ユカリ

79 ななし

∩ 78 ロリコンじゃなくてキリコンだぞ

80 ななし

開けろ！キリコン警察だ！！

82 ななし

むしろゆかきり配信視聴者で知らない人いないだろ w w

88 ななし

しかしユカリ、ほんとに美人だな。キリは見た目だけじゃなくて動きもかわいい w w

90 ななし

前から思ってたけどユカリの声、普段俺らへ話しかける時と、キリへ話しかける時でめちやくちや違うよな。キリに話しかける時だけ声に信愛がめちやくちやこもってる

w w

91 ななし

∩ 90 わかる。ユカリ単独の動画から見てた俺としては、キリが登場するようになって声が変わりすぎて驚いた記憶がある。声質は変わらないのに、ロボが感情を手に入れたくらいの違いがあつた w w

93 ななし

声だけじゃないぞ。今回の顔出し配信、ユカリが怖いぐらいに美人過ぎてビビったけど、キリと話す時だけホニヤって表情柔らかくなってる尊かった。

94 ななし

普段も仲よさそうな感じが伝わって尊過ぎて泣きそう

96 ななし

最初キリが言ってた、「愛されてることを自慢したいから顔出し配信します！」って最初意味わからなかったけど、これは確かに愛されてますわwwめっちゃ伝わるww

97 ななし

確かにww

100 ななし

「ユカ姉って、めっちゃくちや美人でしょう? : ふふっ皆さんなかなか見る目がありますねえ... でもぎくんねん! ユカ姉は私のものです! プロポーズもされちゃいましたし!!」

「ほらユカ姉! いつも見たいに撫でてください!! : ふへへ。はい、私の勝ち、つまりは優勝ですね! 皆さん、何で勝てなかったのか明日までに...」

「は? 胸?... はあ、これだからゆか姉エアプは... : いいですか? 凹凸が無い方がより密着度が上がるんです。だから私とユカ姉が正面からくつつくと... ほらっ! 隙

間なんて無いんです！こんなにピタリって吸いつくんです!!」

キリが俺らにめっちゃマウント取ってくるw w

100 ななし

こんな高頻度にダブルピースで視聴者に勝ち誇ってくる配信者初めて見たわw w

101 ななし

キリのクソガキムーブ相変わらずかわいいw w早くユカリに分からされてほしいw

w

102 ななし

【朗報】ゆかきり結婚する（ただし10%だけ）

103 ななし

相変わらず名言の宝庫だな「プロポーズの答えですか？もちろん私も大好きって返したので：：つまりは私とユカ姉、結婚しちやっただんです!!：：えー違います？じゃ、じゃあ半分！半分だけ結婚したことにしましょう!!」何だ半分結婚ってw w結局【10%だけ結婚】でユカリを納得させちやっただしw w

104 ななし

ユカリ「んう：：ま、まあそのくらいなら良いかな：：」

よくねえよww流されるなユカリwwいや俺らとしてはもっと流されて欲しいんだ
けどさww

105 ななし

最初に高いハードルを用意して、後の低いハードルにお得感を出す…詐欺のテク
ニツクの一つだなww

106 ななし

しかもパーセンテージ落ちていくことにキリがどんどん落ち込むのが見て分かるか
ら良心にも攻撃してるww

107 ななし

推しカプが結婚(1割)しましたww

今日はお祝いにケーキでも買うか…

てか収益化してたらお祝い投げ銭できたのに…

107 ななし

収益化確かにしてほしい

登録者とか配信時間のボーダーはもう超えてるし、俺らの金でイチヤイチャゆかきり
引きこもりライフを支えてあげたいww

107 ななし

俺、収益化したら赤スパでユカリにキリヘプロポーズの言葉言ってもらうんだ：：
今から文面考えとくかww

108 ななし

そうか、収益化したらユカリに色々読み上げてもらえるのか。

「小学生は最高だぜ！」とか言ってほしいなww

168 ななし

キリ、マジでユカリの事好きなんだな。興奮して段々顔が紅潮してるwwそれでユカリに落ち着かされてるww

168 ななし

窘められるとめっちゃ素直に返事して大人しくするキリ尊い。

額をユカリの手の平で冷やされて大人しくするけど、チラチラ視線を俺らに向けてドヤ顔でマウントとってくるの尊い：：

ちよつと時間経つとソワソワしてユカリにまた自慢し初めて良いか聞くの尊い：：

169 ななし

ㄨ 168 分かる。表情だけであんなに心情って伝わるもんなんだなww

170 ななし

やっぱキリ良い子だなww発言はアレだけどww

171 ななし

配信さつき気づいて、今見始めたんだけど、動画冒頭でユカリがプロポーズしたって本当？ちよつとだけ結婚したって本当？やっぱユカリはロリコンなの？ユカリ逮捕されちゃうの？

172 ななし

確かに、これは声だけじゃ伝わらなかったかも知れないww

173 ななし

めっちゃ尊いな…これは薄い本が厚くなる

174 ななし

∨ 171 ユカリはロリコンだけどそれはそれとして、キリ曰く「世界より宇宙より、キリちゃんの事が大事だよ」って言われたらしい。信愛的な意味合いにもとれるから、ギリセーフ？ちよつとだけ結婚も本当ww

175 ななし

∨ 174 いやアウトだろwwまあユカリはロリコンだから…

176 ななし

普段から好意を寄せられている小学生に向けてこの言葉は犯罪wwユカリのロリコ

ンは公式認定（ロリから）だから…

178 ななし

だからロリコンじゃなくてキリコンだぞ。ユカリはキリ専門だからな

179 ななし

キリコン警察さんの熱いゆかきり愛、分かるww

180 ななし

「宇宙より大事」発言した状況がわからんけどアウトだな。てか、ユカリも反論しないし、このセリフマジで言ったぽいんだよね。

こんな言葉がポンポン出るようだとキリが言ってた「ユカリが百合ハーレム作りかけてる」… って言葉に真実味が出てきたんだけどww本人めちやくちや美人だしww

183 ななし

ユカリは天然のジゴロだった…？

184 ななし

ㄨ 180 キリ曰く、ユカリハーレムのメンバーは幼馴染の金髪巨乳美少女に、同じく幼馴染な不思議系美人に、双子姉妹（美少女）に、同年代魔法美少女に、おっとり系霊能力持ち年上美少女に、酒好きダメダメ未来人な美少女お姉さんだっけ？

184

属性多いww確か最近の話だと、後5人くらい増えてたはず…誕生日が同じ月日の大食い系後輩美少女とか。てか超絶美人なユカリを普段見てるキリが言う「美少女達」って、ハーレムの構成員マジで全員美少女なんじゃね？

184

10人以上wwエロゲーでの大抵のハーレムルートと比べても数多いぞww

186 ななし

＜183 ジゴロは無垢な小学生を誘惑している時点で分かってたろ

187 ななし

無垢？「コミケでゆかきり同人誌出すなら公式認定出すから自分にデータいったん送って」とか欲望丸出しで話してますが…？

189 ななし

キリの瞳を見てみな。澄み切ってるだろ？無垢だよww

190 ななし

瞳はともかく口元が緩んでヨダレ垂れかけてるんですがww

192 ななし

＜190 ユカリに拭ってもらったからセーフ

194 ななし

推しカプに、自分の描いた推しカプ同人誌見てもらえるって分かって、すでに数人のサークル主がSNSでゆかきり同人誌作る気になってて笑うww

194 ななし

まてまて、キリ小学生だぞww本当に送ったらブタ箱行きだぞww

240 ななし

あ、配信で何かアンケート始まった

242 ななし

【アンケート】ユカリの発言はプロポーズか否か？

Yes or No

これはww

244 ななし

あの、コメントがYesで埋め尽くされてるんですがww

まあ、俺もYesにしたけど

245 ななし

キリ、ゆかきり視聴者の事分かってるなww

もちろんYes

248 ななし

いやでも、あの発言は「家族として大切にしてるよ」って意味じゃ…
まあYesにしたけど

250 ななし

結果を察して瞳に色彩が消えたユカリ、かわいそう…それでも美人さんだけど
あ、俺もYesです

282 ななし

結果出た！Yes100%ww

283 ななし

お前らww最高だwwww

288 ななし

一人くらい天邪鬼にNo入れるかと思ってたんだがww訓練されすぎだろww

290 ななし

一時間前の告知に気づいて配信に来るゆかきり信者だ…面構えが違う…

294 ななし

キリめっちゃ興奮してて笑うww

295 ななし

ロレツ回ってないけど結婚連呼してるのわかるww
結婚認められて嬉しかったんだね、良かったねww

301 ななし

ユカリ押し倒されたww

これは事案だな。ユカリ逮捕乙

302 ななし

キリ行け！そのまま一線超えるんだ！

あ、警察には連絡いれときますね。

303 ななし

今、必死に画面に向かってキリを応援してる自分に気づいて笑ったww

ユカリ、いいやつだったよ…

305 ななし

小学五年生に簡単に押し倒されるって貧弱過ぎない？

これは誘い受けなのでは？

誘ってるってことはユカリ側に責任があるのでは…？

305 ななし

そもそも好意を向けられてる女子小学生と同じ部屋にいてお膝抱っこしてる時点でユカりに過失ありだな…。誘惑されたキリは不可抗力だろ、ユカりは有罪だが

307 ななし

押し倒された方が逮捕される不思議ww

ユカリ減刑のための嘆願書でも作っとくか…

310 ななし

「ほらっ！ほらっ！プロポーズ!!つまり私たち100%結婚しちゃってますよ!責任、責任とってください!!」

そうだぞユカリ、責任は取れ。取って逮捕されるまでが求められてるぞ

311 ななし

お目目グルグルなキリに睨まれてアワアワしてるユカリかわいいww

312 ななし

本人達はめっちゃ真剣にわちゃわちゃしてるのにはほえましく感じてしまうww

313 ななし

10%結婚↓100%結婚（20分後）

展開が早すぎるww

358 ななし

あ

359 ななし

チツ：：

361 ななし

神はいない

365 ななし

まあ、小学生だからな。押し返えされるよな流石に。

でも惜しかった

367 ななし

あの状態からエツな展開に行けないなんて…

369 ななし

この展開が同人誌にあつたら破り捨ててる

370 ななし

だがキリは小学生で四天王最弱。幼馴染とか第二第三のエツチな刺客が今度こそユカリを：

372 ななし

四天王（最低10人）

401 ななし

何かあやされてるぞ

402 ななし

ユカリママ？

402 ななし

ママ味溢れてる

403 ななし

キリが動物染みた鳴き声出してる。

あれ、攻守逆転？

443 ななし

え、キリ眠った？

4 4 6 ななし

ユカリの手際良すぎて怖いんだがw w

配信外の普段でもこんな展開良くあるのかねw w

4 4 8 ななし

手際良く小学生を無力化して意識を奪うユカリ

4 4 9 ななし

事案だな・・・

4 5 0 ななし

やっぱり逮捕案件なのでは？

4 5 6 ななし

おい、お前らユカりに怒られてるぞw w

4 5 7 ななし

さーせんw w

4 6 0 ななし

「キリちゃんは小学生だからあんまりエッチなことをコメントするのは控えて・・・」

あの、好意抱いている小学生抱きしめて胸に顔埋めるのはエッチなことでは・・・？

4 6 1 ななし

身動きとれないように押さえつけて耳元で囁いて優しい手つきで寝かしつけられるとか、下手な行為よりエッチだよな。いかん、このままではキリの性癖がグニヨングニヨンにひん曲がって…

462 ななし

もう既にキリの性癖、ユカリの形になってそうだけどな。手遅れ間ハンパないww

472 ななし

あ、配信終わるか。まあキリも眠っちゃったからしやあないか。

473 ななし

自慢しまくって満足そうなキリの寝顔見て、母性溢れるユカリの表情好き

474 ななし

ああ、終わってしまった。

476 ななし

初顔出し配信最高だったけど、ゆかきりがエッチなゆかきりする展開が無かったのが残念…

477 ななし

壁サーの絵師さん含めて10人弱が、SNSでゆかきり同人誌作るって言ってたぞ。

そつちで我慢しな

478 ななし

ゆかり同人誌助かる…。あれ？って事は作った同人誌、キリに検閲してもらおうの？

479 ななし

いやだから、小学生にエロ同人誌データ送ったらマジで捕まるだろww

480 ななし

ㄹ 479 俺のお気に入りな絵師さんも同じ事考えたらしくて、キリじゃなくてユカリに送る予定らしいよ。ついでにジャンルはキリが攻めらしい

481 ななし

自分が小学生に責められるエロ同人誌が事前に送られる系配信者ユカリ

482 ななし

あれ、でもユカリって成人してるの？

483 ななし

あ

484 ななし

あ

485 ななし

： 高校生くらいに見えたな。

486 ななし

キリの幼さに目がくらんでたけど、ユカリも未成年っぽかったな

487 ななし

いやでも、ほら、公式にちゃんと許可取らないとダメじゃね？

489 ななし

普通公式に許可取らんよ同人誌はww

許可じゃなくて、ユカリに見せる事自体が目的だろww

490 ななし

【悲報】絵師さん、落とし穴を避けたつもりが着地先に別の落とし穴があった

491 ななし

でも、ユカリにゆかきり同人誌見てほしいな…

492 ななし

∨ 491 めっちゃわかる。こっそりエッチなゆかきり同人誌見てるのをキリに見

つかって、「ユカ姉ってこういう趣味だったんですね…へえ」的なエロ展開に行ってほ

しい

493 ななし

そこから吹っ切れたユカリがキリを分かせ展開希望

494 ななし

は？キリの鬼畜攻めだろ

495 ななし

攻めがキリなのは良いけど、キリのヘタレ攻めが良いな。さっきの配信最後のユカリの包容力見たる？キリを優しく受け入れてあげてほしい。

496 ななし

ゆかきり本、数冊持つてるけど巻末のオマケでユカリ逮捕オチが多くて笑うww

497 ななし

お前らの発言聞いとると全部見たいなww

それと全部の同人誌ユカリに見てほしいww

500 ななし

どうすればゆかきりイチャエロ本を（合法的に）ユカリに見てもらえるのか、考えるべきだな…

以下、ゆかきり同人誌の話題で1スレ消費した模様